

# 武藏国分寺跡発掘調査概報

XI

—北方地区・佐藤国分寺共同住宅増築工事に伴う調査—

1987年3月

国分寺市遺跡調査会



## 序

国分寺市遺跡調査会は、旧武藏国分寺遺跡調査会と旧恋ヶ窪遺跡調査会を発展的に解消し、合同再編成して、昭和61年4月に発足いたしました。旧両調査会の掲げた所期の目的がほぼ達成されたのを受け、過去12年間の足跡を踏り返り、現況における問題点を挙出し、今後の課題と展望の上に立って、武藏国分寺跡をはじめとする市内遺跡の調査・研究、保存・整備、活用事業を推進する第一歩として、新たな体制に切り替えた次第であります。

武藏国分寺跡におきましても、僧寺と尼寺の寺地区画に數度の変遷があることや、本跡が二寺を中心として東西2km、南北1.5kmの範囲に広がる掘立柱建物跡・竪穴住居跡群より成り立ち、都市的様相を呈していたことなどが明らかになってまいりました。これらにつきましては、昨年刊行されました『国分寺市史 上巻』の中で詳らかにする機会が与えられました。とはいへ、まだまだ断片的、表面的把握にとどまっており、今後は全体像の解明へ向け尽力を傾注していく所存であります。

さて、調査会事業の大きな柱として、各種土木工事等開発に伴う事前の発掘調査があります。毎年に増加する傾向にありまして、限られた体制の中での対応は困難を極めており、調査団のご労苦はいかばかりかと察せられます。わけても、出土品整理・報告書刊行作業の遅延を招来し、未整理・未報告資料が山積している現況であります。これら掘り出されたまま埋もれている資料の公表は急務といえましょう。

幸い今回調査におきましては、長期に亘る発掘・整理におきまして、佐藤威彦氏をはじめとして多くの方々より多大なるご協力・ご指導・ご助言を賜り、全ての作業を滞りなく終え、ここに報告書を上梓することができました。厚く御礼申し上げます。

本調査による成果は本文のとおりでありますが、先に刊行しました『武藏国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ－佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査』ともども広く活用されますことを願ってやみません。本書が国分寺市域の歴史の解明に少しでも供することができますれば幸いです。ご叱正を乞う次第であります。

昭和62年3月

調査会長（国分寺市文化財保護審議会委員長）

星野亮勝



## 例　　言

- 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武藏国分寺跡に於いて昭和48年以来実施されている調査の内、第201次調査：佐藤国分寺共同住宅増築工事に伴う調査の成果をまとめたものである。
- 調査地は、国分寺市西元町一丁目2448～1-10に所在し、全面積1153.425m<sup>2</sup>、所有者は[REDACTED]氏外3名である。
- 発掘より報告書作成に至る調査に係る費用は[REDACTED]氏が負担した。昭和59年6月2日付にて締結した委託契約に基き、武藏国分寺遺跡調査会が事業を実施し、昭和61年4月1日以降は国分寺市遺跡調査会に継承して事業を完遂した。
- 現地における調査は、昭和59年7月3日より昭和60年5月22日までを行い、報告書作成作業は昭和62年3月31日まで国分寺市遺跡調査会事務所（国分寺市西元町1-15-15）で行った。
- 現地における調査より報告書作成に至る作業は、滝口宏團長の指導・助言のもと調査員福田信夫が担当し、河内公夫（調査員補）がこれをたすけた。
- 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の協力・参加を得た。厚く御礼申し上げます。（順不同、敬称略）。

星野亮勝・吉田格・佐藤敏也・有吉重蔵・上村昌男・広瀬昭弘

株式会社巴組織工所（穴倉義昭・細田清・大嶋正敏）

発掘（全員、※は整理共）

※ 岩崎洋・稻井亮・久保田悦司・河合正樹・川島幸雄・南純一・関口恒男・宮井義徳・松村秀行・江幡尚人・飯田正人・高橋勝範・奥村武久・山下裕史・向後英治・柴田栄・佐久間章貴・藤本進・佐藤則博・中村光政・吉岡史人・小川恭範・中山雅仁・寺西成人・相原和樹・秋池勝利・佐々木正和・林伸明・君塚重彦・喜屋武悟・雨宮毅・渡辺一美・大元進太郎

整理（※は原稿浄書・校正）

川岸みつ子・八高昭枝・小峰ミヨ子・小林幸江・野中節子・岡ミサオ・永沢昭子・鈴木洋子

測量（コクサイ航測株式会社）・気球写真（サンシャイン工業株式会社）

## 凡例

### 本文

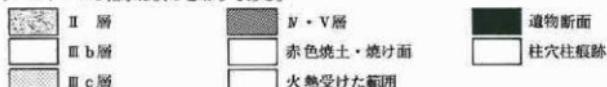
- 遺構は、各遺構毎にはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「S I 325住居跡」・「S K 825土坑」の様に記述する。その番号は本跡全体に於ける登録番号であって、本調査区のみで完結しない。

S A 横跡・柱穴列	S I 住居跡・工房跡	S X 特殊遺構
S B 据立柱建物跡・礎石建物跡	S K 土坑・瓦窯	P 歴史時代ピット
S D 溝跡・溝状遺構	S S 集石・配石	P J 繩文時代ピット
- 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」(1972『考古学雑誌』58巻2号所収)での名称によった。
- 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置した面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。
- 文字瓦の銘記方法については、大川清氏の「武藏国分寺古瓦塚文字考」(1958)と「瓦塚」(1970『新版考古学講座』7巻所収)での分類名称によった。

### 図面・図版

#### 1. 遺構

- ①遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表す。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また、僧寺中軸線の方針は発掘南北基準線と一致し、南北から $7^{\circ} 08' 03''$ それぞれ西偏する。
- ②断面図表示の数字は水系レベルで、海拔高を示す。
- ③スクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ④歴史時代住居跡平面図において、床面の硬軟を四段階に区分した。三点鎖線で示す範囲はa(堅固)、二点鎖線で示す範囲はa'(やや堅固)、一点鎖線で示す範囲はb(やや軟弱)、それ以外はc(軟弱)とした。又、ピット内(脇)の一符合を付した数字は、床面(もしくは検出面)からの深さを示す。(センチメートル)

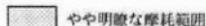
- ⑤歴史時代住居跡遺物分布図における記号は次のとおりである。▲(土師器壺・塊)、△(土師器甕他)、▲(土師器、器形不明)、●(須恵器壺・塊)、○(須恵器甕他)、◎(須恵器、器形不明)、▲(土師質土器壺・塊)、◎(土師質土器、器形不明)、■(施釉陶器)、□(瓦塚類)、★(鉄製品)、☆(石製品)、○(繩文土器、甕、他)。この内断面への投影は幅1mに限った。なお、図中の数字は遺物図面番号で、例えば「21-1」とあれば、「図面21-1」のことを示す。

- ⑥範尺は次のとおり統一した。

発掘区全体图1/200、建物跡・住居跡・溝跡・土坑他1/50、カマド1/25、火葬墓1/25

#### 2. 遺物

- ①繩文石器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ②打製石斧、スタンプ形石器において、側縁に沿う実線は、つぶれの範囲を示す。

- ③歴史時代土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ④写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば、「21-1」とあれば、「図面21-1」のことを示す。

- ⑤縮尺は次のとおり統一した。

### 【図面】

繩文時代土器・石器 $\frac{1}{1}$  (石鎌 $\frac{1}{1}$ )、歴史時代土器類 $\frac{1}{1}$ 、同瓦塚類 $\frac{1}{1}$ 、同鉄製品・土製品 $\frac{1}{1}$

### 【図版】

繩文時代土器・石器 $\frac{1}{1}$  (石鎌 $\frac{1}{1}$ )、歴史時代土器類 $\frac{1}{1}$ 、同瓦塚類 $\frac{1}{1}$ 、同鉄製品・土製品・自然遺物・骨 $\frac{1}{1}$

## 本文目次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査に至る経過	1
II 調査地区の概観	7
1. 調査地区的位置・立地	7
2. 層 序	8
III 発掘経過	10
IV 歴史時代の調査	13
1. 検出遺構	13
(1) 捩立柱建物跡	
(2) 壁穴住居跡	
(3) 清 跡	
(4) 土 坑	
(5) 火葬墓	
(6) ピット	
2. 出土遺物	24
3. 小 結	37
V 繩文時代の調査	45
1. 検出遺構	45
2. 出土遺物	49
3. 遺物包含層の発掘	51
4. 小 結	53
VI 先土器時代の調査	57
VII 結語に代えて	58
参考文献	60

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 .....	5
第2図 調査地区的位置 .....	6
第3図 標準層序 (G L86・87区南壁) .....	9
第4図 歴史時代遺構平面全体図 (縮尺1/200) .....	14
第5図 火葬墓の分布図 .....	42
第6図 繩文時代遺構平面全体図①Ⅲc層上面 (縮尺1/200) .....	46
第7図 繩文時代遺構平面全体図⑥N層上面 (縮尺1/200) .....	47
第8図 土器出土分布図 (縮尺1/200) .....	54
第9図 石器出土分布図 (縮尺1/200) .....	55
第10図 磚出土分布図 (縮尺1/200) .....	56
第11図 発掘深度図 .....	57

## 表 目 次

第1表 調査工程表 .....	11
第2表 歴史時代出土遺物一覧(1)	
↓	
第12表     "      (II)	26
第13表 住居跡出土土器群の組成 .....	38
第14表 石器計測表 .....	51

## 図 面 目 次

図面1 SB78・80孤立柱建物跡実測図	
図面2 SI325住居跡実測図	
図面3 SI325・326住居跡実測図	
図面4 SI326住居跡実測図	
図面5 SI326・327住居跡実測図	
図面6 SI327住居跡実測図	
図面7 SI327住居跡実測図	
図面8 SI327・328住居跡実測図	
図面9 SI328住居跡実測図	
図面10 SI328住居跡実測図	
図面11 SD184・185溝跡、SX37火葬墓実測図	
図面12 SK819、SK820、SK821、SK822・823土坑実測図	
図面13 SK825・826・863土坑実測図	

- 図面14 S1325 住居跡出土遺物  
 図面15 S1325 住居跡出土遺物  
 図面16 S1326 住居跡出土遺物  
 図面17 S1326 住居跡出土遺物  
 図面18 S1326 住居跡出土遺物  
 図面19 S1327 住居跡出土遺物  
 図面20 S1327 住居跡出土遺物  
 図面21 S1328 住居跡出土遺物  
 図面22 SK825 土坑、S X37火葬墓、遺構外出土遺物  
 図面23 SK864J、865J、867J 土坑実測図  
 図面24 SK864J 土坑、遺物包含層、表土他出土土器  
 図面25 遺物包含層、表土他出土石器

## 図版目次

- 図版1 発掘状況  
 1. 発掘着手時状況（東から）昭和59年7月5日  
 2. 表土掘削状況（西から）昭和59年7月5日  
 3. 板敷き状況（北東から）昭和59年12月22日  
 4. 歴史時代遺構検出状況・全体（東から）昭和59年7月26日  
 5. 歴史時代遺構検出状況・東半（南から）昭和59年7月26日  
 6. 歴史時代遺構調査状況（東から）昭和59年9月12日  
 7. 気球による全景撮影状況・準備（南から）昭和59年12月23日  
 8. 縦文時代遺構調査状況（SK865J）昭和60年2月13日
- 図版2 歴史時代調査区全景  
 1. 全景（東から）  
 2. 気球による全景
- 図版3 SB78、80掘立柱建物跡  
 1. S B78全景（北から）  
 2. 2-2柱穴土層断面（東から）  
 3. 2-3柱穴土層断面（東から）  
 4. 3-3柱穴土層断面（北から）  
 5. S B80全景（南から）  
 6. 1-1柱穴土層断面（南から）  
 7. 2-1柱穴土層断面（南から）
- 図版4 S I 325 住居跡  
 1. 全景（西から）  
 2. 構築時全景（北から）  
 3. 遺物出土状態・下層（北から）  
 4. 南北土層断面（東から）

5. カマド全景（西から）
1. B・C期全景（北から）
2. C期遺物出土状態（東から）
3. A期全景（東から）
4. A期南西カマドE-E' 土層断面（東から）
5. A期南西カマド構築時（北東から）

図版5 S I 326住居跡

1. B期全景（東から）
2. 遺物出土状態（北から）
3. A期北カマド全景（南から）
4. B期南東カマド（北から）
5. 入口部全景（北から）

図版6 S I 327住居跡

1. 全景（北から）
2. 遺物出土状態（東から）
3. 南北土層断面（西から）
4. カマド東西土層断面（南から）
5. 入口部土層断面（東から）

図版7 S I 328住居跡

1. SD 184全景（西から）
2. SD 184 B-B' 土層断面（西から）
3. SD 185全景（東から）
4. SD 185 A-A' 土層断面（東から）
5. SD 185 B-B' 土層断面（東から）

図版8 SK 819~823土坑

1. SK 819全景
2. SK 819南北土層断面（東から）
3. SK 820・821全景（北から）
4. SK 820・821全景（東から）
5. SK 820南北土層断面（西から）
6. SK 821東西土層断面（北から）
7. SK 822・823全景（北から）
8. SK 822東西土層断面（南から）
9. SK 823南北土層断面（東から）

図版10 SK 825・826・863土坑

1. SK 825全景（北から）
2. SK 825遺物出土状態（東から）
3. SK 825構築時①カマド部分（北から）
4. SK 825構築時②SK 826土坑全景（東から）

5. SK 825南北土層断面（東から）
6. SK 825南北土層断面（西から）
7. SK 863全景（東から）
8. SK 863東西土層断面（南から）

図版11 S X37火葬墓

1. 上面検出状態（東から）
2. 東西土層断面（南から）
3. 骨蔵器検出状態（東から）
4. 骨蔵器検出状態（北から）
5. 掘り方全景（東から）
6. 掘り方全景（北から）

図版12 S I 325 住居跡出土遺物

図版13 S I 325・326 住居跡出土遺物

図版14 S I 326 住居跡出土遺物

図版15 S I 326・327 住居跡出土遺物

図版16 S I 327 住居跡出土遺物

図版17 S I 328 住居跡出土遺物

図版18 SK 825 土坑、S X37火葬墓、遺構外出土遺物

- 図版19 繩文時代全景、遺物出土状態
1. 調査区東半部全景（北から）
  2. 調査区東半部全景（西から）
  3. 調査区東半部遺物出土状態（北から）
  4. 調査区西半部全景（東から）
  5. 調査区西半部全景（北から）
  6. 調査区西半部遺物出土状態（東から）

- 図版20 SK864J・865J・867J土坑
1. SK 864J 全景（南から）
  2. SK 864J 東西土層断面（北から）
  3. SK 865J 全景（南から）
  4. SK 865J 東西土層断面（南から）
  5. SK 867J 全景（東から）
  6. SK 867J 南北土層断面（東から）

図版21 繩文土器

図版22 繩文土器・石器

- 図版23 先土器時代調査区
1. 全景（南から）
  2. 南壁土層断面（北から）
  3. 発掘終了状況（西から）昭和60年5月22日



## I 調査に至る経過

〔氏〕より昭和58年4月24日付国教文取第277号にて、国分寺市西元町一丁目2448-1・10番地に共同住宅を増築したい旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛届出がなされた。

当該地の南側に於ては、昭和55年4月1日より同年10月31日迄、同氏外3名による同規模の共同住宅建設に伴う発掘調査（第107次調査<sup>(1)</sup>）が実施されており、隣接地（第3次調査＝リオ<sup>(2)</sup>ン厚生会館建設地、第51次調査＝KDD社員寮建設地）等における調査結果よりみて、先土器時代、縄文時代、歴史時代の住居跡をはじめとする遺構の存在が予想されることから、事前に発掘調査を実施する方向で協議を進めることとなった。

なお、工事計画の概要は、共同住宅（ベタ基礎、3階建、12戸）増築工事と付帯工事（給排水・外灯他）で、掘削面積が508.3m<sup>2</sup>というものであった。

協議は、届出入代理〔氏〕、設計・施工会社（巴組織工所）穴倉義昭氏、と教育委員会文化財課（田倉・有吉・福田）の間で、4度（第1回：昭和58年10月31日、第2回：昭和58年12月23日、第3回：昭和59年4月21日、第4回：昭和59年5月19日）に亘り行われた。以下に経過の概要を記す。

第1回において工事計画の詳細につき説明を受け、埋蔵文化財の取り扱いにつき説明を行った。事前に発掘調査を実施することの合意を得た上、調査実施にあたっての諸条件（排土処理は届出入が実施、埋戻しは行わない、現地事務所を置く）で了解を得たので、調査計画書を作成することとなった。

第2回において、遺構・遺物の数量等の予測を立てにくいことから、調査計画書2案を提示した。即ち、第1案（周辺において最も密度の濃い地区を参考とした場合、現地14.8ヶ月、室内29ヶ月、経費26,133,000円）と第2案（前回調査地：第107次調査地と同程度かやや少なめと予測した場合。但し、期間延長の可能性が高いことと、その後の協議について明記する。現地約10.3ヶ月、室内19ヶ月、経費18,904,000円）で、何れの案においても從前より調査体制が整っていないことを勘案した。

第3回協議冒頭において、調査計画2案検討の結果、第2案でお願いしたい旨回答がなされた。但し、経費の点で前回実績と比べ全体で2倍近いので物価上昇等加味しても了承できないことから減額の強い要望が示された。文化財課よりは、体制不備－調査員の不足や作業員の雇用形態の変更（2ヶ月更新、最長4ヶ月）からおこる定着率の悪化及び有経験者の不足などのために、日数増、人員増を見込まなければならないことを説明した。

第4回において、文化財課より、整理作業計画の内、体制を変更し、調査員補、整理補助員を投入することにより賃金（整理作業員）を減額し、さらに予備費を削除する等の修正案を示

し、合意するに至った。以下その概要を示す。

- (1)調査対象 建物本体の入口部施設・外灯・浸透槽・給排水・ガス管接続部分並びに影響範囲各々周囲 1.5 m の範囲で、発掘深度は工事による掘削深度及び影響範囲（建物本体等 G L - 1.0 m ± 0.1 m、外灯 G L - 1.4 m ± 0.1 m、浸透槽 G L - 5.0 ± 0.5 m）とする。面積 637.407 m<sup>2</sup>。但し、調査範囲外へ延びる遺構の内、住居跡・土坑などまとまりのあるものについては拡張して遺構全体を調査するものとするが、経費・期間共契約内におさめる。
- (2)時代 先土器・繩文・奈良・平安の各時代について行う。先土器については、外灯・浸透槽部分のみとする。
- (3)期間 現地 165 日間（約 10.3 ヶ月）、室内 380 日間（約 19 ヶ月）。但し、遺構・建物等の予測数量を前回と同程度かそれ以下に見込んでいるので、期間延長の可能性が高い。延長については別途協議し、契約変更を行う。以上明記する。
- (4)経費（委託費） 届出入の負担とするが、器材その他調査会より提供できるものはこれを使用する。  
総額 15,345,000 円。調査の進行に支障をきたさないよう 6 回に分割して支払うものとする。
- (5)体制 調査員 1 名、調査員補 1 名、発掘作業員 8 名前後、整理作業員 4 名前後。
- (6)その他 表土及び二次残土処理（場外処分）、仮囲い、現地作業事務所建設等は届出入にて行う。埋め戻しは行わない。  
かくして、昭和59年 6 月 2 日付にて、[ ] 氏と武藏国分寺遺跡調査会との間で発掘調査委託契約が締結された。期間は昭和59年 7 月 4 日から昭和62年 3 月 31 日迄、現地調査は昭和59年 7 月 4 日から昭和60年 5 月 31 日迄とした。

註(1) 武藏国分寺遺跡調査会（所長滝口宏） 1982『武藏国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ』

(2) " 1979『武藏国分寺跡 武藏国分寺遺跡調査会年報 1974』

(3) " 1985『武藏国分寺跡発掘調査概報Ⅷ』

## 【旧調査体制】

## 武藏国分寺遺跡調査会組織

(昭和59年7月～昭和61年3月)

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会长
"	大島外治	国分寺市教育委員会委員長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
"	大川 清	国士館大学教授
"	坂浩秀一	立正大学教授
"	本多良雄	国分寺市長
"	長谷川 隆二郎	国分寺市助役
"	翼津精二	国分寺市教育委員会教育長
"	永井佳雄	東京都教育庁文化課副主幹
"	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
"	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松井新一	"
"	吉田格	"
"	藤間恭助	"
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
"	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育課長 (S.59.10. 就任、 S.60.10. 以降部長兼任)
"	清水武	" (S.59.9 退任)
事務局長	關口雄基臣	国分寺市教育委員会教育次長 (S.60.10二部制施行に伴い退任)
"	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育部長 (S.60.10二部制施行に伴い就任)
事務局長補佐	大井川武彦	東京都教育庁文化課埋蔵文化財係長
"	安田暉	国分寺市教育委員会文化財課長 (S.60.10.7 退任)
"	關口信良	" (S.60.10.7 就任)
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
"	鈴木晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

## 調査団

調査團長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会长
調査副團長	永峯光一	" 委員
"	大川 清	国士館大学教授
"	坂浩秀一	立正大学教授
調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財保護係員
"	福田信夫	"
"	上村昌男	"
"	三木 弘	国学院大学大学院

## 【新調査体制】

## 国分寺市遺跡調査会組織

(昭和61年4月発足～現在)

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会长
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
"	坂瀬秀一	"
"	大川 清	国士館大学教授
"	本多良雄	国分寺市長
"	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
"	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
"	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議長
"	藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会委員
"	佐藤敏也	"
"	松井新一	"
"	吉田 格	"
"	永井佳雄	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
"	山田 弘	国分寺市教育委員会社会教育部長
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
"	高津喜三雄	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長

## 式典国分寺跡調査・研究指導委員会

委員長	滝口 宏	(考古)
委員	永峯光一	( " )
"	坂瀬秀一	( " )
"	大川 清	( " )

## 事務局

事務局長	間口信良	国分寺市教育委員会社会教育部文化課長
事務局員	田舎武市	国分寺市教育委員会社会教育部文化課庶務係長
"	鈴木 晃	国分寺市教育委員会社会教育部文化課庶務係員

## 調査団

調査団長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会长
主任調査員	有吉重藏	国分寺市教育委員会社会教育部文化課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化課文化財保護係員
"	廣瀬昭弘	"
"	上村昌男	"
"	実川順一	"
"	三木 弘	国学院大学大学院博士課程後期





第2図 調査地区の位置

## II 調査地区の概観

### 1. 調査地区の位置・立地

調査地区は国分寺市西元町一丁目 2448-1・10番地に所在し、武藏国分寺跡の一画を占めている。標高77mほどの武藏野台地・武藏野段丘面上に立地する。

武藏野台地は、関東山地南部の奥多摩に源を発する多摩川と関東山地北部の秩父山系に源を発する荒川とにはさまれる扇状地形の洪積台地であり、その西南縁には、国分寺崖線と府中崖線と呼ばれる崖（ハケ）があり、国分寺崖線により武藏野段丘面と低位立川段丘面とに分けられている。この崖線は国分寺付近で比高差12mほどある。崖下よりは湧水が豊富に湧き出している。調査地区的東側の道を200mほど南下した崖下に真姿弁財天がまつられている真姿の池があり、今では市内で最も水量が多い湧水がみられる。湧水はやや南下して、西方の現国分寺裏山から流れくる湧水と集合し、小川となって東へ蛇行しながら進み（元町用水とよばれる）東元町三丁目の不動橋の所で恋ヶ窪の湧水を集めて下流する野川の本流と合流する。野川の本流は開折谷を形成しており、調査地区的東約200mでその谷壁斜面となる。東元町三丁目21の東急分譲地西端の谷壁下からは今も豊富な水量の湧水（下水側溝にみられる）がみられ、これが形成した谷が台地の奥まで北西方向へ浅く延びている。調査地区においては、西南から北西へかけゆるやかな下り傾斜となるのは、この谷の影響と考えられる。

さて、調査地区は、都道145号（国立一国分寺）線を30mほど南へ入ったところで、南側は昭和54年調査の佐藤氏国分寺アパート、北西側は同氏他所有の林地となっている。東の道路をはさんでリオン株式会社があり、西側には広大な敷地の郵政省住宅があって閑静な住宅地となっている。

武藏国分寺跡の主要部は崖下におかれたが、溝跡で区画する寺地の範囲は、台地上まで延びている。調査地区は寺地・寺域の北辺溝より約130mにある。武藏国分寺跡の発掘基準線中心点より北へ393.5～416m、東へ219～264mにあたり、僧寺金堂中心より直径距離で約494m（調査地区中心まで）を測る。

武藏国分寺跡の北方域にあたる本調査地周辺では、第51次調査、第72次調査、第107次調査、第127次調査、第168・190次調査<sup>(3)</sup>、第200次調査<sup>(4)</sup>、第218次調査<sup>(5)</sup>など中規模の調査が実施されている。台地縁辺部において、平安時代前期の遺構・遺物が若干みられるほかは、平安時代後期の掘立柱建物跡、堅穴住居跡などが重複することなく散在し、一部は溝跡などの区画施設に規制された計画的配置を示していることなどが判明している。

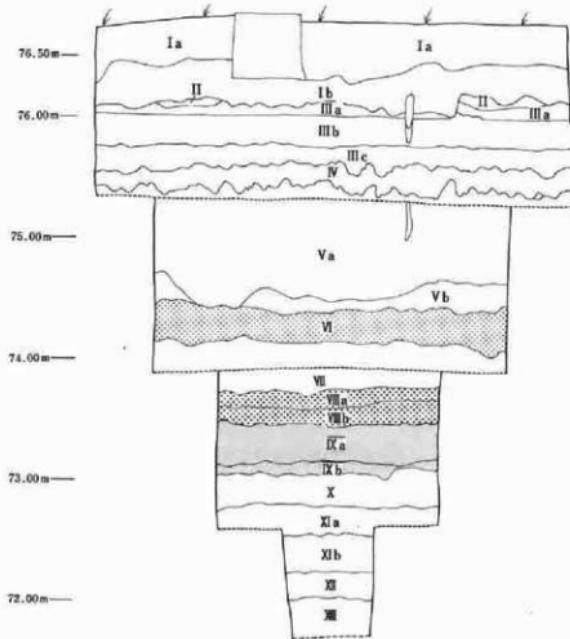
このほか、先土器、縄文時代における遺構・遺物も、第107次調査において、第51次調査ほどの内容はないものの、先土器時代ユニット・疊群、縄文時代土坑（早期）や土器片（早・前

・中期)、石器(石鏃、スタンプ形石器、打製石斧等)などが検出されているので隣区においても同様と予測し、調査に臨んだ。

## 2. 層序

調査地区は武藏野段丘上の平坦地であり、ほぼ単純な層序を示す。以下にその基本層序を概述する。図は、調査区南東隅の断面である。(G L86・87区南壁)

- Ia 層 盛土。ローム・砂利その他の客土、調査区南半と東端にみられる。10~40cm。
- Ib 層 表土。
- II 層 黒褐色土。粒子粗く、粘性に欠く。遺構内の堆積土に酷似する。調査区南東域にあっては、ほとんど認められない。10cm前後。
- IIIa 層 黒褐色土。やや茶褐色味を帯びる。締まり、粘性あり、Ⅲ層の上部で、Ⅱ層に近い部分。Ⅱ層・Ⅲb層との境は漸移的。10~15cm。調査区全域においてみられる。縄文時代遺物を出土する。
- IIIb 層 暗茶褐色土。下部ほど褐色味強い。縄文時代の遺物を多く出土する。歴史時代遺構の大半が該層上面にて検出し易くなる。
- IIIc 層 茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干出土する。縄文時代の遺構は本層上面にて検出がやや容易となる。
- IV 層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。縄文時代遺構の大半が、本層上面にて検出が容易となる。なお、調査による掘削深度は、先土器時代調査坑を除き、全て該層上面までとした。
- Va 層 黄褐色ローム。ハードローム。
- Vb 層 黄褐色ローム。ハードローム。Va層に比べスコリア粒少なく、暗い。
- VI 層 暗黄褐色ローム。立川ローム第一黒色帶。VI層の明るさによりその存在が判る。
- VII 層 黄褐色ローム。明るいローム。上部において径3~5cm大でブロック状で明るい。
- VIIIa 層 暗黄褐色ローム。
- VIIIb 層 暗黄褐色ローム。立川ローム第二黒色帶。VIIIa層よりさらに黒色味増す。
- IXa 層 黑褐色ローム。立川ローム第二黒色帶。VIIIb層との境は明瞭であり、より黒色味を増している。
- IXb 層 暗黄褐色ローム。立川ローム第二黒色帶。成分はIXb層で、Xa層より明るい。
- X 層 黄褐色ローム。次第に硬度増す。
- XIa 層 黄褐色ローム。硬度さらに強まる。
- XIb 层 暗黄褐色ローム。黄色味あるのは本層まで、IXa層より暗い。
- XII 層 暗褐色ローム。さらに暗くなり、粒子緻密となる。



第3図 標準層序 (GL 86 + 87 区南壁)

XIII層 暗褐色ローム。さらに暗くなり、緻密となる。硬度も増す。

- 註(1) 既報告 武藏国分寺遺跡調査団(团长滝口宏) 1980 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報N」
- (2) 未報告 昭和56年5月～7月調査
- (3) 既報告 武藏国分寺遺跡調査団(团长滝口宏) 1985 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報K」
- (4) 未報告 近刊予定 昭和59年6月～11月調査
- (5) 未報告 昭和59年11月～12月調査

### III 発掘経過

昭和59年6月2日に調査委託契約を締結した後、7月4日の現地着手へ向けて諸準備を進めた。発掘器材と作業員について確保した上、6月22日に届出入側の工事設計・施工業者（巴組鐵工所東京支店大嶋氏と細田氏担当）と④立木伐採・処理、②表土排土（場外搬出）、③調査範囲の位置出し、④東側沿道掘削部分の山留め・保安柵設置、⑤現場事務所の設置などについて打ち合わせに入り、計画通り、7月5日より掘削を開始できるよう準備を進めることとなった。まず、③プレハブ現地事務所が6月26・27日で設置され、④立木伐採が引き続き6月30日まで行われ、7月2・3日で③調査範囲の位置出しが行われた。④については、調査会より国分寺市（建設部管理課）に沿道掘削許可申請、道路占用許可申請を6月25日に行い、6月28日に許可がおり、これを受けて、小金井警察署に道路使用許可申請を7月3日に行い、7月7日に許可がおりた。期間は昭和60年1月4日までとなつたので、12月26日に延長申請を行い、5月31日迄の期間で許可された。表土掘削が東側沿道に及んだ7月9日に保安柵を設置した。

7月3・4日で器材を搬入し、作業員の現地集合体制を整え、7月5日よりパワーショベルとダンプカーにより表土排土・場外搬出作業を開始した。7月11日迄にほぼ表土をとりおえ、7月19日までかかって遺構精査を行った。予測を上回り、掘立柱建物跡2棟、堅穴住居跡4軒（付属施設多い）、溝跡2条、火葬墓、土坑、小穴などが検出された。以後歴史時代の遺構調査は住居跡を主として、昭和60年1月25日まで行った。

（調査日数133日間、調査面積69,421.0m<sup>2</sup>）

歴史時代の調査の目途が立ち河内公夫氏の着任を受けて、昭和60年1月8日より歴史時代検出面でみられた縄文時代落ち込みと、縄文時代遺物包含層の発掘に着手した。

ほぼ予測通り、多く集中する範囲もなく、土坑と小穴などの遺構を検出し、予定通り進捗し、5月8日をもって終了した。（調査日数71日間、調査面積63,638.0m<sup>2</sup>）

先土器時代の調査は、外灯部分については歴史・縄文時代調査と併せていたので、調査区南東隅の溝遺構部分につき、5月8日より開始し、5月17日に終了した。（調査日数7日間、調査面積16,591m<sup>2</sup>）

以後片付け、器材撤収を行い、5月22日に全ての現地作業を終了した。総調査日数198日、調査面積69,421.0m<sup>2</sup>（内57,83m<sup>2</sup>について歴史時代のみ）、作業員延人数1437人。各遺構の調査進行状況については次表にまとめた。

全体としては、当初予測を上回る内容であったにもかかわらず、冬期に南半部が凍結した以外は天候にも恵まれたこと、体制不足の為期間の余裕をいただいたことなどが幸して、予定通り順調に進捗し、多くの成果を得て終了することができた。

年月日	昭59／7月			8月			9月			10月			11月			12月			昭60／1月			2月			3月			4月			員数
	5 10	20 1	30 1	18 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	10 1	20 1	30 1	
土日祝祭日換																														324	
雨天作業中止																														106	
実作業累計	10 20	30 1	40 1	50 1	60 1	70 1	80 1	90 1	100 1	110 1	120 1	130 1	140 1	150 1	160 1	170 1	180 1	190 1	200 1	210 1	220 1	230 1	240 1	250 1	260 1	270 1	280 1	290 1	300 1	186	
調査区全域																														68	
SB76,80																															12
SI325																															36
SI326																															50
SI327																															49
SI328																															50
SD184,185																															8
SK																															23
SX																															7
Pn																															33
包装等施設																															33
積文等代																															59
SKJ																															24
PJ																															33
先土器時代																															7
備考	調査開始		「歴史時代調査実績」																												調査終了

第1表 國史工程表



## IV 歴史時代の調査

### 1. 検出遺構

本調査によって発見された歴史時代遺構は、下記に列挙する掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡4軒、溝跡2条、土坑8基（内1基はカマド状施設を有する土坑）、火葬墓1基、ピット（小穴）51個で、竪穴住居跡がいづれも北側で発見されるなどの偏りはあるが、ほぼ全域にわたっている。検出面、堆積土、出土遺物などから該期のものと判断した。

掘立柱建物跡：S B 78・80 竪穴住居跡：S I 325・326・327・328

溝跡：S D 184・185 土坑：S K 819・820・821・822・823・825・826・863

火葬墓：S X37 ピット：P-1～51

I層（盛土・表土）が40～60cm、II層（黒褐色土）が5～10cm前後あったことから、遺構の残存状況は比較的良好であった。

遺構の検出は、前回（107次：南側）のデータにもとづき、機械力を併用して実施し、確認が容易となるⅢb層上面でとめた。

II層との関係については幸い、4軒の住居とも土層壁にかかって検出されたので、注意深く観察したが、いづれも明瞭な切り合い関係は把えられなかった。S I 325・326 住居跡にあっては、壁の立上りをII層中に見出し得ず、II層が覆土を覆っている図としたが、住居上のIII層とIIIa層上のII層とは、前者がやや黒色味あるなどの相違点があった。S I 327住居跡にあっては、住居壁等のみII層が覆い、次第に住居内堆積土上面へと変化するものと把えたが、不確実であった。S I 328住居跡にあっては、壁周辺においてII層の堆積が良好でない為、その関係は明瞭でない。以上を総合すると、III層及び住居覆土の形成後の土壤変化なども加味する要があろうが、両形成期はかなり近接しているものと考えることができる。明瞭なる遺構堆積物（例えば、粘土・ローム等）などがあれば把え易いかと思われる所以、今後共注意していく。

#### (1) 掘立柱建物跡

S B 78掘立柱建物跡（図面1、図版3）

G M・G N83・84区に所在する。S K 819土坑が建物内に存する。東西2間×南北2間で9個の柱穴を検出する縦柱であるが、周辺調査区検出例よりみて調査区外の南へ1間延び、南北3間の南北棟になるものと思われる。桁行柱間1.7m等間にに対して梁行柱間1.85m等間と広がるなどの共通点を有することとなる。建物の規模は、東西総長3.17m、南北総長推定5.1m（検出3.4m）となる。柱位置は一直線に並ぶ通りはほとんど無い。桁行方位（発掘基準線に対する偏角以下同じ）はN 5°Eを示す。柱穴は径0.2～0.4mの円形で深さ0.2～0.65mと大

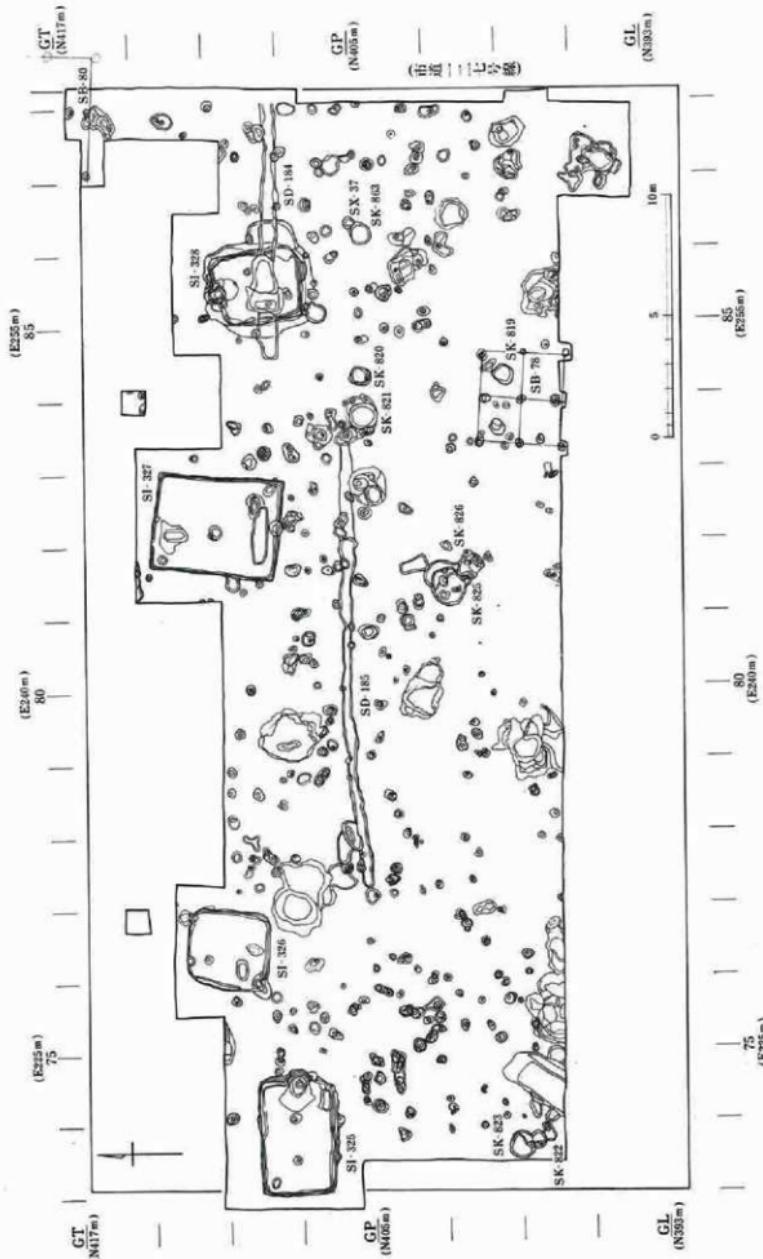


圖 4-1 歷史時代遺構平面全體圖（縮尺 1/200）

小様々である。掘り形埋め土は若干有るのみ。建て替えはない。出土建物はない。

S B 80 据立柱建物跡（図面1・図版3）

G S 87区に所在する。東西2.5mの間隔をおいて2個の柱穴を検出した。東接する第51次調査区道路部分で調査済の南北に3本の柱穴列（S A 5）の南端と直交する方向であり、柱穴規模が類似することなどから一つの建物跡として把えることとした。都合5本検出された柱穴は南北に2間（柱間2.5+2.2m）、南北に2間（2.1m等間）となり、西並びに東へ延びるものと思われる。柱穴の規模はS B 78に同じく、小規模で径0.3mの円形、深さ0.3~0.4mで、柱跡は径0.15mほどである。南北柱通りの方位はN 4°Eを示す。建て替えはない。出土遺物はない。

(2) 壁穴住居跡

S I 3 2 5 住居跡（図面2・3、図版4）

G P・G Q 73・74区に所在する。僧寺中軸線より北へ408m、東へ2215mの位置である。規模は、東西4.3~5.0m、南北3.0~3.1mの隅丸長方形で、北壁方位はN 90°Wを示し、中軸線に直交する。

第IIIa層上部より第IV層ソフトローム上面まで約0.5m掘り込んで、若干の貼床を施す。カマド周辺よりもむしろ西側のP-2の小穴を中心に堅固な範囲が広がっている。又、床面は壁から中央へ、そして、西から東へとゆるやかに下り傾斜となっている。周溝は、東壁のカマド下と南北を除き全周する。幅0.1~0.25m。深さは床面より0.1~0.15mを測る。北壁東半から東壁北半にかけて幅広く、浅くなっている。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられる。構築土はほとんど残らない為、上面では確認できなかった。壁外への掘り込みは、平面八字形、断面丸底状で、幅（南北）1.0m、奥行（東西）0.4mである。火床面は、長円形で幅0.6m、奥行0.8mでその中には、壁よりやや住居内へ入る。火床面は地山土（ローム）で0.1mほど赤色焼土化し、さらに0.1mほどまで火熱を受けていた。火床面上には瓦片が多く出土した。構築材の一部と思われる。カマドの前面の床はゆるく摺鉢状にカマド火床へと統いており、その幅は南北最大1.5m東西（火床西端より）0.6mを測る。東西土層断面によれば、カマド部分のみ、住居堆積土中層より、火床面近くまで、“掘り込み”がみられ、焼土粒少ない黒褐色土（14・15層）が堆積する。構築土がみられないのはこの為と思われる。

南東隅に長円形の落ち込み（P-1）を検出。東西1.0m、南北0.5m、深さ0.1m強。

住居中央部にP-2、P-3の2個の小穴が検出された。共に断面ラッパ形で、P-2は床面上の開口部径0.4m、本体部径0.2m、深さは0.4m。P-3も同様の規模であるが、床面より0.15mまで、埋められていた。従ってP-3→P-2の新旧関係となる。P-2上層には焼土粒が多くみられて、この2個の小穴は、壁際に掘り形埋め土と思われる層がみられ、堆積土下層は綿まり弱いことなどから、柱穴とみることができる。本住居の形態が、南北：東西で

約1:1.6と細長いこととの関連が考えられる。

堆積土は大きく上下2層に分けることができる。上層(1・2層)は、黒褐色土で焼土粒少なく、下層(3~8層)は黒褐色土~赤褐色土で、焼土粒多く含む層と焼土ブロック等より成る。焼土粒、焼土ブロックの分布範囲は、カマド前面を除くように住居西半部全体から、東半部の北壁沿と南壁沿であり、西に厚く(住居検出時に確認)東で薄い。床面直上の部分あり。

遺物は総数352点あり、その大半は、覆土上層や焼土・焼土ブロック層で、その上面より出土。主に住居の南東部に多くこれらは焼土の分布と似る。カマド火床面上の一群を除き、覆土上層から焼土内のものまで接合資料があることや、分布に相違がみられないことから一群のものとしてとらえることができる。従って、焼土は住居西方向より上器片、瓦片等は、住居北西方向より、各々東及び南東へむかって漸時投入されていったものと考えることができる。

#### S I 328住居跡(図面3~5、図版5)

GQ・GR75~77区に所在する。僧寺中軸線より北へ411m、東へ229.5mの位置である。規模は、東西3.0~3.2m、南北3.3mの隅丸方形で、北壁方位はN85°Wを示す。

第IIIa層上面より第IIIc層(ローム移動層)中位まで約0.4m掘り込んで、若干の貼床を施す。周溝は幅0.1~0.2m、深さ0.01~0.05mと浅く、南西隅カマド前面を除きほぼ全周する。但し、北壁下と南壁下では極めて浅く判然としない部分が多い。床面は西北部分と南西部分が若干高いばかりはほぼ平坦で、南西カマド前面が最も堅固にしまっている。

南西隅に住居外への掘り込みを有するカマドがあつて(A期西南隅カマド)、一部に埋め込んだ形跡がみられた。その前面にも“カマド”(長円形の火床面を検出)があつて(B期西南隅カマド)、貼床が施されている。さらに、北西部には僅かな焼け面(床)の痕跡がみられた。(C期焼け面の痕跡)。以上の中で、A期とB期は直接的に切り合い関係なく、共にC期以前に位置付けられるのであるが、床面の最も堅固な範囲がB期西南隅カマドを中心に広がっていることから、A期→B期→C期へと移行するものと考えられる。

A期西南隅カマドは、住居の西南コーナーに壁外の掘り込みを伴って設けられたもので、武蔵国分寺跡既検出例の中でも数少ない西南隅カマドである。壁外への掘り込みは幅0.8m、奥行0.8mで、断面は舟底状を呈する。火床面の中心は盤下にあり、火床は若干凹む程度。火床は、火熱を受ける程度で、径0.2m弱である。

残存状態は比較的良く、掛け口の天井部は構築材の女瓦と共に崩落していた(a~c層に相当)が、それ以外はローム・粘土を含む黒褐色土により女瓦・男瓦を芯材とする構築土が残っていた。b~h層は、掛け口部への埋め込み土と思われる。

本カマドは火床の被熱状態よりみて、短期間の使用が推定される。

次に、B期西南隅カマドとしたものは、火床面を残すのみのもので、S I 327住居内の屋内の両カマドと、位置(壁からの距離)・火床の規模などが類似することから、構築上は残存しないものの(それは、全て除去され貼床されていると考え)、同様の屋内のカマドととらえた。

床への掘り込みは長円形で幅（南北）0.5m、奥行（東西）0.9m、深さ0.06mと浅い。壁から掘り込み西端まで0.4m、掘り込み床面のほぼ中央付近が径0.3mほど火熱を受けていた（赤色焼土化せず）。堆積土中（主に西半）より土師器壊、甕、土師質土器壊など小片がまとまって出土している。上面には貼床が施されていた。

C期とした北西隅の焼け面痕跡は、西壁より0.9m、北壁より1.1mの位置の床が、径0.15mの範囲で火熱を受けているものである。北東コーナーとの間には多量の焼土と炭化物を含む黒褐色土が焼け面痕跡を馬蹄形状に取り囲んで、床面上に分布しており、土師器壊の完形が4個体、酸化焰焼成須恵器壊（4/3残存）が1個体のほか、土師器カメ片などがまとまって出土した。当初、B期南西隅の屋内のカマドと同様な施設かと考えられたが、明瞭な床への掘り込みは無かった。上部の構造は明らかでないが、何らかの調理施設があったものと考えられる。

南壁の中央、やや東寄りの場所で壁に接して、焼土粒・焼土ブロックを多く含んだ黒褐色土が東西0.4m、南北0.7mの範囲にあった。高さは床面より0.1m弱で、断面はカマボコ形、壁より住居面に向ってやや下り傾斜となっていた。上面のみ踏み固められた様に固く締まっていたことから、入口部施設の可能性がある。

堆積土はローム粒含む黒褐色土で、下層になるほど締まり粘性増すものの大きく1層としてとらえられる。遺物は住居西南に多く、上下全体にわたって出土している。接合資料は下層のものに多いが、上下で接合もしくは同一個体のものもありほぼ一群のものとしてとらえられる。又、A期西南隅カマド内出土のものと、B期西南隅カマド内のものと住居覆土下層のもので接合もしくは同一個体資料であることから、A～Cの各期は互いに近接した時間差を有していたものと考えることができる。

#### S 1 3 2 7 住居跡（図面6～8、図版6）

GQ・GR81～83区に所在する。僧寺中軸線より北へ411m、東へ247mに位置する。規模は東西4.0（北半）～4.2m（南半）、南北5.1～5.2mの南北に長い長方形で、やや南北部が大きい。壁は東壁を除き直線的であり、壁の立上りも直角に近いことが特徴としてあげられる。北壁方位はN83°Wを示す。

Ⅲa層上部よりⅢc層（ローム漸多層）上部まで約0.4m掘り込み床面とする。住居中央部は地山をそのまま床とし、周囲のみ0.05～0.1mほど貼床を施す。周溝は幅0.1～0.2m、深さ0.03～0.05mで、北カマドの北側北壁下の一部を除き全周する。入口部の下にもあった。

住居内の北西部に北カマド、南東部に南東カマド、中央やや西寄りに炉、南壁中央に入口部、住居北西隅に小穴（P-1）、南東隅にも小穴（P-2）、中央炉の北側に小穴（P-3）などのほか、西壁南半中央に壁外へ張り出す落ち込みがあった。以上の諸施設は貼床下検出の北カマド・P-3と、貼床のない南東カマド・炉・P-2・3に分けられる。入口部と張り出し部の構築時期は明らかでない。床は両カマドと炉・入口部を中心に堅固な範囲が広がっており、北東部は軟弱であった。

さて、北カマドは、床面精査時に検出され屋内に設けられたカマドで、幅 0.5 m、奥行 0.9 m の長方形を呈する火床部の掘り込みを持つ。壁より掘り込み北端まで 0.5 m、深さは床面より 0.05 ~ 0.06 m ほどである。掘り込みの南半中央部と周囲壁の一部は火熱を受け赤色焼土化していた。そして、この掘り込みの北半を馬蹄形状に開む様に、ローム + 炭 + 焼土の範囲が明瞭に他の床面と区別できて存在した。この面は床面として使用された面であるが、カマド構築土の基底部の範囲を示しているものと考えられる。その東西幅は約 1.5 m、奥行 0.9 m ほどである。その基底部の構築土を取り除くと、掘り込みの北半を開く様に、幅 0.1 ~ 0.25 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m で丁字形に掘りくぼめられていた。構築土、構築材の掘えつけ掘り形と思われる。構築材は出土していない。掘り込み内のカマド火床土部を中心にして図面 19-4・5・8 などの酸化焰焼成須恵器坏や同じく 19-11 などの灰釉陶器碗片などが、やまとまって出土している。掘り込みの方向は床面に対してやや南で東へ偏している。

南東カマドは、上層の発掘時においては検出されず、下層に至って、焼土粒・粘土粒の分布から検出されたものである。北カマドと 90° 方向をかえて、西より東壁に向う形となる。北カマドと同様に床面へ幅 0.5 m、奥行 0.9 m ほどの長方形の掘り込みを行っている。その深さ約 0.1 m で中央やや北東寄りの径 0.25 m の範囲が赤色焼土化していた。そして東半部を馬蹄形に取り開むように、構築土の基底部が僅かながら残存していた。その幅（南北）約 0.75 m、奥行（東西）約 0.6 m であった。構築土はローム、粘土、焼土を含む黒褐色土で、これを取り除くと、北カマドと似て 0.03 ~ 0.05 m と深い掘り形となっていた。最奥部に構築材と考えられる瓦片が火床方向へ横倒しになりながらも、構築状況を物語るあり様で出土した。又、火床最奥部には瓦が 1 つ立った状態で出土しており、支脚とされたものと思われる。火床部上にも瓦片（別個体）瓦片、埠片などが重なって出土した。何れも構築材に使用されているものと見られる。

炉は、南北 0.5 m、東西 0.6 m の不整円形で、床面より火床面まで 0.05 ~ 0.06 m で浅い摺り鉢状を呈している。火床面はほぼ全面火熱を受けていたが、赤色焼土化していたのは、その西半の一部で、0.12 × 0.18 m の長方形の範囲のみであった。火床は住居掘り形埋め土を用いて構築されており、これを取り除くと深さ 0.5 m ほどの小穴となった。

次に入口部は、黒褐色土を用いて築かれ、その上面（部）が固く締っていることから検出されたものである。幅 0.7 m、奥行きとして住居内へは 0.5 m 弱入り、壁外には約 0.1 m ほど固い部分があった。半円形を呈す構築土の上面は住居内に向って下り傾斜となり、床面へと続く。拳大の躰が 1 つ入っていた。

西壁にある壁外への張り出し部は、幅 0.5 ~ 0.6 m、奥行 0.7 m の丁字形である。底面まで検出面より約 0.1 m 下、住居床面より約 0.1 m 上となる。堆積土よりみて住居と一体のものと考えられる。

住居内堆積土は、ローム少ない黒褐色土の上層とローム茶褐色土が多く、締まり粘性ある黒

褐色土の下層に大別される。

遺物は総数230点と少なく、北東部を除き、西カマドと炉周辺に多い。

#### S I 3 2 8 住居跡（図面8～10、図版7）

G P～G Q 84～86区に所在する。僧寺中軸線より北へ409m、南へ257mに位置する。規模は、東西が2.9（北半）～3.1m（南半）で、南北は西壁で3.4m、東壁で3.9mとなってやや台形状を呈する。各壁は若干胴張り状となる。南壁で方位を測るとN92°Wを示す。

第IIIa層より、第IV層（ソフトローム）上部まで、住居中央部で0.6m、周囲で0.7m掘り込み、0.03～0.15mほど埋め土して床を形成する。床は周辺を除き堅固な範囲が広がる。カマド方向へ若干の下り傾斜となっている。周溝はカマド部分と南東隅を除き全周する。幅は0.1～0.3m、深さ0.01～0.03mと浅い。壁はほぼ垂直に立上る。壁周辺に浅いテラス状の落ち込みを有するのが本跡の特徴である。カマド部分を除く周囲にあり、その幅は壁より0.1～0.5mほどあり、壁の形状に合う様に各辺が胴張り状となる。深さは検出面から0.05～0.10mで、住居内へ向ってゆるやかに下る。床よりの高さは約0.3mほどである。南東部においては、さらに南北2m、東西0.9mの長円形の張り出し部がとりつく。その深さ0.02～0.03mと浅い。住居中央部の東西に対をなす様に小穴が検出された。径0.3m、深さ0.15m前後である。堆積土・形状よりみて柱穴と考えられ、いづれも壁外の掘り込み中にあることから、特殊な上屋構造を有するものと解される。

カマドは北壁の中央よりやや西寄りに設ける。壁外への掘り込みはU字形で幅0.7m、断面は舟底状である。火床は長円形で、幅が手前で0.55m、奥で0.35m、奥行は0.7m。手前中央部が0.03mほど凹み、径0.35mほどの範囲で赤色焼土化している。赤色焼土の厚みは0.07mほどあった。丁度、壁下となる。焼土域の最奥部に支脚とされた挙火の櫛が立っていた。構築土は両袖と西側壁の基底部のみであるが比較的良好に残存していた。ロームを多く含む黒褐色土を主体とする。両側壁は男瓦、女瓦片を用いて構築しており、ことに、左側壁は女瓦を立て四面を火床へ向けて、そのまま側壁としていた。

南壁の中央やや東寄りで入口部と考えられる硬質面があった。壁の途中にあって、階段状となっているもので、その幅0.8m、奥行は深さ0.2m、踏み面の奥行0.12mほどである。壁を断面し字状に掘り込み凹部に固く締まる黒色土を埋め込み上面を平坦にしている。踏み面より床面までの高さ0.23m、検出面までは0.16mを測る。

堆積土は、上・中・下層に大別され、下層ほど黒色味と締まり・粘性度が増し、ローム粒を多く含むようになる。曲型的なレンズ状の堆積を示し、自然堆積と考えられる。

遺物は、330点と比較的多い。が、多くは上中層より出土の小片資料で接合例が少ない。対して、カマド及び床直、覆土下層の一群は接合例も多く、分布状況においても若干の不整合が認められるので、一部に上層と下層のものが接合する例もあるが、各々別の一群とみることができる。

### (3) 溝 跡

#### SD 184 溝跡 (図面11、図版8)

GP・GQ84~87区に所在する東西溝である。東側の道路下での調査（第51次調査地道路部分）では検出されなかったが、浅く、良好な堆積土でない為、把握されなかったものと思われる。幅0.4~0.9m、深さ最大0.1mほどで延長1.05mを検出した。西端は僧寺中軸線の東253.6mでおわる。SI1328 住居跡を切って上に構築されており、堆積土は黒色味弱い黒褐色土であるが、時期は新しいものと考えられる。底面のレベルは東へいくに従い下る。レベル差は西端で0.13mほどである。遺物は還元焰焼成須恵器杯片が3点、酸化焰焼成須恵器杯片が1点のほか瓦片、礫片が若干ある。

#### SD 185 溝跡 (図面11、図版8)

GO・GP77~82区を調査する東西溝である。幅0.4~0.6m、深さ最大0.1mほどの浅い溝で西端は僧寺中軸線の東231.8m、東端は同じく251mまで、延長18.3mを調査した。東端付近は、底面付近のみ僅かに検出したにすぎない。浅い造構の為、検出面が深いと発見されないことが考えられる。底面のレベルは東へいくに従い下る。レベル差は両端で0.13mほどである。堆積土は小穴内のものに似て、締まりある黒褐色土で、小穴と重複して、切られるものが3例ある。遺物は還元焰焼成須恵器杯体部片が1点あるのみである。

### (4) 土 坑

カマド状施設を有する土坑1基（SK 825）と円形土坑3基（SK 821・826・863）、方形土坑4基（SK 819・820・822・823）の合計8基である。いづれも堅穴住居と重複することなく分布し、SB78掘立柱建物跡内に存するもの1基（SK 819）、その周辺にあるもの5基（SK 820・821・825・826・863）、離れて調査区西南隅にあるもの2基（SK 822・823）となり、この内重複関係有するものは、3例でSK 822とSK 823が重複し、SK 825とSK 826も重複し、SK 863はSX37と重複している。

#### SK 819 土坑 (図面12、図版9)

GM・GN84区に所在する。僧寺中軸線の北399m、東253mに位置する。SB78掘立柱建物跡内の北東部（2-2→3-2→3-3→2-3柱穴間）中央に位置する。第51次調査地区において掘立柱建物内にあるものが5例、建物外の近接位置にあるもの3例があって、その位置、方向などよりみて建物跡と土坑との強い関連性を指摘しておいたが、SK 819とSB78の関係はその類例を追加することになった。

本土坑の形態は不整方形ともいいうべきで、丸味を有する部分と直線的な部分がある。上面東西0.75m、南北0.8m。底面は第IV層（ソフトローム）上面で、検出面より0.25mを測る。壁はゆるやかに立上る。

#### SK 820 土坑 (図面12、図版9)

GO・GP84区に所在する。僧寺中軸線の北405m、東253mに位置する。SK 821土坑に

東接する。上面東西 0.8 m、南北 0.9 m を測る隅丸方形。第Ⅲc 層（ローム漸移層）上部まで約 0.3 m 剥り込み底面とする。壁の立上りはゆるく、断面丸底状を呈する。堆積土は黒褐色土（下層にはローム粒多くなる）で、SK 819 土坑と似る。

#### SK 821 土坑（図面12、図版9）

G O - G P 83・84区に所在する。僧寺中軸線の北 405 m、東 251 m に位置する。SK 820 土坑に西接する。上面東西 1.0 m、南北 1.15 m の長円形。深さ 0.7 m。底面は第Ⅴ層（ハードローム）上部。壁の立上りは急で、底面は丸底状となっている。堆積土は大きく上・下層に分けられ、上層はローム若干入る黒褐色土、下層はローム粗粒多く入る黒褐色土で、下層は人為的に埋めたものと思われる。遺物は上層より瓦片 3 点、疊 1 点、酸化焰焼成須恵器坏口縁部片 1 点の外、下層より酸化焰焼成須恵器坏口縁小片 1 点がある。

#### SK 822 土坑（図面12、図版9）

G M 73区に所在する。僧寺中軸線の北 398.5 m、東 221 m に位置する。SK 823 土坑を切って構築する。SK 819などと同様に不整方形を呈し、東西 0.7 m の規模を有する。深さ 0.1 m で、第Ⅲc 層上部に底面を作る。断面は舟底形。

#### SK 823 土坑（図面12、図版9）

G M - G N 73区に所在する。僧寺中軸線の北 399 m、東 221 m に位置する。SK 822 土坑に切られる。上面東西 1.1 m、南北 1.0 m の隅丸方形土坑。深さ 0.2 m で断面舟底形を呈する。疊片 3 点及び、還元焰焼成須恵器坏小片 3 点などが出土している。

#### SK 825 カマド状施設を有する土坑（図面13、図版10）

G N - G O 81区に所在する。僧寺中軸線の北 401 m、東 244 m に位置する。SK 826 土坑を切って構築する。

上面東西 1.6 m × 南北 1.3 m の円形で、深さ 0.1 m の浅い土坑の南壁に幅 0.9 m、奥行 0.6 m の馬蹄形のカマドを設ける。壁の立上りはゆるやかで、底面はほぼ平坦であった。カマド前面においては幅 0.8 m、奥行 0.7 m の範囲が住居の床面と同様に、貼床を施し、堅固になっていた。カマドの構築土はローム焼土粒まじりの黒色土で、基底部が残存していたもので、構築材として用いられた瓦片が若干残る。火床は約 0.2 m の円形範囲で、その中心は壁下となる。但し、焼成を受けた炉跡は検出されなかった。底面の北東部に上面東西 0.4 m、南北 0.3 m、深さ 0.7 m の円形小穴が 1 つあり（P - 1）、柱列跡と埋め土がみられていることから、柱穴と思われる。柱痕の上面径 0.25 m、深さ 0.5 m である。

遺物はカマド周辺に集中して 34 点出土。還元焰焼成須恵器坏 2 個体が復原実測できた。（図面22-1・2）

#### SK 826 土坑（図面13、図版10）

G N - G O 81区に所在する。僧寺中軸線の北 402 m、東 245 m に位置する。西南部分を大きく SK 825 土坑により切られる。

上面東西1.2m×南北1.3mの長円形を呈すると思われ、深さ0.02~0.03mと浅い。

#### SK 863土坑（図面13、図版10）

G O 86区に所在する。僧寺中軸線の北404.5m、東259mに位置する。S X 37火葬墓と接する。S X 37掘り形検出時に発見したもので、S X 37との切り合い部分は僅かしかなく、新旧関係を把握することができなかった。

径0.85mの円形土坑で、深さ0.35mを測る。底面は第IIIc層（ローム漸移層）下部にある。壁の立上りはゆるやかで丸底状を呈する。堆積土は黒褐色土で上層の厚さ0.04mを除き、下層には硬質のブロックが入り締まり強く、人為的に埋め込んだものと考えられる。

遺物は上～中層より炭化物片3点の外に、酸化焰燒成須恵器坏小片7点、土師器壘胸部小片6点、礫1点などが出土した。

#### (5) 火葬墓

##### S X 37火葬墓（図面11、図版11）

G O・G P 86区に所在する。僧寺中軸線の北405m、東259mに位置する。

掘り形の規模は上面東西0.48m×南北0.52m、底面で同じく0.27m×0.35mの隅丸長方形プランを有する。壁の立上りはゆるやかで断面舟底形を呈する。深さ0.13mを測る。

そのほぼ中央に、土師器壘を骨蔵器として用い、逆位に埋設したものである。口縁部はほぼ水平で、底面より0.09mを測る。上部（骨蔵器の胴下半部）は表土排土作業により、大半を失い、口縁から頭部にかかる周辺はが原状のまま遺存したほかは、骨蔵器内及び掘り形内より出土したものや、排土中より採集されたものが多い。

骨蔵器内は粗粒で締まりある黒褐色土で、骨粉をまじえてやや白色味を帯びる。口辺部と同レベルで、図版18-①・②の骨片が出土したほかは、後に主に骨蔵器内の土壤中より、同様もしくは、さらに細かい骨片を若干採集できたにすぎない。褐色味ある白色を呈しており、火熱を受けているものと思われる。詳しくは今後の分析結果を待ちたい。

掘り形内の埋め土は茶褐色土を若干含む黒褐色土で、締まりは強かった。

骨蔵器は口径23.0cmの土師器長胴壘で最大径は胴部にあると思われ、ゆるやかなくの字状口縁を有し、胴部は縦及び斜めのヘラ削りを施すものである。

#### (6) 小穴

調査区の全体において大小多数のビット（小穴）が検出された。遺構検出面で確認された320個のビット状落ち込みの内、粒子粗く締まり弱い木の根などによる搅乱と思われるものを除き、195個（未掘1）につき断面実測を行った。194個・197例につき、上面形と断面形につき分類すると次表の様になる。

上面形	断面形						
	砲弾形	円筒形	丸底形	平底形	不整形	U字形	計
円形(椭円形含む)	1	5					6
不整円形	46	71	29	17	1		164
方形(隅丸方形含む)				1			1
不整方形							0
不整形		2	1	5	2	1	11
底面が長円もしくは長楕円形	1	5		3		6	15
計	48	83	30	26	3	7	197

17タイプがあったが、この内、上面不整円形で断面円筒形のものが最も多く、これに同じく上面不整円形で断面が砲弾形、丸底形、平底形のものを加えると83%を占める。規模は、上面径0.2~0.3mが多く、深さは浅いものが0.05m、深いものが0.63mまである。第51次調査区例に比べ深いもののが少ない様である。タイプ別、規模別の分布状況等の分析に至らなかった。

なお、掘立柱建物跡2棟の柱穴10個も小穴194個に含まれており、そのタイプは、上面円形で断面円筒形のもの1、上面不整円形で断面砲弾形のもの1、上面不整円形で断面円筒形のもの6、底面が長円もしくは、長楕円形で断面V字形のもの1の4種あり、その他の小穴と大きく変るところはない。

## 2. 出 土 遺 物

本調査により出土した歴史時代遺物としては、土器・陶器・瓦塼類・鉄製品・自然遺物など総量コンテナ32箱ほどであり、その多くは住居跡から出土したものである。

遺物の説明は全て一覧表によることとし、出土位置毎に、土器→陶器→瓦塼類→金属製品→自然遺物の順とした。表記の方法について以下に補足説明をする。

### (1) 各遺物共通

イ. 遺物番号としてあるのは、各個体毎の登録番号で、各個体に黄色ポスターカラーで註記

してある。資料抽出の便に供する。

ロ. 出土位置において、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「床直」は床面  
直上出土を示す。

ハ. 計測値、記号なしは完数値、( )は復元数値、( )は残存数値、—は計測不可を  
表わす、単位はセンチメートル。

### (2) 土器類

イ. 種別 土：土師器、須A：須恵器A（還元焰焼成）、須B：須恵器B（酸化焰焼成）、  
土師質：土師質土器、灰：灰釉陶器

### (3) 瓦

鰐 瓦（本報告にないので省略）

字 瓦

イ. 内区文様 G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：偏行唐草文、H：ヘラ書き文、T：  
竹管文、K：格子文（ヘラ書きは除く）、J：縄文、O：その他

ロ. 外区、脇区文様 a：素文、b：珠文、c：長円珠文、d：圈線文、e：鋸齒文、f：  
凸線文、g：その他

ハ. 頭の形態 以下の組み合わせにより記入

E 直線頭

- a 凸面を整形するもの
- b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの
- c 不整形のもの

F 段 頭

- F1 瓦当凸面と凹面が平行するもの
- F2 F1 以外のもの
  - a 瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの
  - b 瓦当凸面のみ整形するもの
  - c 瓦当裏面のみ整形するもの

d 不整形のもの

G 曲線類

G1 瓦当凸面が内彎しながら女瓦凸面に移行するもの

G2 瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

G3 いわゆる跡顎形式

a 瓦当凸面を整形するもの

b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c 不整形のもの

男瓦・女瓦

イ. 布目本数 3cm四方内の側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす

ロ. 繩叩き本数 3cm四方内の繩数を表わす

ハ. 繩の捺り L: 繩圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの

R: 繩圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの

ニ. 粘土板合せ目 佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる

ホ. 布合せ目 粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる

ヘ. 叩き締めの円弧 A: 叩き締めの円弧が一方向

B: 叩き締めの円弧が「ハ」字状をなすもの

第2表 歴史時代出土遺物一覧(1)

S 1325 住田跡土器一覧						
固面 圓板 遺物番号	種別 器形	出土 位 置	口 径 高 底 高台高	基 形 の 特 徴	成・整 形の特 徴	備 考
14-1 國版12 PH-01	土・堀、内 黒	覆 土 上 下 盤、床 直、 床 中、表 床、地土上面	— ( 3.7 ) 6.7 0.1	丸底状の底部に断面方形の高 台を付ける。	内面はヘラミガキを施す。体 部下端は削り方方向のヘラケズ リ。	遺存度・底部と体部の一部。 色調・外面部褐色内面部黑色處理。 胎土・赤色スコリア状物質含む。
14-2 國版12 PK-01	須 A - 坂	覆 土 下 盤	13.5 4.9 5.5 —	体部ゆるやかに内側する。	右回転糸切り。内外面ロクロ 調整。体部外面に輪積みもしくは巻き上げ板。	遺存度・完形。燒成・良好。 色調・内面部灰色。 胎土・大粒の砂粒を若干含む。 古墳・外側に墨書き「身」。
14-3 國版12 PK-02	須 A - 坂	覆 土 下 盤 地 床、床 直	13.4 3.8 5.5 —	底面平坦。体部下半に丸窪を 有す。	体部外面に輪積みもしくは巻 き上げ板。右回転糸切り。	遺存度・口縁部部分欠。 焼成・良好。色調・暗灰色。 胎土・白色砂粒多い。
14-4 國版12 PK-03	須 A - 坂	覆 土 上 下 盤 地 床	12.6 4.6 5.5 —	体部の忍壁厚い。	右回転糸切り。体部外面に輪 積みもしくは巻き上げ板。	遺存度・口縁部部分欠。 焼成・良好。 色調・灰。
14-5 國版12 PK-04	須 A - 坂	覆 土 下 盤	( 1.3.3 ) 4.6 5.7 —	体部ゆるやかに内側する。底 部平坦。	右回転糸切り。	遺存度・口縁部部分欠。 焼成・還元燒成良好。 色調・灰白色。 胎土・青白密。
14-6 國版12 PK-05	須 A - 坂	覆 土 下 盤	( 1.0.6 ) 3.7 ( 4.7 ) —	底厚あり。外腹は直線的に開 く。	内外面ロクロ調整。	遺存度・少。焼成・良好。 色調・灰。胎土・砂粒を若干含む。
14-7 國版12 PK-06	須 A - 高 台 直 壁	覆 土 上 盤	( 1.8 ) ( 6.1 ) 0.3	断面方形の高台を付す。		遺存度・底部のみ少。焼成・ 不良。 色調・暗灰褐色。 胎土・やや軟質、土師質。
14-8 — PK-07	須 B - 坂	燒 土 内 盤	( 1.4.8 ) ( 4.7 ) —	体部や内側する。	内外面ロクロ調整。	遺存度・口縁部のみ少。燒 成・急化燒成やらず。 色調・内外本同色。 胎土・赤色スコリア状物質含 む。
14-9 國版12 PK-08	須 B - 坂	覆 土 上 下 盤 地 床	— ( 1.9 ) 5.2 —	体部は直線的に立ち上がる。	右回転糸切り。内外面ロクロ 調整。	遺存度・底部のみ少。燒成・ 良好。 色調・暗灰。 胎土・やや堅密。
14-10 — PK-09	須 B - 坂	覆 土 上 盤	— ( 0.7 ) ( 5.4 ) —			遺存度・底部のみ少。燒成・ 良好。色調・赤褐色。 胎土・密。
14-11 國版12 PK-10	須 B - 坂	燒 土 内 盤	— ( 1.9 ) 5.4 —	底面平坦。体部や内側する。	右回転糸切り。	遺存度・底部のみ。燒成・ 良好。 色調・暗灰褐色。 胎土・赤色スコリア状物質若干含む。
14-12 國版12 PK-11	ロクロ使用 土器 - 坂	覆 土 上 下 盤 地 床	( 1.1.9 ) 4.2 5.8 —	体部大きく内側する。	体部下端から底面周縁にかけ て手持ちヘラケズリ。	遺存度・少。燒成・急化燒成。 色調・暗灰色。 胎土・やや不良。
14-13 國版12 PK-12	須 B - コ マブ 形	覆 土 下 盤	— ( 5.9 ) 3.4 —	底面厚く。体部直線的。	右回転糸切り、内外面ロクロ 調整。	遺存度・口縁部欠。 焼成・やや不良。 色調・淡い褐色。
14-14 國版12 PN-01	灰 - 26	覆 土 上 下 盤、燒 土 上 面 燒土内、表 採	( 1.5.3 ) 4.5 6.5 0.9	体部大きく内側する。断面二 日月形の高台を有す。	高台接合後、ていねいに施錠 までナダ。	遺存度・底部部分。口縁一 片。焼成・やや良好。 色調・素地は灰白、釉は灰綠 色。

第3表 歴史時代出土遺物一覧(2)

S I 3 2 5 住居跡土器一覧						
図面 図版 遺物番号	種別 器 形	出 土 位 置	口 径 基 底 径 高 台 高	器 形 の 特徴	成・整 形 の 特徴	備 考
14-15 岡版 1-2 PN-02	灰 - 土	覆 土 上 下 層 飛 土 上	{ 1.3.7 } 3.3 6.1 0.2	体部や内側する。底面厚い。 断面方形の高台を付す。	付材高台。	遺存度 - 底部3口縁小片。 構成 - 良好。 色調 - 素地は灰白色。胎は灰褐色。 胎土 - 粉粒多い。
14-16 — PN-03	灰 - 土	燒 土 上 面 飛 土 内 紅 傷 表	{ 1.6.9 } ( 3.6 )	体部大きく内側する。	内外面の体部下手まで施釉 (刷毛塗り)。	遺存度 - 口縁部部分。 構成 - 良好。 色調 - 素地は灰色。 胎は灰褐色。
14-17 — PN-04	灰 - 土	P - 1 覆 土 下 燒 土 内 表	{ 1.5.4 } ( 3.4 )	体部や内側する。	内外面の体部上手に施釉 (刷 毛塗り)。	遺存度 - 口縁部部分。 構成 - 良好。 色調 - 素地は灰褐色。 胎は灰褐色がかった白色。
14-18 岡版 1-2 PN-01	燒 土 一段 皿	覆 土 下 基	{ 1.7.8 } 3.4 ( 7.8 ) 0.7	体部は直線的。広い縁を有し 段は明瞭。高台はやや細長く、 やや外へひらく。		遺存度 - 分。 構成 - 良好。 色調 - 素地灰白色。胎は薄い 緑色。

図面 図版 遺物番号	出 土 位 置	焼 成 度 全 厚 さ	成・整 形 の 特徴					備 考	
			凹 面 凸 面 端 面						
			素 材	布 目	特 漆	叩 き	特 徵		
15-1 岡版 1-3 KD-01	覆 土 下 層 カ マ ド 内	2.8.5 — 2.4.2 2.3	—	33×32	端縁ヘラケズリ。	網目し 7 本		ヘラケズリ+ナジ。 青灰色。砂粒多い。	
15-2 岡版 1-2 KD-02	覆 土 下 層 P - 1 覆 土 下 層	2.6.2 — ( 3.5.8 ) 2.7	粘土板	24×20	端縁ヘラケズリ。	格子目		標灰色。凹面に「父」のヘラ書き文字。海綿骨折合せ。	
15-3 岡版 1-2 KD-04	覆 土 下 層 —	— — ( 8.2 ) 2.1	—	— 23×17		網目し 12 本		標灰色。砂粒多い海綿骨折合せ。凹面に「父」のヘラ書き文字。	

S I 3 3 5 住居跡鉄製品一覧表					
図面 図版 遺物番号	種別 器 形	出 土 位 置	寸 法	備	考
15-4 岡版 1-3 ML-01	ノミ状鍛製品	覆 土	最大長 2.8 cm 最大幅 1.8 cm 最大厚 0.3 cm 重量処理前 6.2 5 g	先端へむかって厚みを減少し、やや反って刃部となる。 柄部欠損。	
15-5 岡版 1-3 MY-01	鍔 深 二層 一階		最大長 3.5 cm 最大幅 2.5 cm 最大厚 1.2 cm 重量処理前 1.2 1 g	不 定 形。	

第4表 歴史時代出土遺物一覧(3)

S 1325 住居跡自然物一覧				
國面 國版 遺物番号	種別	出土 位 置	寸 法	備 考
— 国版 13 — ① ND-01	炭化穀子	縄土内?	最大径 1.1 最大幅 0.9 厚 0.4	遺存度・小片。 モモ(佐藤謙也氏教示)

S 1326 住居跡土器一覧

國面 國版 遺物番号	種別	出土 位 置	口径 高 底 縁 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
16-1 国版 13 PH-02	土坏	覆土下 層	1.0.8 4.2 4.4 —	体部内側する。口唇部は薄く 尖り付く。	粘土細巻上げ。体部外下半 には横ヘラケズリ。口縁部横 ナダ。内面不定方向のヘラナ ダ。	遺存度・完形。 焼成・やや良好。 色調・底部外周のみ黒灰色、 他は赤褐色。 胎土・細砂粒多い。
16-2 国版 13 PH-03	土坏	床直	1.1.2 4.0 4.1 —	P H - 02 に同じ。	P H - 02 に同じ。	遺存度・完形。 焼成・良好。 色調・底部外周のみ黒灰色、 他は赤褐色。 胎土・細砂粒多い。
16-3 国版 13 PH-04	土坏	覆土下 層	1.0.9 3.9 4.0 —	体部やや厚くは底直線的に立 上る。	P H - 02 と同じ。	遺存度・完形。 焼成・良好。 色調・胎土・PH-03 に同じ。
16-4 国版 13 PH-05	土坏	覆土下 層 床直	1.1.0 4.0 4.2 —	P H - 03 に同じ。	P H - 03 に同じ。	遺存度・ほぼ丸形。 焼成・色調・胎土・PH-03 に同じ。
16-5 国版 13 PH-06	土坏	A期西南隅 方マド 覆土	{ 1.1.4 } 4.7 4.3 —	P H - 02 ~ 05 に比べてや 大なり。	粘土細巻き上げもしくは輪積 み。	遺存度・体部のみ焼穴。 焼成・良好。 色調・暗赤褐色。 胎土・細砂粒多い。
16-6 国版 13 PH-07	土坏	覆土上 層 床直	{ 1.0.9 } 4.1 4.4 —	体部やや内側する。	底部外曲面もヘラズリ。体部下 端のみ横ヘラズリ。	遺存度・体部のみ汚穴。 焼成・良好。 色調・暗褐色。 胎土・細砂粒多い。 体部大きくなっている。
16-7 国版 13 PH-08	土坏	覆土下 層	{ 1.3.3 } 6.0 7.0 0.7	体部内側する。外へ開くやや 高い高台を付ける。	底部より粘土縁を巻き上げ口 縁部のみ一基は輪積み。体部 大半周ヘラケズリ。	遺存度・口縁汚穴。 焼成・やや良好。色調・外周 輪積み・胎土・火焚の砂粒多 い。内裏・内面底面は不定方 向。体部は焼成・ラミガキ。
16-8 国版 13 PH-09	土坏	覆土上 下層 床直 表土	{ 1.8.8 } 1.5.0 { 7.5 } —	大きく厚い底部からゆるやか に立ち上り。口縁部は若干外反 する。最大径は口縁にあり。	口部外表面は焼穴ナデ。体部外 表面は最もくは斜めヘラケズリ。 指標厚度全体に残る。	遺存度・汚穴。 焼成・良好。 色調・赤褐色黒唐内外面に認 められる。 胎土・砂粒多い。
16-9 国版 13 PK-13	土質坏	覆土上 下層	{ 1.1.0 } 3.8 4.6 —	底部肥厚。口縁部やや外反。 底面厚く突出し円柱状を呈す。 体部内側。	口縫外表面に輪積みもしくは巻 き上げ痕有。	遺存度・汚穴。 焼成・半造元燒 やや不良。色調・灰褐色若干、 赤色味帯びる。胎土・やや軟 質土質上器ととらえた方が 適当か。
16-10 国版 13 PK-14	埴B 床	覆土下 層 床直	1.1.4 3.8 4.6 —	体部直線的に立上る。口唇部 肥厚する。	右回転糸切り、内外面クロ クロ調整。	遺存度・口縫体部欠け。 焼成・焼化物や不良。 色調・赤褐色。底部から口縫 にかけ大きく黒斑。胎土・大 粒の砂粒多い。
16-11 国版 13 PK-15	埴B 床	A期西南隅 カマド 覆土	1.0.2 3.2 4.6 —	体部直線的。	右回転糸切り、内外面クロ クロ調整。	遺存度・完形。 焼成・良好。 色調・暗褐色・赤褐色。 胎土・砂粒若干入る。

第5表 歴史時代出土遺物一覧(4)

S I 3 2 6 住居跡土器一覧							
国 面 図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 高 底 径 高 台 高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考	
16-12 国版13 PL-01	土師質・环	覆 層	土 下 下	1 0.7 3.4 5.3 —	体部直筒的。底部やや厚く底 部と体部の接は鋸角的(外面) 滑移的(内面)に移行。	右回転糸切り。	遺存度・完形。焼成・微化燒 やや不良。色調・灰色・赤褐色 全体全体に帯びる。胎土・大 粒の砂粒少しある。
16-13 国版13 PL-02	土師質・环	覆 層	土 下 下	1 0.6 3.8 4.7 —	体部内寄し口縁部や外反す る。	右回転糸切り。	遺存度・完形。焼成・良好。 色調・赤褐色。胎土・砂粒少 ない。
16-14 国版14 PL-03	土師質・环	A期南西カマド 覆 土 南西カマド底直 —	( 1 3.5 ) 5.6 ( 5.1 ) —	体部大きく内寄する。	内面底部に同心円状の調整孔。 右回転糸切り。	遺存度・少。焼成・良好。 色調・赤褐色。外面部に黒斑 あり。胎土・赤色スコリア状 物質多い。	
16-15 国版13 PL-04	土師質・高 台 台付 坪	覆 層	土 下 下	( 1 1.9 ) 6.2 6.5 0.7	極めて厚い底部にはほぼ直筒的 な体部を有す。断面三角形状 の高台付く。	内外面クロロ調整。	遺存度・口縁部少く。焼成 ・半還元地。色調・赤褐色を帯 びた灰土。胎土・砂粒ならび に赤色スコリア状物質多い。
16-16 国版14 PL-05	土師質・高 台 台付 环	覆 層	土 下 下	( 1 6.6 ) 6.4 ( 6.6 ) 0.7	部厚い体部が大きく聞く。ほ ぼ直筒的、断面方形の高台が 極く外へはりだす。厚手。	内外面クロロ調整により底部極 端に薄くなる。	遺存度・底部少く。焼成 ・良好。色調・赤褐色。胎土 ・砂粒少ない。
16-17 国版14 PL-06	土師質・高 台 台付 坪	覆 層	土 下 下	( 1 4.4 ) 4.9 ( 6.6 ) 0.8	底部大きい。体部内寄する。 断面方形に近い。高台は垂直 にとりつく。厚手。	内外面クロロ調整。	遺存度・少。焼成・良好。 色調・赤褐色。胎土・スコリ ア状物質の粒程多い。 体部大きく歪む。
16-18 国版14 PL-07	土師質・高 台 台付 坪	南 施	土 土 下 屋	— ( 3.0 ) ( 7.2 ) 1.2	まっすぐではりだす。やや高い 高台。	内外面クロロ調整。	遺存度・底部のみ。焼成・良 好。色調・褐色。 胎土・砂粒少ない。 スコリア状物質内外面にあ り。
16-19 国版14 PL-08	土師質・高 台 台付 环	覆 土 下 南 施 土 上	— ( 6.6 ) ( 6.6 ) 0.5	体部はほぼ直筒的に開く大なり の环。短かく外へはりだす高 台を付す。厚手。	クロロ目跡者。	遺存度・少。焼成・良好。 色調・赤褐色。胎土・黑色物 質多い。	

S I 3 2 6 住居跡男瓦一覧							
国 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	狹 端 広 端 全 長 さ	成・整 形 の 特 徴				備 考
			素 材	布 目	特 徴	印 き	
17-1 国版14 KC-01	カマド 構 胎 土	( 9.3 ) ( 17.5 ) ( 28.3 ) 1.5	粘土組	21×20 狭端部 に重ね 目	縹目L 12本	板状工具による 回転ナダ。	広端部少く、焼成良好。帶灰白 色。砂粒多い。四面執筆下 にして「成」のハラ書き。 +接広端を下にして「寺」の 朱書き。

S I 3 2 6 住居跡女瓦一覧							
国 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	狹 端 広 端 全 長 さ	成・整 形 の 特 徴				備 考
			素 材	布 目	特 徴	印 き	
17-2 国版14 KD-03	床 直	— — ( 9.2 ) 2.0	—	32×23		縹目L 10本	
							焼成良好。青灰色。凸面に 「—」のハラ書き。

第6表 歴史時代出土遺物一覧(5)

國面 國版 遺物番号	出 土 位 置	状 境 全 長 厚 度	成・整 形 の 特 殊						備 考	
			凹 面			凸 面	端 面			
			素 材	布 目	特 徵	叩 き	特 徵	特 徵		
17-3 國版15 KD-05	田カマド 覆 土	— 2.9.1 (3.1.9) 2.3	—	32×32	端縫わざにヘラケズリ。	圓目L 12本	広縫縫のみ斜の 叩きで仕上げ。	ナデ。	暗灰色、細砂粒多い。	
17-4 國版14 KD-07	床 直	— — 1.6.5 2.3	—	35×31		圓目L 10本			凹面図示の範囲良く摩耗凹右 の端面ヘラケズリ+摩耗。	
18-1 國版14 KD-06	カマド 横 窓 土	12.5.5 3.0.1 4.0.8 2.4	粘土紐	19×24	粘土紐接合部を 削及びへぎ先で 消す。端面ヘタ ケズリ。	圓目L 9 本	端縫ヘラケズリ。ヘラケズリ。	ほぼ完形(重ね54.00g)。 青灰色凹面に「寺」字の朱墨 書。 —		
18-2 國版15 KD-08	田カマド 横 窓 土 表 土	2.3.5 — (3.1.9) 2.3	粘土紐	42×39	端縫ヘラケズリ。	圓目L 13本	端縫ヘラケズリ、ヘラケズリ+ナ 海部叩き横方向。デ。	暗灰色、細砂粒多い。		

S I 3 2 6 住居跡鉄製品一覧

國面 國版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法	備 考
16-3 國版15 MHI-01	執 製 品 刀 子	床 直	最大長 14.4 cm 最大幅 1.9 cm 最大厚 0.4 cm 重量処理前 2.3 g	刃部長 7.9、茎長 6.5、刀部巾 1.6、茎部 0.8。 厚み(鉗部) 0.4。(茎部) 0.6。 茎部、刀部とも先端部を欠く。 —

S I 3 2 7 住居跡土器一覧

國面 國版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	口 径 高 度 底 高	基 形 の 特 殊	成・整 形 の 特 殊	備 考
19-1 國版15 PK-10	土 - 横	P - 2 覆 土	( 1.8.5 ) ( 5.7 ) —	口縫弱いくの字状、器壁はや や厚い。最大径は胴上半に あり。	口縫内外ヨコナデ、外縫胴上 半ヨコヘラケズリ、内縫胴上 半ヨコヘラナダ。	遺存度 - 口縫部のみな。 焼成 - 良好。 色調 - 増褐色。 胎土 - 砂粒少い。
19-2 國版15 PK-16	埴 A - 环	横 土 下	( 1.3.0 ) 4.7 ( 5.5 ) —	体縫ゆるやかに内側する。	体縫外面上部に輪縫みもしく は巻き上げ頭1条。	遺存度 - 3%。焼成 - 良好。 色調 - 灰色。 胎土 - 砂粒少し入る。
19-3 國版15 PK-17	埴 A - 高 台 付 端	覆 土 上	— ( 2.7 ) ( 5.9 ) 0.5	内面底部から底部にかけ漸移 的に移行。短かく外へはりだ す高台を付す。	内外面クロロ調整。	遺存度 - 底部のみ。焼成 - 半還元か。色調 - やや赤色が かった灰色。胎土 - 赤色スコ リア状物質多い。灰質。土脚 質土脚とした方が適当か。
19-4 國版15 PK-18	埴 B - 环	覆 土 上 下 横 北カマド	1.2.2 3.9 5.0 —	体部や内側する。器壁や 厚い。	外面口縫部に輪縫みもしくは 巻き上げ頭1条あり。右回転 糸切り。	遺存度 - 2%。焼成 - 良好。 色調 - 増褐色。胎土 - 赤色ス コリア状物質含む。
19-5 國版15 PK-19	埴 B - 环	北カマド 覆 土	( 1.1.4 ) 4.2 4.8 —	体部や内側する。	内面口縫に輪縫みもしくは巻 き上げ頭1条、右回転糸切り。	遺存度 - 2%。焼成 - 良好。 色調 - 増褐色。 胎土 - 砂粒少し入る。

第7表 歴史時代出土遺物一覧(6)

S I 3 2 7 住跡土器一覧								
図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位 置	口径 高 度 高台 幅	器形の特徴		成・整形の特徴		備考
19-6 図版15 PK-20	須B-环 腹 縁 東南カマド覆土	覆土下 下	《1.2.2》 4.1 4.8 —	体部下半丸味を有す上半は直線的。		右回転余切り。		遺存度・良好。焼成・良好。色調・暗褐色。胎土・砂粒多い。赤色スコリア状物質少入る。
19-7 — PK-21	須B-环 腹 縁	覆土下 下	《1.1.B.3》 4.2 《6.0.3》 —	体部直線的。器型厚い。		内外面クロロ調整。		遺存度・良好。焼成・良好。色調・暗褐色。胎土・細砂少し入る。全体に削みあり。
19-8 — PK-22	須B-环 腹 縁 北カマド 覆土	覆土上 上	《1.3.0》 4.8 4.7 —	体部上半内凹する。 大ぶりの所。		右回転余切り。		遺存度・良好。焼成・良好。色調・暗褐色。胎土・細砂多い。火熱を受けもろくなっている。
19-9 図版15 PK-23	須B-环 腹 縁 入口構築土内 覆土一括	覆土下 下	《1.4.2》 4.6 《6.2.3》 —	体部下半丸味を帯びる。		クロロ目剥離。		遺存度・汚損なし。焼成・良好。色調・暗褐色。胎土・軟質無。
19-10 — PK-24	須B-高 台付 縁	覆土上 上	— 《1.7.3》 《7.7.3》 0.9	先端り狀で外へはり出す。 高台を付す。		底部外面に余切り痕を残す。		遺存度・底部のみ。焼成・良好。色調・明るい赤褐色。胎土・赤色スコリア状物質や多入る。
19-11 図版15 PN-05	灰-塊 北方マド覆土	—	— 《2.2.3》 6.8 0.5	内面底部はほぼ平坦であるや かに体部へ移行。低い高台を 付す。		内面底部に重ね燒痕有す。 外面部高台の埋合痕よく残る。		遺存度・底部のみ。焼成・良好。色調・素地灰白色、胎土は淡い青緑色。胎土・砂粒等十 入る。
19-12 図版15 PN-06	灰-塊 覆土上 縁	—	— 《2.0.3》 《7.2.3》 0.3	内面底部は平坦でない。低い 三日月形の高台。		高台端はよくナゲる。接合痕 よく残る。		遺存度・底部のみ。焼成・良好。色調・素地墨黒色。胎土は淡い灰緑色。胎土・白色砂粒や 多入る。

S I 3 2 7 住跡瓦一覧														
図面 図版 遺物番号	出土 位 置	上弦 下弦 弧 度 厚 さ	内区		外区		驅区		文様 深さ	全長	備考			
			厚さ	文様	厚さ	文様	厚さ	文様						
20-1 図版15 KB-01	周溝内 東南カマド 構築瓦	— — — 7.0	4.1.5	H K	1.2.5	a	1.6	—	—	0.4.5	(21.5) 塗、曲線彫(G2a)。 暗灰色、砂粒多い。 布目21×19、叩き綱目L、9本。			
20-2 図版15 KB-02	カマド 構築瓦	(6.2) (7.6) (4.5)	(4.5)	H K	0.7	s	—	—	0.7	a	0.2 (12.2) 塗、曲線彫(G1b)。 赤褐色。白色砂粒少量入る。 布目26×24、叩き綱目し、7本。端面 ヘラケズリ。			

図面 図版 遺物番号	出土 位 置	状 態 広 度 全 厚 さ	成・整形の特徴						備考		
			内面			凸面					
			素材	布目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴			
19-13 図版16 KC-02	須 下 縁	— 《1.8.5》 《2.1.4》 1.8	粘土板	24×19		—	タテ方向のナゲ。	ヘラケズリ。	暗灰色、砂粒多い。		

第8表 歴史時代出土遺物一覧(7)

S I 3 2 7 住居跡瓦一覧									
國面 國版 遺物番号	出 土 位 置	長 広 厚さ	成・整 形 の 特 徴						備 考
			西 面			凸 面		端 面	
			高 材	布 目	特 樹	切 口	特 樹	特 樹	
19-14 國版16 KD-09	東南カマド 壁土	— — ( 8.2 ) 1.9	—	16×10		格子目		ヘラケズリ+ナ ダ。	広楕部片、暗青灰白。海綿骨 糸少し入る。「大」の押型文 字。
20-3 國版16 KD-10	東南下層 東南カマド 構築土崩 壁土	24.8 — ( 32.0 ) 2.6	粘土板	18×19		格子目		ヘラケズリ。	海綿灰褐色、海綿骨糸を含む。
20-4 國版16 KD-11	東 土 下 層	( 17.7 ) — ( 20.2 ) 2.0	—	16×22	端縁ヘラケズリ。 高目 L 8 本	不整形	ヘラケズリ。	均河帶灰色、砂粒多い凹面 「亂」のヘラ書き文字。	

S I 3 2 7 住居跡地一覧										
國面 國版 遺物番号	出 土 位 置	長 広 厚さ	材	成・整 形 の 特 徴						備 考
				上 面	下 面	側 面	上 面	下 面	側 面	
20-5 — KH-01	東南カマド 壁土	17.8 ( 12.5 ) 6.5	—	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	暗褐色。大粒の砂粒多い。

S I 3 2 7 住居跡鉄製品									
國面 國版 遺物番号	種 别	出 土 位 置	寸 法	備 考					
19-15 國版16 MK-01	不明 鉄片	床 直	最大長 1.7 最大幅 1.5 最大厚 0.6 重量處理前 2.2	國上部が丸味を有し厚く、下部へむかい薄くなる。					
19-16 國版16 MZ-01	不明 鉄製品	床 直	最大長 4.9 最大幅 2.6 最大厚 0.4 重量處理前 1.7.9 5 g	板状の鉄製品、國上部丸味を持つ。断面は薄いかまこ形。 國下半部欠損。					
19-17 國版16 MY-02	秋 洋	壁 上	土 壁 最大長 2.6 最大幅 2.0 最大厚 1.3 重量處理前 7.5 g	不定形。					

S I 3 2 7 住居跡自然遺物一覧									
國面 國版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法	備 考					
— 國版16 — ① ND-01	炭化 球子	壁 土 下	最大長 1.8 最大幅 1.6 最大厚 0.4	遺存度 - 分割。 セモ (佐藤敏也氏教示)					

第9表 歴史時代出土遺物一覧(6)

S I 3 2 8 住居跡土器一覧							
図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位 置	口 径 底 高 径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考	
21-1 図版17	土 - 壺 壺	土 下 層	— ( 1.9 ) 7.1 —	厚く突出した底部片。	体部下半へラケズリ。	遺存度 - 底部のみ。 焼成 - 良好。色調 - 暗赤褐色。 胎土 - 粗砂多くもろい。 小孔のカメガ。	
PH-11							
21-2 図版17	土 - 高台付 壺	土 上 層	— ( 3.8 ) ( 6.8 ) 0.9	強く外反した高台を付す。 底底部片。	高台付部はよくナデる。	遺存度 - 底部のみ。焼成 - や や不良。色調 - 暗赤褐色。 胎土 - 粗砂と赤色スコリア状 物質多く混入。	
PH-12							
21-3 図版17	須 A - 盆 盆	土 上 層	— ( 3.4 ) ( 8.9 ) 0.4	断面方形の高台付く。底面は 平坦。	全体に良く仕上げ調整がなさ れる。	遺存度 - 底部のみ。焼成 - 良好。 色調 - 灰色。暗灰色の自然釉 かかる。胎土 - 砂粒少し入る。	
PK-25							
21-4 図版17	須 A - 壺 壺	土 下 層	— ( 3.2 ) 12.9	外面底部中央が一度凹み巾広 い高台状になる。	体部下半ヨコへラケズリ。	遺存度 - 底部のみ先兆。 焼成 - 良好。色調 - 暗灰色。 胎土 - 海綿骨針を含む。	
PK-26							
21-5 図版17	須 A - 瓶 瓶	カマド 土	( 1.3.5 ) 5.1 5.8 —	体部や内側する。やわらか い所。	外面体部下半から底面にかけ 剥離あれ。糸切痕不明瞭。 内面体部に輪積みもしくは巻 き上げ痕！。	遺存度 - 口縁部部欠け。焼成 - 半還元地。色調 - 体部上半 灰白色。下半は褐色。胎土 - 砂粒少なく緻密。内面底部 にスミ状黒色斑。	
PK-27							
21-6 —	須 A - 瓶 瓶	灰 カマド 土	— ( 2.3 ) 6.5 0.5	断面三角形の高台を付す。	外面底部中央に糸切痕を残す。	遺存度 - 底部のみ 4/6。焼成 - 良好。色調 - 灰白色。 胎土 - 白色粗粒多い。	
PK-28							
21-7 図版17	須 A - 瓶 壺	土 中 層	— ( 2.3 ) ( 7.2 )	直立する四面方形の高台を付 す。	外面底部中央に糸切痕、内外 面に高台摺合痕を残す。	遺存度 - 底部のみ 2/6。焼成 - 良好。色調 - 灰色。胎土 - 精 密。	
PK-29							
21-8 図版17	須 B - 瓶 瓶	床直 カマド 土	( 1.5.5 ) ( 3.5 ) —	体部はほぼ直線的、口唇部肥厚 する。	内外面ロクロ調整。	遺存度 - 口縁部欠け。須 A - 良 好。色調 - 赤褐色 - 境赤褐色。 胎土 - 粗砂少量化。	
PK-30							
21-9 図版17	灰 - 壺 壺	土 中 下 層 掘 り 影 埋 め 土 床 直	( 1.6.6 ) 4.6 6.9 0.8	体部や内側し、広い底盤へ とまるやかに移行の幅三日月 形のやや高い高台を付す。	外面の縁部と体部下半はナ ゲ。体部中位にはラケズリ 剥落る。 施釉は糊毛通り。	遺存度 - 口縁部部欠け、底盤 一部欠け。焼成 - 底盤から体部 にかけやや歪む。色調 - 灰地 灰白色。胎土 - 粗砂多く青緑色。 胎土 - 精密。重ね焼き痕残る。	
PN-07							
21-10 図版17	灰 - 瓶 瓶	土 上 層	— ( 2.7 ) 5.6 0.5	断面三日月形の低い高台を付 す。 底部厚い。	内面底盤に重ね焼き残る。	遺存度 - 底部のみ。焼成 - 良 好。色調 - 灰地灰白色。胎土 は薄い灰褐色。胎土 - 精密。	
PN-08							

S I 3 2 8 住居跡男瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位 置	状 況 底 全 長 厚 さ	成・整形の特徴						備 考	
			凹 面			凸 面				
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
21-11 図版17	カマド 窓	1.1.3 1.5.5 2.4.3 1.0	粘土	35×36 重ね目 あり	—	板状工具による 回転ナゲ。	広面端へラケズ リ状端面ナゲ。		弓張模様色。細砂粒多く含む。	
KC-03										

第10表 歴史時代出土遺物一覧(2)

S I 3 2 8 住居跡女瓦一覧										
図面 図版 遺物番号	出 土 位 置	扶 雄 全 長 厚 さ	成・整形の特徴						備 考	
			凹 面			凸 面				
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
21-12 国版17 KD-12	カマド 復 カマド 横 蓋 土	— 3.0.5 (1.5.2) 2.4	粘土	16×19	不整形	圓目L 9本		ナデナヘラケズ リ。	灰色。砂粒少量入る。	

S I 3 2 8 住居跡土器品一覧

図面 図版 遺物番号	種 類	出 土 位 置	寸 法	備 考
21-13 国版17 TH-01	土 罐	復 蓋 下	最大長 (2.7) cm 最大幅 1.2 cm 最大厚 1.1 cm 重量処理前 2.9 g	中央部がふくらむ。孔径0.4 cmは断面不定円形。孔内面に細い3~4筋の輻方向の稜線 なる輪郭が認められる。両端欠く。

S I 3 2 8 住居跡鉄製品一覧

図面 図版 遺物番号	種 類	出 土 位 置	寸 法	備 考
21-14 国版17 MZ-02	不明 鐵 土上		最大長 5.1 cm 最大幅 2.8 cm 最大厚 0.5 cm 重量処理前 2.085 g	底部は断面方形に近づく巾広部の断面は浅いかまぼこ形、MZ-01に似る。 両端丸く。

S K 8 2 5 土坑土器一覧

図面 図版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	口 徑 底 高 高 台 高	器形の特徴			成・整形の特徴	備 考		
				成・整形の特徴						
				凹 面	凸 面	端 面				
22-1 国版18 PK-31	須 A - 瓶	覆 土	φ 1.2.9 4.1 (6.2.) —	体部半内窪する。底面は平 Hg	内外面クロロ調整。		遺存度 - 良。焼成 - 不良。 色調 - 暗灰褐色。 胎土 - 粘砂質多い。 全体にむし。			
22-2 — PK-32	須 A - 瓶	覆 土	φ 1.3.3 4.8 5.5 —	口縁部や外腹内面而部から 底部へゆるやかに移行。	右回転角切り。		遺存度 - 口縁部部分欠。 焼成 - 不良。色調 - 暗灰褐色。 (黄褐色味濃びる) 胎土 - 海綿骨質多い。			

S K 8 2 5 土坑女瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出 土 位 置	扶 雄 全 長 厚 さ	成・整形の特徴						備 考	
			凹 面			凸 面				
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
22-3 国版18 KD-14	フク 土	— — (2.1.5) 1.9	—	20×19		圓目L 10本		ナデナヘラケズ リ。	暗灰色。細砂質多い。凹面に 「虫」の横書き文。	

## 第11表 歴史時代出土遺物一覧

SK 825 土坑鉄製品一覧						
圓面 圓版 遺物番号	種別	出土 位 置	寸 法	備 考		
22-4 圆版18 MH-02	鉄製刀子	覆 土	最大長 13.5 cm 最大巾 1.1 cm 最大厚 0.4 cm 重量鉄塊約 1.43 kg	刃部長 6.4 cm、茎長 7.1 cm。 刃部最大幅 1.1 cm (茎部) 0.3 cm。 厚み (峰部) 0.35 cm、茎部最大幅 0.95 cm。 刃部茎部とも先端欠損。		

SX 37 火葬墓土器一覧						
圓面 圓版 遺物番号	種別	出土 位 置	口 徑 高 底 高 台 高	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
22-5 圆版18 PH-13	土 - 模	骨 蔵 器	23.0 — 3.7 —	口縁ゆるやかに外反。 胴部上半に最大径。	口縁内外ナメ、胴上半ヨコベラケズリ、下半斜もしくはタテヘラケズリ。	遺存度 - 口縁部へ胴上半部と胴部の一部ならびに底部。焼成 - 焼好。色調 - 黑褐色。胎土 - 面砂粒が多い。

SX 37 火葬墓人骨一覧						
圓面 圓版 遺物番号	種別	出土 位 置	寸 法	備 考		
— 圆版18 — (1) BA-01	人 骨	骨 蔵 器 内	幅 0.6 長 1.9 厚 0.2	骨状骨片の外沿部片。やや褐色味帯びた灰白色。		
— 圆版18 — (2) BA-02	人 骨	骨 蔵 器 内	幅 0.6 長 1.1 厚 0.2	同 上。		

遺構外土器一覧						
圓面 圓版 遺物番号	種別	出土 位 置	口 徑 高 底 高 台 高	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考
22-6 圆版18 PK-33	土腰質 - 壺	蓋 接	《 1.0.8 》 3.4 《 6.0 》 —	内面底部から底部へかけゆる やかに移行。外面口縁部を抱くおさえ高い接頭みられる。	内外面ヨコロ調整。	遺存度 - 1%。焼成 - 灰元燒。 色調 - 灰灰色。胎土 - 大粒の 砂粒多い。

圓面 圓版 遺物番号	出土 位 置	内 区		外 区				露 区		文 標 深さ	全 長	備 考			
		上 厚さ	文 標	上		下		幅	文 標						
				厚さ	文 標	厚さ	文 標								
22-7 圆版18 KB-03	表 土	—	2.4	KK	L1	b	—	—	—	0.2	(8.7)	側部粘土接合部より剥離し、為に瓦当下欠す。 暗灰色。白色細砂粒多い。 素材粘土質。布目21×10 cm面広端縁ヘラケズリ。			

第12表 歴史時代出土遺物一覧(II)

遺構外平瓦一覧																	
図面 図版 遺物番号	出土 位置	内 区		外 区				幅	文様	文様 深さ	全長	備 考					
		上 厚さ	文様	上 厚さ 文様		下 厚さ 文様											
				厚さ	文様	厚さ	文様										
22-8 図版18 KC-04	亂	— — 5.2	3.2	H	0.8	d	1.2	d	1.0	d	—	(11.1)	波型(F2C)。 暗赤褐色。砂粒少量入る。 布目21×19。凹凸面広端 縁へラケズリ。叩き綱目 L9本。端面ナゲ。				

遺構外男瓦一覧													
図面 図版 遺物番号	出土 位置	狹端 広端 全長 厚さ	成・整 形 の 特 徴								備 考		
			凹 面			凸 面			端 面				
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	叩き	特徴			
22-9 図版18 KC-04	亂	— — ( 3.8) 1.7	—	21×21			—					暗赤褐色。砂粒多い。 凸面に「父」(?)の押印。	

遺構外女瓦一覧													
図面 図版 遺物番号	出土 位置	狹端 広端 全長 厚さ	成・整 形 の 特 徴								備 考		
			凹 面			凸 面			端 面				
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	叩き	特徴			
22-10 図版18 KD-13	表 横	— — ( 4.9) 1.8	—	28×25			端面L 10本					凹面に「上」の横骨文字。	

### 3. 小 結

#### 出土土器について

本調査区出土の土器群について、その編年的位置を検討しておきたい。器形が復元され、纏まった資料が得られたのは4軒の住居跡のみであるので、これを対象とする。

住居内に於ける出土位置・分布状況・接合状況をみて、一括資料の検討を行う。S I 325 住居跡に於ては、カマド火床上のものと覆土のものとに区分され、各々に接合例があることから各々一括資料としてとらえられる。但し、カマド火床上のものには掲載し得た土器資料は無い。S I 326・327 住居跡に於いては、カマドや炉などの変遷が認められるのにもかかわらず、覆土上層のものまであわせて接合例があることから、一応一群の資料としてとらえておく。S I 328 住居跡では、多量に得られた遺物の大半は覆土上・中層のもので、これらには接合例が少ないので対し、カマド周辺及び床周辺出土の一群は接合例も多く、垂直分布をみても不整合が認められるので、別的一群としてとらえることができる。

4軒の住居跡出土の上器類としては、須恵器A（還元焰焼成）、須恵器B（酸化焰焼成）、土師質土器、土器、加えて灰釉陶器と綠釉陶器がある。ここでは主に供膳形態の壺・壇についてみていくこととする。

まづ、須恵器壺A・Bであるが、法量比が得られる個体について、南多摩窯址群出土須恵器編年（服部 1983）と北武藏諸窯址出土須恵器編年（高橋・宮 1983）に照らすと、須恵器壺Aの6個体は全て南多摩G 5窯式期に比定し得る。そして、酸化焰焼成須恵器の伴出から、同新期の様相を示すものと理解される。須恵器壺Bは南多摩G 14窯式に比定し得るS I 327 住居跡出土の3個体と、S I 326 住居跡出土の小形のもの2個体（図16-10と図16-11）に区分できる。後者は、共に薄手で酸化焰焼成され、G 14窯式に比べ①小ぶりであること、②口径：底径比が $1/2$ ～ $1/2.5$ を示して底径の比率が大きいこと、③体部が直線的に立上ること、などの相違点がある。北武藏のG 14窯式伴行の栗谷ツ1号窯（K 1）出土の浅い壺と比較すると①口径：底径比が $1/2$ ～ $1/2.5$ を示すこと、と②体部が直線的に立上ることの2点は共通するが、法量をみると、栗谷ツ1号窯出土のものが口径12～13cmとG 14窯式にほぼ等しいのに対し、S I 326 住居跡出土の2個体は、口径10.2と11.4とより小形である点が異なる。こうした小形の酸化焰焼成須恵器壺は、生産地に於ては未検出の様であるが、消費地に於ては、例えば武藏国府M 39・S I 36 住居跡（山口 1980）において、小ぶりの土師質土器壺と伴出しているのをはじめ、武藏国分寺においても小ぶりの土師質土器壺に伴出する例（未報告）がある。大ぶりの土師質土器壺がG 5窯式期からG 14窯式期の須恵器と伴出するのに対し、小ぶりの土師質土器壺には初期において上述の小形の酸化焰焼成須恵器壺が伴出するが、次第に須恵器が伴わなくなり、土師質土器と土器が主体となる。（福田 1984）そこで、小形の酸化焰焼成須恵器は、少くとも消費地においてはG 14窯式に後続するものとしてとらえることが可能となる。<sup>(1)</sup>

土師質土器は壺・高台付壺・高台付塊など9個体があるが、いづれもS I 326住居跡出土のものである。土師質土器壺はその形態変化をみると第1段階：底径の大きい大ぶりの壺→第2段階：大ぶりの壺→第3段階：小ぶりの壺（皿型土器出現期）→第4段階：さらに小ぶりの壺（皿型土器主体期）となり、高台付壺や塊は第3段階に盛行する。S I 326住居跡出土の土師質土器群はまさに、第3段階に相当するものである。

土師器壺は小形のもので、S I 326住居跡より6個体とまとめて出土しており、法量・形態・焼成・整形技法等相似している。塊は2個体あり、共に内面黒色処理するものである。S I 326住居跡出土の図16-7が口縁から体部外面に粘土糸痕跡を良く残し、外へ開くやや高い高台を付すのに対し、S I 326住居跡出土の図14-1は残存する体部下半をみると、横及び斜めのヘラケズリを行って器面を平滑に仕上げており、底部は丸底状で、低く断面方形の高台を削り出し(?)しているなど相違点が多い。前者はG14窯式期以降の前出の土師器小形壺などと併出するが、後者は、武藏国府例（ことぶきマンション地区S I 3）（山口1980）にみられるごとく、G5窯式期に併出するもので、時間的隔たりを有する。

なお、土師器壺は3個体あるが、S I 328住居跡出土の図21-1は底部厚い小形壺の底部片・S I 327住居跡出土の図19-1は口縁弱く「く」の字状で器壁厚い大形壺の口縁片、S I 326住居跡出土の図16-8は口縁径大きい小形壺で、底部に回転糸切痕を有するものである。「コ」字口縁を呈する武藏型壺が消失後の煮沸形態の様相を示している。

以上を総合して、須恵器A・Bと土師質土器並びに土師器について供膳形態の壺・塊の組成を住居跡毎にみると、第14表に示す様に、3群に大別され、1群→2群→3群の順に変遷するものととらえることができる。

第13表 住居跡出土土器群の組成

群	基種 住居跡	須恵器A（還元焰焼成）					須恵器B（酸化焰焼成）					土 師 質 土 器				
		壺		高台付	蓋	体	蓋類	壺			高台付塊	コラブ形	壺		高台付壺	高台付塊
		G5	その他					G14	小形	その他			半還元焰	酸化焰		
		S I 325	④	①△	①			△		④△	①	①				△
1群	S I 328	① <sup>1</sup>	△	② <sup>1</sup>		△	② <sup>1</sup> △			①△					△	
	S I 327	①	△	①		△	③	③	△	③△	①				△	△
2群	S I 326		△		△				③	△			①	②△	③	③△

〔○は図示資料。数字は個体数を示す。△は小破片資料（図示外）の存在を示す。  
但し、須恵器壺A・Bと土師質土器壺においては右端欄に、土師質高台付壺・塊においては左端欄に一括した。〕

第1群 G5窯式期の還元焰焼成須恵器並びに酸化焰焼成須恵器を主体とする。

第2群 第1群土器を残すも、後続するG14窯式期の酸化焰焼成須恵器を主体とする。他例よりみて、大ぶりの土師質土器壺を欠いているものと考えられる。

第3群 土師質土器（小ぶりの壺、高台付壺、高台付壺）を主体とし、G14窯式期に後続すると考えられる小形の酸化焰焼成須恵器を加える。

これを南接の第107次調査区における5軒の住居跡と1基の土坑出土の土器群と対比する。

第107次調査区においては、1群（S1 229）→2群（S1 232、231、230）→3群（S1 228、SK 546）の変遷をえたが、今次第1群は107次1群にはば併行し、今次第2群は107次2群及び3群のS1 228に併行し、今次第3群は107次3群のSK 546にはば併行する。

なお、S1 328住居跡出土の土器群は、カマド周辺等下層遺物と上・中層遺物とに区分し得ると既述したが、供膳形態上器5個体の内、下層のものは3個体で、須恵器A壺（G5窯式）と須恵器A壺と須恵器B壺の組み合わせとなり、一応第1群に含めて考えられる。上層のものは2個体のみで、その所属は明らかにし得ない。さらにSK 825土坑出土の須恵器壺2個体をみると、いづれもG5窯式期の特徴を有しているので、第1群に併行するものと理解される。

さて、これら土器群の実年代としては、直接に示す遺物の出土は得られなかつたので、南多摩及び北武藏の窯址出土須恵器編年によれば、G5窯式期は古・新あわせて10世紀中葉から後半にかけて、G14窯式は10世紀末から11世紀初頭頃とされている。従って、本地区出土の第1群土器は、酸化焰焼成のものでG5窯式期を主とすることから、10世紀後半代、第2群は、G14窯式期とのものを主とすることから、10世紀末から11世紀初頭頃、第3群は、後続する11世紀前半代など各々実年代を推測することができる。但し、上述の窯址出土須恵器編年の内、平安時代後期においては、灰釉陶器との共伴例な

土 师 器					灰 軸 陶 器		綠 軸 陶 器		備 考	
壺	高 台 材 壇	内 黒 壇	甕		ロ ク ロ 壺 使用	壺	瓶	瓶	壺	瓶
			小 形	大 形						
△		①	△		①	④ △	△	①		
	①		① △			② <sup>1</sup> △			右上の小数字は下層遺物（内側）	
			△ ①			② △				
⑥ △		①	① △	△		△				

どをもって与えられた実年代であり、将来変更される可能性が大きいが、須恵器生産の減退以後、平安時代後半～末期の土器群においては、主体となる土師質土器を軸とした編年の確立が望まれ、今次調査資料は些かの好資料を提供するものと考える。

終わりに、S I 325 住居跡出土のロクロ使用の土師器と施釉陶器について記すこととする。図14-12はS I 325 住居跡出土の土師器坏で、ロクロ成形により、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部に回転糸切痕が残される。橙灰色を呈し、口辺部薄手で、口径と底径の比は約に近い。こうしたロクロ使用の土師器は、国分寺をはじめとする南武藏地域では客体的な存在で、千葉県下に於て、8世紀後半代から出現するもので、図14-12に類似するものは、下総国分遺跡第2地点5号住居址出土土器（9世紀第3四半紀～第4四半紀）（宮内1983）、我孫子市新木東台遺跡V期の土器群（9世紀第4四半紀）（石田1987）、君津郡袖ヶ浦町永吉台遺跡群・西寺原地区-II期の土器群（10世紀第2四半期～農巻1987、但し、9世紀末期～10世紀第1四半期とする意見もある。一笛生1987b）、君津郡袖ヶ浦町遠寺原遺跡V期の土器群（9世紀第4四半期～10世紀第2四半期）（笛生1987a）などがみられる。1個体の土器のみをとって、その出自や時期を明らかにすることは、難かしいが、大きくとらえると、図14-12のロクロ使用の土師器は千葉県下にて9世紀後半から10世紀前半代にかけて生産されたものが、国分寺へ移入され、上述の様に10世紀後半代とした第1群土器に伴って廃棄されたものと考えられる。その時間差は、そのまま受け入れた方が良いか、あるいは彼の実年代推定を訂正すべきかは、現段階では決し得ない。今後はこの種の土器に注意していくたい。又、実地に比較・検討する機会を持って、細部について考究していくなければならない。

次に施釉陶器についてみると、第1群と第2群に伴出する9個体（内1個体のみ綠釉陶器）がある。猿投窯における編年表（檜崎1983）と猿投窯・美濃窯における編年表（前川1984）に照らすと、いづれも黒窓90号窓式期前後から、東山72号窓式期前後に比定することができる。第1群土器には古段階のものが、第2群土器には新段階のものが多い様である。実年代については、末期に関する最新の前川試案（前川1984）に従ると、黒窓90号窓式が9世紀後半、折戸53号窓式が10世紀前半、東山72号窓式が10世紀中葉から11世紀初頭頃とされている。上述の本調査区出土の土器群の実年代比定と比べると、時間の隔たりはみられる個所があるが、消費地たる本隊出土土器群より得られた年代の方が古くなることはなく、この点大きな矛盾はない。

#### 検出遺構について①（平安時代前期のS X37火葬墓）

S X37火葬墓の骨蔵器に用いられた土師器壺はいわゆる「武藏型」のものである。器壁が薄く、胴上部外面を横にヘラ削りし、下半部は縱にヘラ削りする。口縁は「く」の字状と「コ」の字状の中間形態を示し、最大径が胴上半にある長胴の壺である。以上の諸特徴から、國府・國分寺地域の土器編年によれば、平安時代前期：9世紀代の年代が与えられる。従って、本調査区で検出された遺構群の内、平安時代前期に属すると思われるものは、この火葬墓のみということになる。

ところで、こうした火葬墓は、次表に示す様に、本例で6例目を数える。奈良時代後半（国分寺創建期）から平安時代前期にかかるものと推測される。火葬の葬法は、700年（文武天皇4年）の僧道昭にはじまり、持統（702）、文武（707）などの天皇の葬法に導入されたことを契機として、次第に貴族や官人層にひろがっていたものと考えられている。武藏国分寺検出の火葬墓群の被葬者としては、その立地より推して、国分寺僧侶あるいは國府の官人などが可能性として考えられる。

第10図によって明らかな様に、6基の火葬墓は武藏国分寺の北東地域にまとまって検出されている。⑤・⑥については、谷をはさんで対岸の現南町三丁目付近からの出土と伝えられて<sup>(2)</sup>いる。

この地域に於ては、④の付近まで、台地縁辺部を中心に奈良時代末～平安時代前期の遺構が分布することが知られているが、②・③及び⑤・⑥の地域では国分寺関連遺構の発見は、この火葬墓以外にない。僧寺北方域に於ては調査例が少なく、何とも伝えないが、僧寺北西域に於ては密度濃く発掘を行っているにもかかわらず、今のところ火葬墓の検出例は無い。従って、武藏国分寺の北東域の台地縁辺部及び谷をはさんで対岸の台地上は広範囲な墓域を形成しているものと思われる。

なお、尼寺西方の台地縁辺にあたる武藏台跡（都立府中病院構内）でも最近、火葬墓発見の報を聞いているので（⑦）、西方台地縁辺部に於ても広範囲な墓域があった可能性があり、この場合、本地域との性格がどう異なるのか、など考究されるべき問題は多い。

最後に、当時の地表面について考える材料を与えておいたので触れておくこととする。

番号	出 土 位 置	古 地	埋 墓 状 況	土 垛	骨 葬 器	蓋	収 納 物	備 考
① (佐藤共同住宅)	2.0 1 次 調査区 台地縁辺	七 塚 内 に 逆 位	周 長 方 形 一辺 0.5 m. 深 0.13 m	土 垛 器 類	な し	火 葯 骨 片	SX37 片 着 手	
② (泉ブーラーセット建設地)	2.1 8 次 調査区 台地縁辺	土 塚 内 に 逆 位 固く詰まる。侵入。	方 形 一辺 0.5 m. 深 0.25 m	須 悠 器 類	な し	火 葯 骨 片 少 量 圓い土入る	SX39 埴 土 中 より 須 悠 器 高 台 扇 壺 灰 墓 器 片 出土	
③ (都営住宅建設地)	定 ケ 街 南 道 駅 台地縁辺	不 明	不 明	須 悠 器 類	不 明	4.0 犀 位 男子火葬骨 充 滿	表 土 除 却 時 に 棚 出	
④ (東 住 宅 道 地)	東 元 町 3 丁 目 石塚斜面	不 明	不 明	土 垛 器 類	不 明	火 葯 骨 多 量 に 掘 出 片 近 より 須 悠 器 瓶 に 掘 出 片 壺 出土		
⑤ (福村組元 1969-1960)	「国分寺駅南方畠地」	不 明	不 明	不 明	土 垛 器 類 底部に 3 枚 の穿孔	土 垛 器 類	火 葯 骨 充 滿	国 分 寺 所 藏
⑥	(国分寺駅の南か)	不 明	不 明	不 明	須 悠 器 類	須 悠 器 類	火 葯 骨 充 滿	国 分 寺 所 藏

(武藏国分寺北東地域発見の火葬墓一覧)

第5図 火葬場の分布図



骨蔵器は上塙内に倒置して埋納されたものであるが、口縁のレベルが標高7598mを示し、(土塙検出面はⅢb層上面の7600m)、推定復原された器高は約29cmであるので、骨蔵器の底部のレベルを算出すると、7627mとなる。付近の現地表は約765m、Ⅱ層(黒褐色土)の上面が762mであるので、約10cmⅠ層(現在の表土)に入り込むこととなる。埋納方法が骨蔵器を壇に倒置した後、完全に土砂で覆うとしたら、最低でもさらにその数cm上が、土塙掘り込み面=当時の地表面ということになり、現在の地表面との差は10cm内外という結果が得られる。あるいは、倒置した骨蔵器の一部が当時の地表より上に出るとした場合(覆土して、マウンド状の墓標を形成することとなる)、当時の地表は先程得た数値(7627m)より下っても良いこととなる。いづれにしても埋納レベルが浅い為に、興味あるデータが得られた。

#### 検出遺構について②(平安時代後期の遺構群)

先に検討した結果、4軒の住居跡出土の土器群は、10世紀後半代から11世紀前半代にかかる時期のものとすることができ、いづれの土器群に於てもカマド内や床面直上の遺物を含んだ一群と把えられたもので、各住居の構築・使用の時期もほぼこれら土器群の示す時期と考えられる。この外の遺構の内、還元焰焼成須恵器壺2個体を出土したSK825カマド状施設を有する土坑がS I 325・328住居跡と併行する10世紀後半代と考えられるものをはじめ、小破片ながら還元焰焼成須恵器壺や酸化焰焼成須恵器壺などを出土したSD184・185溝跡やSK820・821・823・863土坑並びに多数検出された小穴(この場合、全体として酸化焰焼成須恵器壺の比率出土が高い)などは、4軒の住居跡の示す時間幅の中で把えられる。

なお、重複関係などによって新旧の判明しているものは小穴を除き次の4例がある。

- ① (旧) S I 328住居跡→SD 184溝跡(新)(重複)
- ② (旧) SK 826土坑→SK 825土坑(新)(重複)
- ③ (旧) SK 823土坑→SK 822土坑(新)(重複)
- ④ S B78掘立柱建物跡=SK 819土坑(一体のものと考えられる)

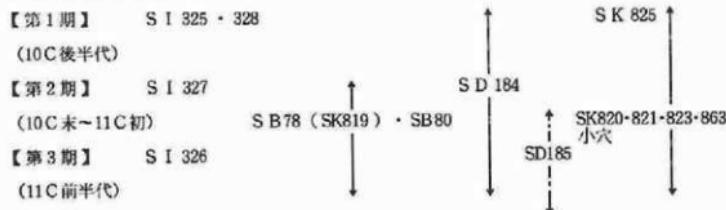
次に出土遺物のない遺構について手掛りを得るため、各遺構の方向をまとめるところとなる。僧寺南北中軸線との交角を求める。

SD 184遺跡	: 89° 西偏	SI 325住居跡	: 90° 西偏
SD 185遺跡	: 91° 西偏	" 326 "	: 85° 西偏
(東半: 89°西偏~西半: 95°西偏)	" 327 "	: 83° 西偏	
S B 78掘立柱建物跡: 85° 西偏	" 328 "	: 92° 西偏	
S B 80 " : 86° 西偏			

前項で検討した住居跡についてみると、古い順より、90°西偏・92°西偏→83°西偏→85°西偏ということになり、本調査区内のみをみた場合、中軸線に直交するものが古く、建物の方位が東へ偏するものが新しいということとなる。掘立柱建物跡につき、同様の推移を示すと仮定すると、桁行方位が東偏する2棟の掘立柱建物跡は、住居第2・3群(S I 327-326)

に併行するものと推測し得る。但し、SD 184溝跡については、中軸線に直行する方向でありながら、SI 328住居が完全に埋まつた後に構築されたものであり、堆積土の状態が余り良くなかつたので、本調査区検出の遺構の中では最末期に位置づけられる。又、SD 185溝跡も、方向が一定しないことや、小穴との重複関係をみると、切っているケースと切られているケースがあり、全体の方向が中軸線にはば直交していることをもってただちに古段階に位置づけることは適当でなく全体の時間幅の中でとらえておくのが妥当であろう。

以上を整理すると次の様になる。



以上の様に、本調査区検出遺構内、前述した平安時代前期のSX37火葬墓を除く、同後期と考えられる遺構群について、大略3期の変遷をとらえた。周辺における既往の調査成果によれば、平安時代後期に至って、国分寺北方域にあたる台地の中央部において遺構群が展開されることになるが、その多くは重複せず、10~20mの間隔をおいて散在しており、寺地内の僧尼寺中間地における様相と異なったあり方を示している。これらは、寺地外において、寺院を支える計画的集落と考えられ、今次調査においても、竪穴住居と掘立柱建物跡が一体的に配置された様相を示すなど、そうした計画集落の一部を明らかにしたこととなる。今後は、周辺調査区例とあわせ、巨視的にとらえていく要がある。いづれにてもこうした遺構群の解明は、武藏国分寺そのものの構造・変遷を究明していく上で、重要な地位を得ているものである。

- 註① こうした形態をさらに小形化したものが、国分寺の最終末を示す遺物と思われる第18次調査SI 19住居跡出土土器群にみられ、系統をおうことができる。
- ② ⑥・⑦は国分寺市蔵で、現在⑥は武藏野郷土館、⑦は国分寺市文化財保存館にて展示中である。現住職星野亮輔師にお伺いしたところ、⑥についての記憶は無いが、⑦については終戦前後に国分寺駅の南で発見され、寺へもたらされたものと、先代住職より聞いていたとのことであった。稻村垣元1949年に「武藏國分寺駅の南方畠地からも奈良時代の骨壺と見られる赤燒で蓋の付いたものを発見して居り現に国分寺に蔵して居る。」とあるのが⑥で、同氏1950にこの「土師質の壺」と並んで「須恵質で同じく蓋も有して居る」ものの記載があるので、それが⑦と思われる。佐藤敏也氏にお伺いしたところ、故塙野半十郎氏が昭和20年代に、旧岩崎敷地（現都立鍛ヶ谷戸公園一帯）内で作業中に、同敷地南東隅（現鴨町二丁目15付近）で⑥の骨蔵器を発見しているとのことである。佐藤氏も当時実見しており、出土位置についても直接聞いたことなので、稻村1949・1950にある「南方畠地」は誤りではないか、とのことであった。なお、⑧について「花沢谷戸」出土があるが、同名稱は無いので、「花沢」の誤りである。
- ③ ④は、佐藤敏也氏が昭和30年9月4日に、東元町三丁目22-5付近の東急不動産による分譲地（元天野別邸）の造成工事中に掘り出された土器壺・瓦と多量の骨を同一地点で発見し、採集したものである。

## V 繩文時代の調査

繩文時代の調査は、歴史時代住居調査の為の拡張区を除く 636380m<sup>2</sup>について実施した。

調査区の中央に南北土層断面用ベルト 2本を設け、全体を 3 地区に分割し、東半部・中央部・西半部と仮称した。調査の開始は東半部より①遺物包含層（Ⅲb 層）発掘→②遺構発掘（Ⅲc 層上面）→③遺物包含層（Ⅲc 層）発掘→④遺構発掘（IV 層上面）の順に、各地区毎に進めていった。調査が冬期にかかったこともあり、調査区の南半域において、日中にても陽が当らないため凍結し続け、難渋した。以下に調査の概要を記す。

### 1. 検出構造

繩文時代に属する遺構は、土坑 3、ピット（小穴） 163 である。いずれも検出面並びに堆積土・伴出遺物により繩文時代のものと判断した。この内、Ⅲc 層上面において土坑 3、ピット 84、IV 層上面においてピット 79 を検出した。

#### SK 864 J 土坑（図面23、図版20）

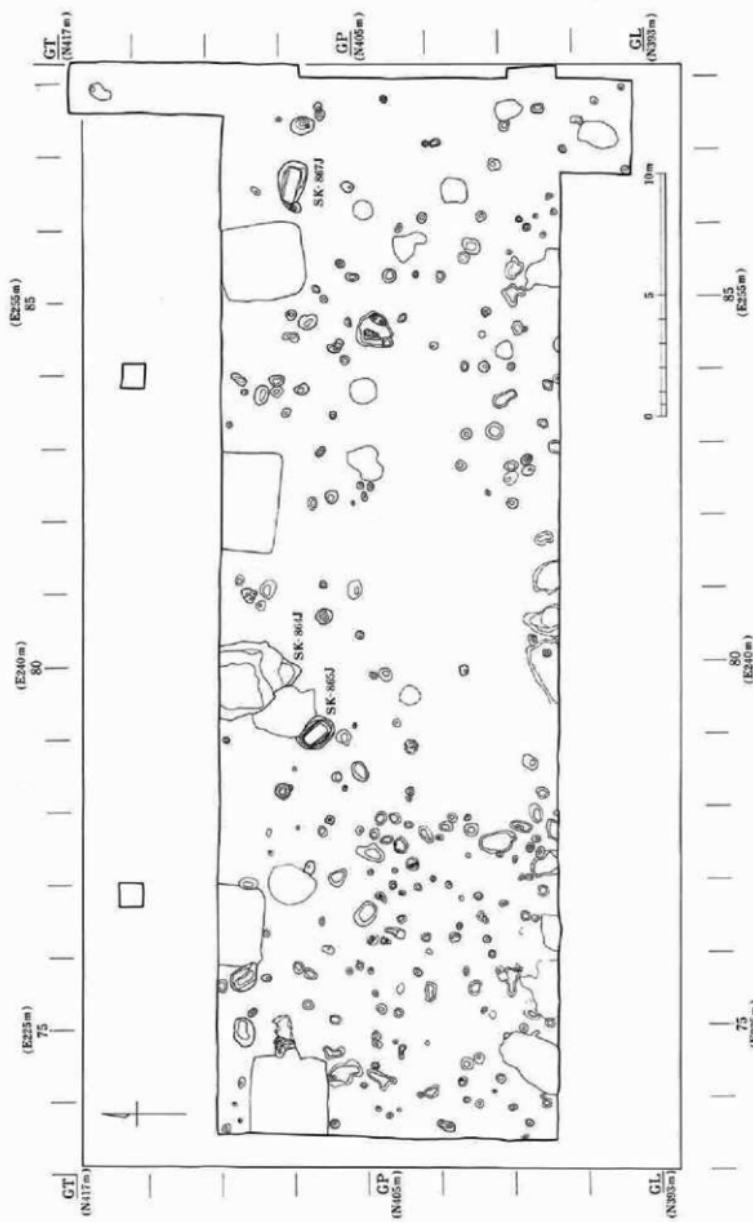
堆積土中央上層に、ローム塊及びロームを多く含む土層があり、周囲を黒色土が囲い、上面では、黒色土が環状にローム土を囲う形となる。いわゆる風倒木痕と思われる。黒色土中より土器（田戸下層式） 1 点（図面24-1）、礫 4 点が出土。なお、この土器片は隣接する第 200 次調査区（リオン本館等増築予定地）試掘時出土のもの（約 100m 離れる）と同一個体片である。

#### SK 865 J 土坑（図面23、図版20）

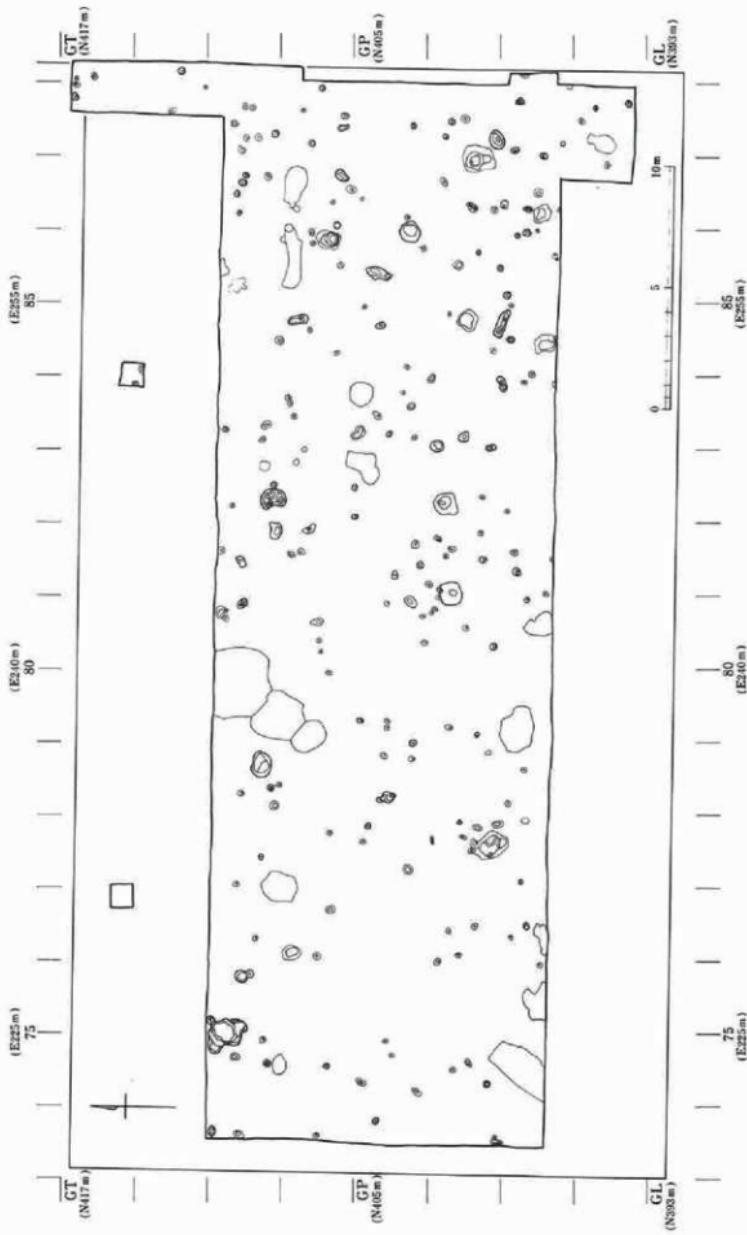
調査区中央部の G P 78・79 区に所在する。いわゆる陥し穴土坑である。Ⅲc 層上面で検出した。上面形は長円形で最大幅 1.5 m、最大長 1.6 m、底面形は長方形で、最大幅 0.48 m、最大長 1.05 m を測る。長軸方位は N40°W を示す。底面の短辺はやや外へ丸味を持ち、長辺は内側へ丸味を持って張り出す。深さは検出面より 1.15 m で、底面はほぼ平坦である。底面にピット等はない。底面より 0.4 m ほどの壁は急角度に立上るもの、それより上は大きく崩れ、長辺ではテラスができる。堆積土は、上層（茶褐色土主体、検出面のⅢb 層及びⅢc 層に似る）、下層（黒色土及び黄褐色土）より成る。最下層は層厚 0.2 m ほどの黄褐色ローム土（黒色土を若干含む）で、固く締まり、その上面を一垣底面とみたほどであるが、その上部層より漸移的に移行することや、上面がやや凹凸あることから、底面とみるに至らなかった。出土遺物はない。

#### SK 867 J 土坑（図面23、図版20）

調査区東半部の G P・G Q 86 区に所在する。SK 865 J 土坑同じく、いわゆる陥し穴土坑である。Ⅲc 層上面で検出した。上面形は、長円形で最大幅 1.14 m、最大長 1.95 m、底面形は長方形で最大幅 0.5 m、最大長 1.02 m を測る。長軸方位は N75°W を示す。底面の各辺は若干膨張



第6図 繩文時代遺跡平面全体図①Ⅲc層上面(縮尺1/200)



第7図 繩文時代遺構平面全体図② N面上面 (縮尺 1/200)

り形である。深さは、検出面より 0.9 m で、底面はほぼ平坦で若干中央へむかって下り傾斜となっている。底面から 0.5 m ほどの壁は急角度に立ち上るもの、これより上は大きく崩れる。堆積土は三層に大別される。上層は、検出面の IIIc 層より若干暗い程度の暗褐色土～暗茶褐色土。中層は、ローム粗粒目立つ黒色土～黒褐色土。下層は、ローム・ロームブロック多い黒色土～黒褐色土で締まり強い。出土遺物はない。

#### ピット（小穴）

調査区全体に大小多数のピット（小穴）を検出した。IIIc 層上面で 239 個、IV 層上面で 207 個、合計 446 個をまず確認した。粒子粗く締まり弱い木の根等による搅乱と思われる（全体図で上端線のみのもの）ものを除き、IIIc 層上面で 84 個、IV 層上面で 79 個、合計 163 個につき断面実測を行った。複数の底面をもつものを分離して、174 例につき、上面形と断面形を分類すると次のようになった。

断面形 上面形	砲弾形	円筒形	丸底形	平底形	不整形	U字形	摺鉢形	計
円形（橢円形含む）	2	3	1	1				7
不整円形	35	66	31	10	1	1		144
方形（隅丸方形含む）								0
不整方形								0
不整形		2		1				3
底面が長円もしくは長楕円						12	1	13
大形の不整円形							7	7
計	37	71	32	12	1	13	8	174

以上の内、上面形が不整円形で断面形が円筒形のものが最多く、これに上面形が同じく不整円形で、断面形が砲弾形のものと、丸底形のものと平底形のものを加えると 82% を含める。歴史時代小穴と異なるのは、大形の上面不整円形で断面摺鉢形のものの存在で、これらの多くは堆積土、形態などよりみて、小規模の風倒木痕と考えられる。平面径は 0.2 ~ 0.3 m のものが多く、深さは最も浅いもので 0.08 m、深いもので 0.61 m であった。タイプ毎・規模毎の分布状況の分析までには至らなかった。

## 2. 出 土 遺 物

縄文時代の遺物は、Ⅲ層（遺物包含層）より主に出土したのをはじめ、Ⅰ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色土）あるいは歴史時代遺構内よりも出土している。ここでは、土器・石器・礫の順に記す。出土遺物の総量は、コンテナ14箱、総数349点。内訳は次表に示す。

	点数（比率）	遺構内	包含層	表土他	報告掲数	備 考
土器	140 40%	1	81	58	46	破 片 数
石器	30 9%		25	5	11	
礫	179 51%	5	174	—		表土他の礫は除く（若干量）
計	349 100%	6	280	63	57	

### 土器（図面24、図版21）

本調査区出土の140点の土器は次の8類に分けられる。

第1類 早期後半 田戸下層式土器		図面24-1	1個体	1点
第2類 前期後半 諸磯b式土器		" - 2	1個体	37点
第3類 中期前半 五領ヶ台・阿玉台・勝板式土器		" - 3~14	12個体	12点
第4類 中期後半 加曾利E式土器	a. 口縁部片（降帯文）	" - 16	2個体	2点
	b. 胎部片（"）	"	1個体	8点
	c. 深鉢（W字状文他）	" - 15	1個体	20点
第5類 時期不明 有文（沈線文）			8個体	8点
第6類 時期不明 縄文のみのもの	a. 早期？	" - 17	4個体	7点
	b. 中期？		3個体	3点
第7類 時期不明 無文のもの	a. 胎部片（繊維混入）		1個体	1点
	b. "（早期？）		15個体	15点
	c. 底部片（"）	" - 18	1個体	1点
	d. 口縁部片（中期？）	" - 19	1個体	1点
	e. 胎部片（中期？）		6個体	6点
	f. 底部片（"）		2個体	2点
第8類 細片・分類不可			16個体	16点
		合計	75個体	140点

本調査区の南の第107次調査区においては、ほぼ同じ面積の調査によって、331点の土器を得ている。早期撚糸文系・条痕文系・押型文系土器・前期諸磯b式・中期五領ヶ台式・勝坂式・阿玉台式・加曾利E式、後期堀之内式・加曾利B式などである。この内、今次調査区域では、

早期撚糸文系・早期押型文系と後期のものを欠くほかは、おおよそ類似した内容を示している。

図面24-1は田戸下層式土器。口唇肥厚し、口唇上にも施文される。文様は平行する細沈線と沈線間の瓜形状刺突文（竹管文）及び、太沈線による羽状文。胎土には白色の細砂粒多い。色調は内外共橙褐色。器厚約1cm。

図面24-15は、加曾利E式Ⅶ段階（安孫子・秋山・中西1980）の深鉢形土器。ゆるやかな波状を呈するか。口唇が肥厚し無文部に刺突文等が二重にまわる。くびれ部分にW字文、くびれ部以下は△状文となり、Wの上部と△の内側が縦文、他は無文となる。図のdとeが一箇所で接合するものとみて、復原を試みた。奇異な感じも受け、確実性に乏しいので、参考案として提示する。

#### 石器（図面25、図版22）

本調査区出土の30点の石器は次の9類に分けられる。

第1類 石鎌	2点
第2類 打製石斧（全て短冊型）	4点
第3類 磬器	2点
第4類 磨石	5点
a. 不整形	
b. 偏平のもの	1点
第5類 石皿（偏平、小形のもの）	1点
第6類 スタンプ形石器	1点
a. 打面不整方形、握り部鳥帽子形（片側加工）	1点
b. 打面不整三角形	1点
第7類 削器・石匙	1点
a. 削器	
b. 粗製石匙	1点
第8類 台石？	1点
第9類 剥片	10点

図示した11点については第14表にまとめる。

図面25-10はU字状に湾曲する縁辺の両面に細かい刃部加工を施したもので、上部破断面の一部に細かな剥離痕がみられる。

107次調査区では総数53点あり、石鎌・打製石斧・スタンプ形石器・凹石・敲石・特殊磨石・剥片などがあった。本調査区においては、凹石と特殊磨石を欠き、磬器と石皿・削器・石匙・台石？を加える。何れも、早期及び中期に特有な石器群である。

第14表 石器計測表

面	圓版	種別	分類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存状態	石材 —は不明	備考
25-1	22	石	礫	I 質 GO78区 ■ c層	1.5	1.4	0.2	1.5	完形	黒曜石	
25-2	22	石	礫	I 質 GM75区 ■ c層	2.3	1.25	0.125	2.0	完形	チャート	
25-3	22	打製石斧	2 級	GP81区 ■ b層上部	5.3	5.5	2.1	9.05	頭部のみ	粘板岩?	
25-4	22	鐵	器	3 級 GP80区 ■ b層	6.4	1.19	3.4	47.0	完形	真岩?	
25-5	22	磨	石	4級a GP87区 ■ b層上部	14.3	7.0	4.1	48.5	完形	砂岩	
25-6	22	磨	石	4級a GM78区 ■ b層	7.3	7.3	4.3	28.0	片欠	砂岩	頂部に點打痕
25-7	22	磨	石	4級a GN78区 ■ b層	11.0	7.2	4.1	42.0	完形	閃綠岩	
25-8	22	スタンプ形石器	6級a	GN79-80区 ■ b層上部	10.7	7.5	4.6	41.0	完形	—	
25-9	22	スタンプ形石器	6級b	GP-GQ79区 底乱	13.3	7.5	6.3	77.0	完形	砂岩	
25-10	22	削	器	7級a GO77区 ■ b層上部	4.4	5.1	0.7	1.4	片欠	チャート	
25-11	22	粗	打製石斧	7級b GQ86区 ■ b層	9.5	5.4	1.0	46.5	完形	真岩?	

## 礫

包含層及び遺構 (SK 864J土坑) 内より土器・石器にまざって 179 点 (計 35676g) の礫が出土した。内訳は次表の通りである。

地成・未地成	地成						未地成						計	
	砂		岩		チャート		その他の		砂		岩			
	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破		
包	8 (2)	49.0	2	3	7 (1)	31	25	16	8	9	36 (2)	174 (16)		
合	手取	3693	2457	475	529	4882	1059	1918	925	518	115	1868	2033	
固	全	955	11942	95	1560	3215	2254	4795	925	413	375	4885	35206	
SK	点	8					1	2				2	9	
664	全	955					40	417				13	479	
J	平均	955					40	2086				85	94	

この内、包含層出土の 174 点につき、第51次調査区包含層出土の 7546 点の結果と比較すると下表の通りとなる。

点数	全重 g	平均重 g	平均重 g	G 材			細目			被成状況			地成・未地成
				砂	岩	チャート	その他の	完	破	片	被成	未	地
本地区包含層	174	35206	2023	103 (59.0)	23 (13.8)	48 (28.6)	46 (26.6%)	128 (74.5%)	69 (40.5%)	105 (60.0%)	16 (9.5%)	—	地成物有
第51次調査区包含層	7546	466320	(7191.0)	5685 (7.5%)	1085 (15.5%)	782 (10.0%)	2789 (37.7%)	4707 (59.8%)	5988 (93.8%)	558 (7.7%)	739 (1.0%)		

点数に開きがあるので単純比較は妥当でないと思われるが、指摘されることとしては、①平均重量が大きいこと、②その他の石材の比率が大きいこと、③破損率がやや多いこと、④末焼難の比率が大きいこと（特にその他の石材が多い）などがあげられる。なお、接合資料は1例のみで、3点の砂岩、焼成、破片礫が接合している。

### 3. 遺物包含層の発掘

縄文時代の遺物包含層は第Ⅲ層で、Ⅲa層（黒褐色土）、Ⅲb層（暗茶褐色土）、Ⅲc層（ローム漸移層、茶褐色土）に分層されるが、遺物はこの内Ⅲa層からⅢb層にかけて多く出土し、以下漸移的に減少する。

層厚はⅢ層全体で、調査区西端で50cm、東端で60cm。西に薄く、東で厚い。地形が東北方向へゆるやかに傾斜しており、東の野川谷壁より浅く延びる谷地形の影響と思われる。土器の接合資料において、東西方向の動きがみられることと関連が考えられる。

土器・石器・礫の平面分布を第7～9図によりみると、接合資料を除き、散在している様子が伺える。調査区北半に少ないので、歴史時代住居等ローム面までの遺構が多い為であり、南半において少ないので、調査が冬期にかかり、凍結した為、充分に捕捉できなかった為である。

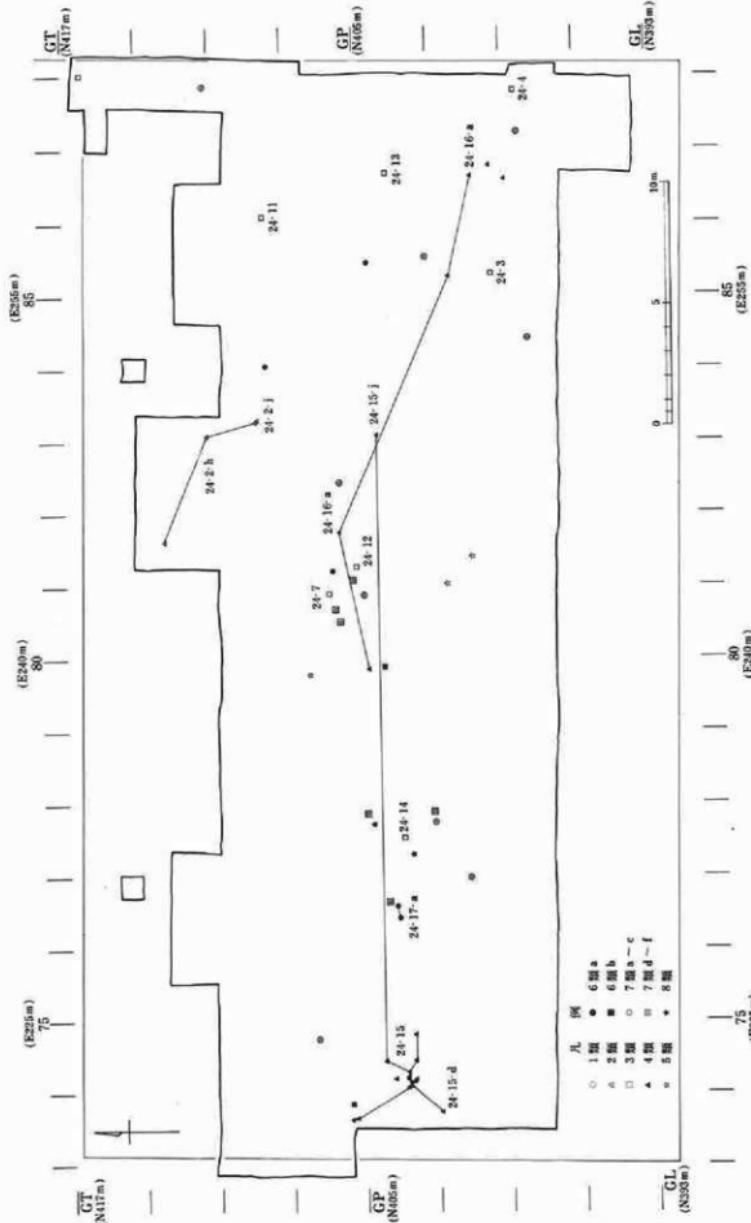
南側の107次調査区においては、今次調査とほぼ同面積（612.6m<sup>2</sup>）の調査によって、総数1,184点（土器331点、石器53点、礫800点）の遺物を得、その平面分布は東北方向にむかってややくなる傾向を示していた。礫は調査区中央北壁と調査区南東隅にやや集中していた。

今次調査の結果と比較すると、分布傾向は一致しており、地形・地層との対応が考えられるにもかかわらず、107次調査の結果から予測すれば、今次調査においては、さらに数量が増加すべきところが、逆に減少している。両地区間の最短距離は10m以内であるが、このように一見矛盾する結果となったが、その割合をみると全体では弱であるが、土器・石器が弱に対して礫は弱となっており、両者を区別して考える必要があるうし、分布の疎密についてはより広範囲にとらえるべきであろう。

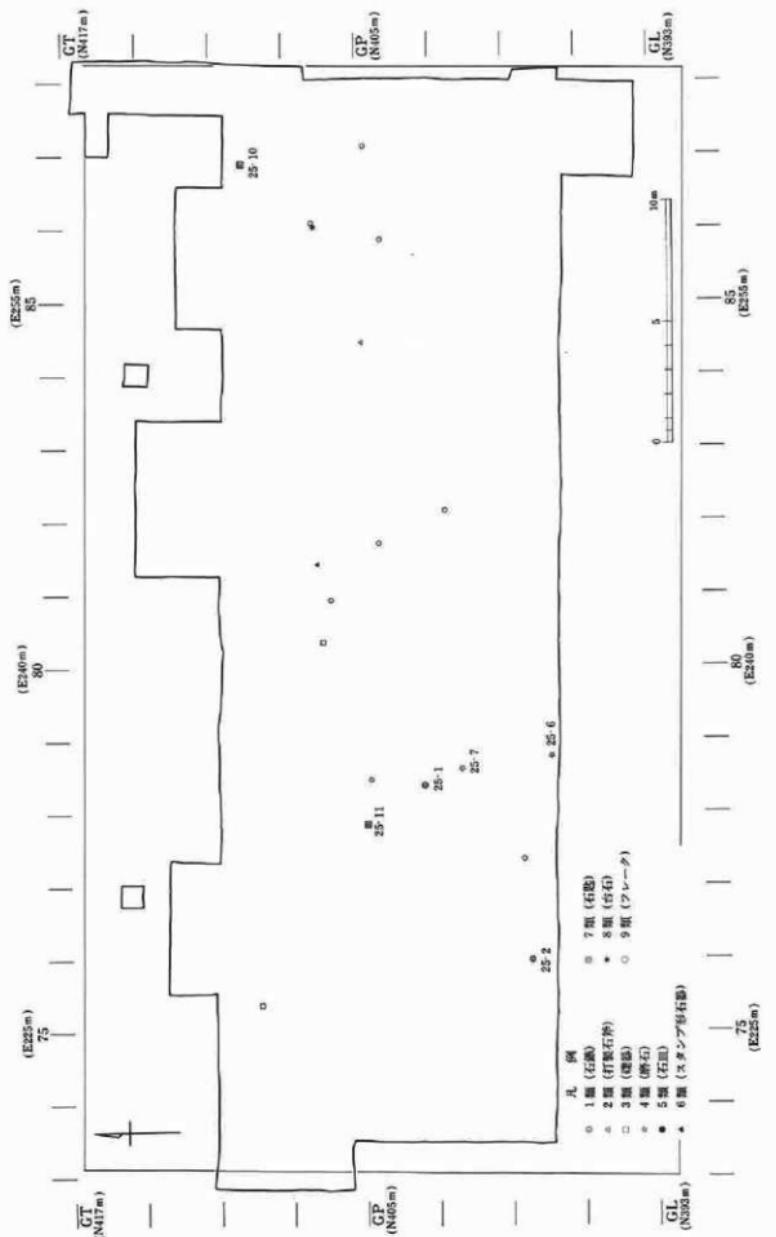
#### 4. 小 結

本地区的南約50m地点の第51次調査区（国際電信電話株式会社国分寺寮建設地）における調査成果より、早期撲糸文期、条痕文期及び中期後半加曾利E式期を主体とした集落遺跡として多喜窪遺跡C地点を先に認識した（『国分寺市史』上巻）。本第201次調査区では、南接の第107次調査区と同様に、遺構としては土坑のみで、他に早・前・中期の遺物を得るなどの成果があった。この内、中期前半の遺物については、多喜窪遺跡C地点では少なく、東方の多喜窪遺跡D地点に多いことから、D地点との関連で把えられる。多喜窪遺跡C地点は台地南縁（真姿の池の湧水地点を中心とする）に拠点を有するものと考えられ、崖線より約150m入った第51次調査区はその北側縁辺部にあたり、さらにその北方の第107次調査区や本地区はその周囲に広がる活動領域と考えられる。

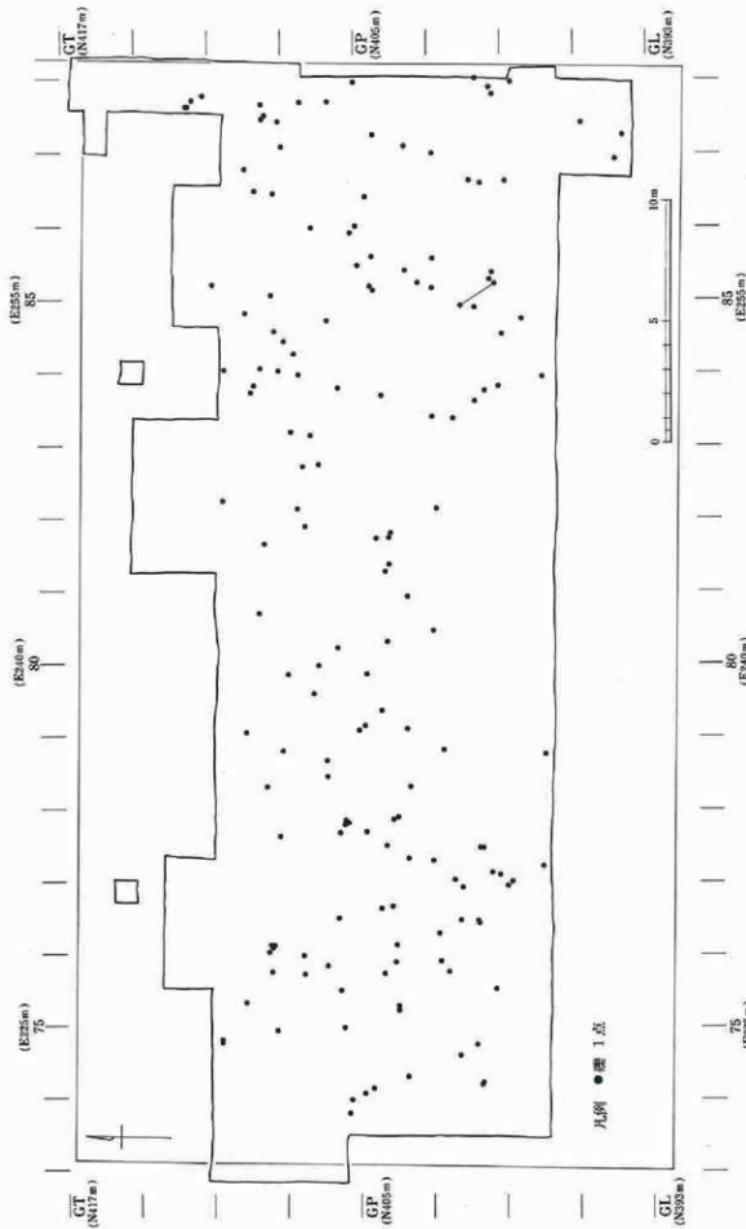
2基検出された土坑はいわゆる陥し穴土坑とされているもので、早期後半に盛行したものと考えられている。（この外に墓壙説、貯蔵穴説などがある。）今次調査では遺物の出土はなかったが、検出面より考えて早期に属する可能性が強い。本地区例を含め、多喜窪遺跡（地点北辺周辺では同種の土坑が6例発見されたことになる。この種の土坑の坑底には小ビット等が穿たれるものが多くみられるが、本地区周辺の6基には底面施設はなく、形態等共通点を有している。陥し穴とすれば同一の狩猟方法による遺構と考えられるし、時間的な隔たりも少ないものとみた方が適当であろう。又、SK 865 J土坑の最下層の様に人為的埋め込みと思われるものが、外にも1例あって、陥し穴とすると不自然な行為と思える。二点とも他地域との比較の好材料として特筆される。



第8图 土葬出土分布图 (缩尺1/200)



第9図 石器出土分布図 (縮尺1/200)



第10図 墓出土分布図 (縮尺 1/200)

## VI 先土器時代の調査

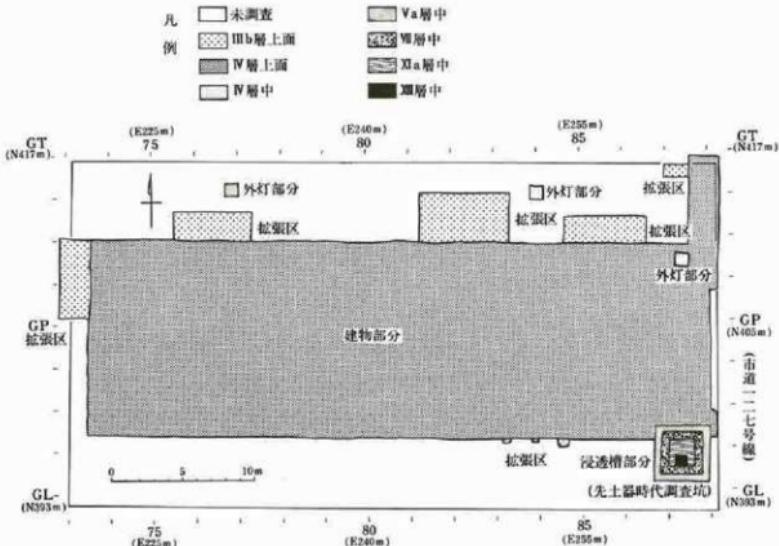
先土器時代の調査は、調査地区の南東部の浸透槽設置位置と、外灯部分3箇所において実施した。

浸透槽部分では深掘り部分でXIII層中まで、外灯部分では掘削深度にあわせ、IV層中もしくはVa層中にて調査を終了した。

南に隣接する第51次調査区及び第107次調査区において、ユニット3箇所（第51次調査）、礫群1箇所、ユニット1箇所（第107次調査）が発見されていることから、今回対象としたものである。ことに、第107次調査の礫群及びユニット検出位置から、今回の浸透槽部分まで、ほぼ真北へ直線で12mほどであることから遺構の存在が期待された。

結果としては、遺構・遺物はいずれも調査区においても何ら検出されなかった。

但し、第51次調査、第107次調査の結果をみても、該期の遺構は本地区周辺では密集することなく、点在することが知られており、偶々、検出されなかったものと考えた方が適当であろう。



第11図 発掘深度図

## VII 結語に代えて

武藏国分寺址調査は、創設時より衰退時に至る期間を、1.堂塔伽藍など寺の機能を果すための造形物—建造物・溝槽など—の推移と、2.寺地内外、周辺における道路および人の居住の形態を明らかにし、その成果を総合して、国分寺設置とそれによる歴史的意義を解明することにある。この報告書に載せる調査は、その一環として佐藤氏による共同住宅建設工事に先立って、文化財保護法の定めるところによって行ったものである。

遺跡地周辺は、先土器・縄文以降の遺構遺物の存在が既に知られている地域でもあり、それら各時代の埋蔵物についても慎重に作業を進めた。その成果については本文中に記述してあるが、中から二三主要な点について摘要しておきたい。

その第一は、火葬墓である。容器は土師器甕を使用しており、口辺を下の逆位に容器を覆せて隅丸長方形の土壤内に安置してあったが、表土削除作業のために上方を失なっていた。しかし残存した範囲では、容器内は人骨の破碎されたもの以外に遺物はなく、壇内にも副葬品などはなかった。納骨器は土器の分類上これを平安時代前期と判断しているが、埋納の時期もそれとみて差支えない。本文中にこれまでの出土例について述べているように、6例中2例は以前現国分寺に出土後納められたもので内に火葬骨が充満している土師の甕（底部に3個の穿孔がある）と須恵の甕であり、花沢付近の出土と伝えられており、容器自体は丁寧に掘り出されているが出土の状況については判然としていないのが残念である。

この伝花沢の2例を除いても4例は、いずれも僧寺址の北東の地域から出土したものであり、比較的数多く調査を繰り返して実施した北西部からは一点の納骨器も出土しなかったことなどから、この地域を、平安前期のころある種の納骨の地としたであろうとする考えは首肯されるものといえよう。それが一部特定の者の墓域であったのか、火葬骨埋納以外には使われなかつたのかなどについては現在のところではまだ断定できないが、寺地区域外の土地使用法の一例と見ることはできよう。

さらに、火葬骨埋納方法の一端がここで明らかにされている。それはおそらく埋納時には小さな塚状を呈していたのであろう。平安時代のこの種の小墳形は既に明らかにされているが、発掘により推定ながら一例を加え得たものといって差支えない。

平安前期に如上のように他の遺構・遺物がなく火葬墓のみを出した本地域が後期に移って住居地域に転用され、しかもその中に掘立柱建物が加わって面目を一新しているさまが調査で解明されたが、調査担当者の述べるように、それが計画的集落の觀を呈すると見てよいとともに、寺地周辺の土地利用の姿を示すことになるので興味深いものがある。しかも、これら堅穴住居について、入口部、カマド・炉などの施設が明確であり、当時の家屋構造解明の好資料であることも特筆できよう。

さて、そこで今回の調査に当って、他にも同様の問題が大なり小なり起つたのであるが、調査遂行上の問題点を記載することを許して載きたい。今回の調査は、共同住宅建設工事に伴う事前調査として実施したため、費用の大半は原因者である佐藤氏が負担することになった。数次にわたる協議の上、理解を得て開始したのであるが、

1. 同地は既に佐藤氏外3名による共同住宅建設のため昭和55年4月から10月末まで7ヵ月間の事前調査を行ったもので、今回は、その増築工事計画として申請されていた。ところが、今回は遺跡の内容が豊富であり調査の日程を現地10ヵ月、室内約19ヵ月と延ばさざるを得なかつた。
2. この期間を多少でも短縮するには、現調査体制を改善することが一策であるが、現状ではかなりの困難がありやむを得ないものがあった。
3. 決算後、調査費の支出につき、調査結果と照し合わせ、前回に比べ多額にすぎるのではないかとの疑問がでているので十分検討したが、調査対象、調査方法などの点からやむを得ないものと結論せざるを得なかつた。

これらについては、本文冒頭、調査に至る経過として記載したものをご覧いただきたいが、調査者としては、地権者側が文化財の意義を理解されて、建設を延期し土地を一時提供される好意に対して、それが法の趣旨に添うものであるとしても、可能の限り善処したいものと思っている。

国分寺市における常設組織としての調査会は、巣頭の星野会長の「序」にあるように、市内の二つの調査会を統合一本化し、その対象を全市域とすることにした。しかし、その中の主要なものが、武藏国分寺とその周辺関連遺跡であることにかわりはないものと位置づけている。現実には、調査会事業として、各種土木工事等開発に伴う事前の調査が、逐次増加することにより、調査団の現有勢力をもってしても、かなりの無理が生ずることになり、一調査に当て得る調査者の数が限られてき、内容を略にしては、厳に戒むべきことなので、期間延長となり、それがやがて経費にまで及ぶという現状になる。市当局もこれを承知していて最善の措置を十分考慮されているが、われわれとしても、何とかこの状態から脱却する方途を市と共に考え腐心しているものであり、諒承を得たいとお願いするものである。

(調査団長 滝 口 宏)

## 参考文献

- ア 安孫子昭二・秋山道生・中西 光、1980、「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『神奈川考古』第10号「シンポジウム 縄文時代・中期後半の諸問題ーとくに加曾利E式と曾利式土器との関係について」所収
- イ 石田守一、1987、「我孫子市新木東台遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学会  
福村坦元、1949、「武藏野の奈良時代文化」『武藏野』31-2  
福村坦元、1950、「武藏野奈良朝文化 出品解説」『武藏野』31-3・4  
今村啓爾ほか、1973、「霧ヶ丘」  
今村啓爾、1983、「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2〈生業〉
- カ 神奈川考古同人会、1983、「シンポジウム収録、シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題」『神奈川考古』第15号  
上村昌男、1985、「国分寺市K3遺跡出土の葉巻形骨葬器」『東京の遺跡』No.6 東京考古談話会
- コ 恋ヶ窪遺跡調査団、1979・80・82、「恋ヶ窪遺跡調査報告」I・II・III 恋ヶ窪遺跡調査会  
恋ヶ窪遺跡調査団、1984、「花沢東遺跡 都宮国分寺南町三丁目墳地建設に伴う調査」  
国分寺市、1986、「国分寺市史 上巻」  
小島正裕・田中純男・齊藤 進、1983、「No.746遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和57年度  
〈第5分冊〉』 朝隈東京都埋蔵文化財センター  
小島正裕・田中純男・齊藤 進・岩橋陽一、1984、「No40遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和58  
年度〈第7分冊〉』(財)東京都埋蔵文化財センター
- サ 斎藤時男、1956、「載骨器の底部穿孔について」『若木考古』43、国学院大学考古学会  
坂浩秀一、1984、「入間市八坂前窯跡」八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会  
笛生 衛、1987a、「君津郡袖ヶ浦町造寺原遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会  
笛生 衛、1987b、「安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- シ 市立市川考古博物館、1983、「シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人
- タ 高橋一夫・宮 昌之、1983、「北武藏の窯址」『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』  
『神奈川考古』第14号
- ト 豊巻幸正、1987、「君津郡袖ヶ浦町永吉台遺跡群－西寺原地区－」『房総における歴史時代土器の  
研究』房総歴史考古学研究会
- ナ 栖崎彰一・齊藤孝正、1981、「猿投窯編年の再検討について」『シンポジウム「平安時代の土器・  
陶器」－各地域の諸様相と今後の課題－発表要旨』愛知県陶器資料館  
栖崎彰一、1983、「猿投窯の編年について」『愛知県古窯群分布調査報告(Ⅱ) (尾北・三河地区)

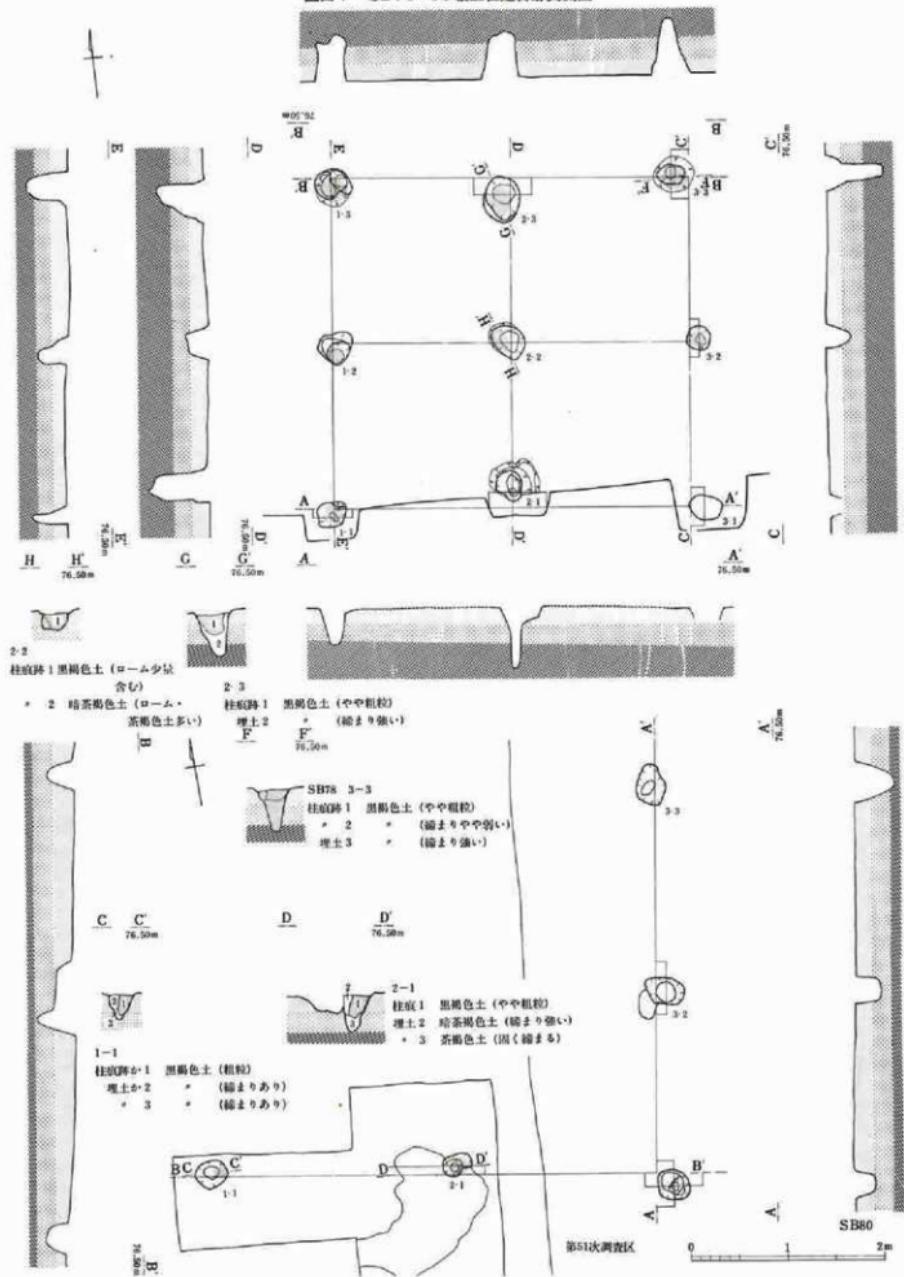
- 』愛知県教育委員会
- ニ 西脇俊郎・山口辰一、1980、「武藏国府・国分寺出土土器の変遷—試案」『文化財の保護第12号、特集武藏国府と国分寺』
- 西脇俊郎、1981、「『小結・出土土器について』『武藏国分寺遺跡発掘調査概報V』武藏国分寺遺跡調査会、国分寺市教育委員会
- ノ 野村幸希、1975、「日本各地の墳墓 南関東」『新版仏教考古学講座』7巻
- ハ 長谷川厚、1983、「歴史時代墳墓の成立と展開(1) —特に相模・南武藏の火葬墓の様相を中心として—」『古代』75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 服部敬史・福田健司、1979、「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号
- 服部敬史、1980、「八王子市南部地区の遺跡—東京都八王子市宇津貴町および周辺所在の遺跡分布調査報告』八王子南部地区遺跡調査会
- 服部敬史、1981a、「南多摩窯址群—御殿山地区62号窯址発掘調査報告書』八王子市舞水遺跡調査会
- 服部敬史、1981b、「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」『シンポジウム「歴史年代の土器・陶器」発表要旨』愛知県陶磁資料館
- 服部敬史・福田健司、1981、「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
- 服部敬史、1982、「南武藏における古代末期の土器様相」『東京考古』第1号 東京考古談話会
- 服部敬史、1983、「南武藏の窯址」『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号
- フ 福田信夫、1982、「武藏国分寺遺跡発掘調査概報W」『武藏国分寺遺跡調査会、国分寺市教育委員会』
- 福田信夫、1984、「武藏国分寺出土の土師質土器について」『東京考古』2 東京考古談話会
- 藤沢一夫、1970、「火葬墳墓の流布」『新版考古学講座』6巻
- 富士見市遺跡調査会、1984、「針ヶ谷遺跡群」
- ホ 房総歴史考古学研究会、1987、「房総における歴史時代土器の研究」
- マ 前川 要、1984、「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』
- ミ 宮内勝巳、1983、「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料房総における奈良・平安時代の土器』史館同人
- ム 武藏国分寺遺跡調査团、1979、「武藏国分寺跡 武藏国分寺遺跡調査会年報(1974)」
- 武藏国分寺遺跡調査团、1980、「武藏国分寺遺跡発掘調査概報N」
- 武藏国分寺遺跡調査团、1982、「武藏国分寺遺跡発掘調査概報V」
- 武藏国分寺遺跡調査团、1985、「武藏国分寺跡発掘調査概報W」
- ヤ 山口辰一、1980、「ことぶきマンション地区的調査」『武藏国府関連遺跡調査報告II』府中市教育委員会
- 山口辰一、1984、「武藏国府関連遺跡における土器編年試論」『武藏国府関連遺跡調査報告V』府中市教育委員会
- 山口辰一、1985、「武藏国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3 東京考古談話会



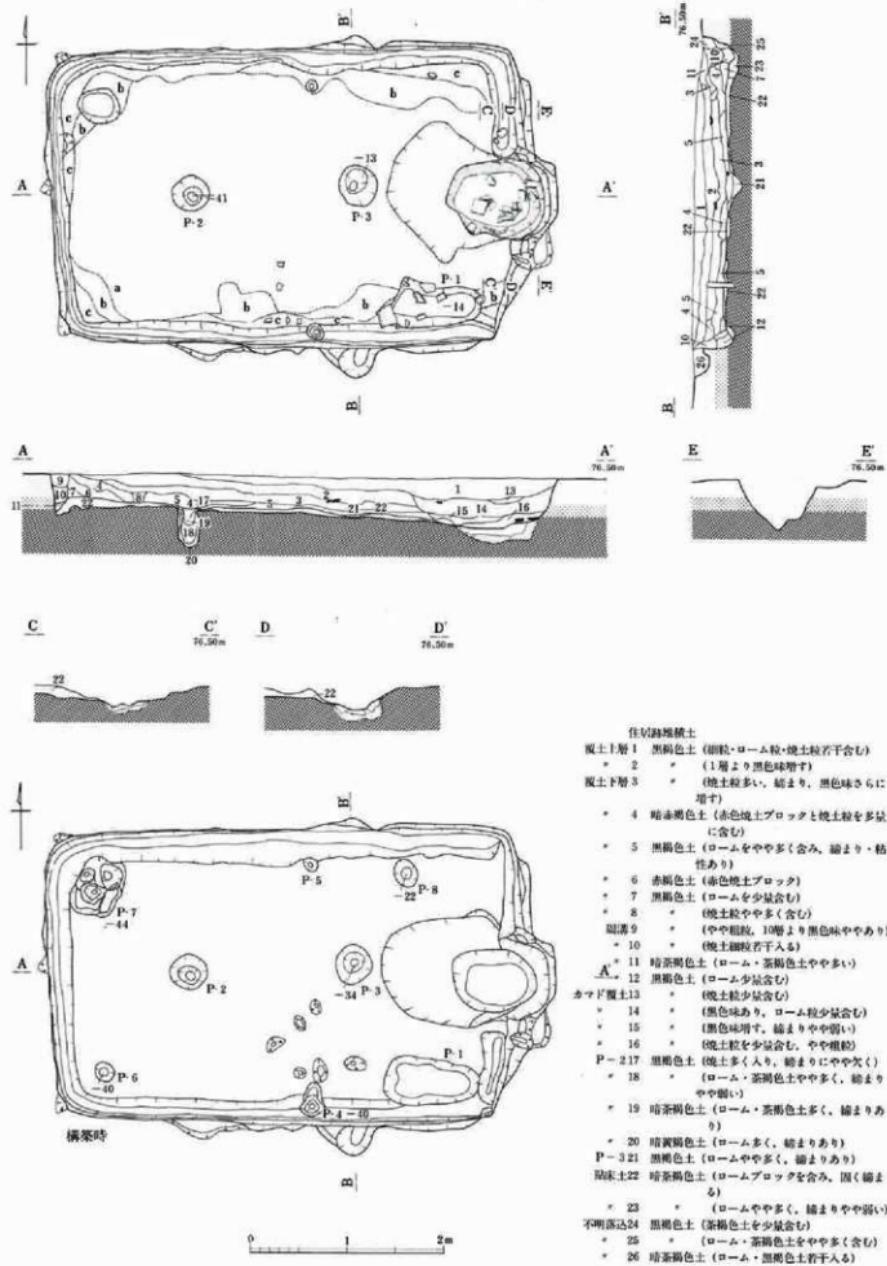
# 図 面



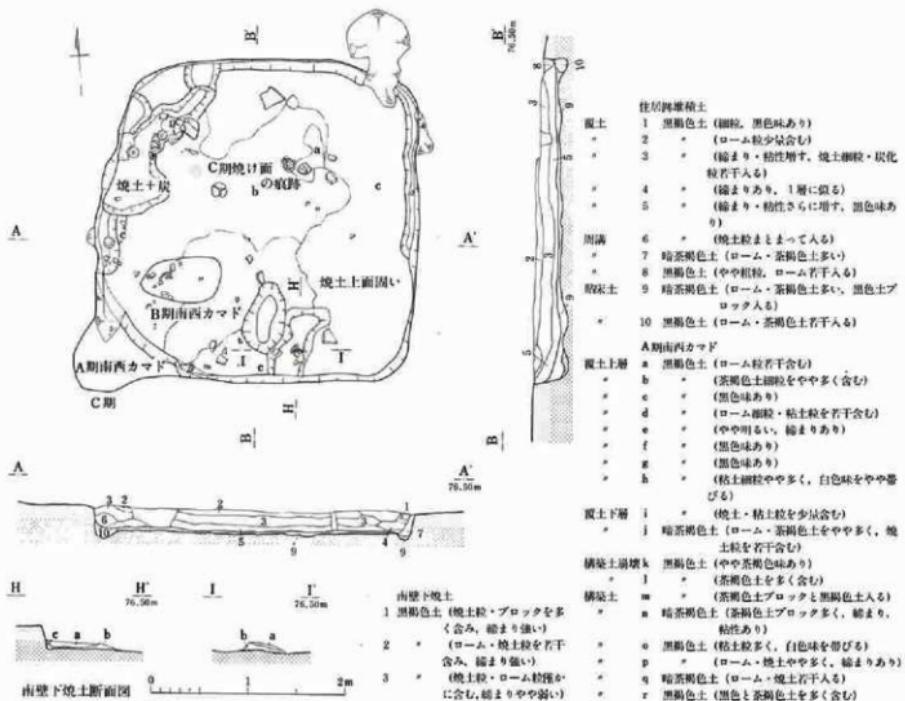
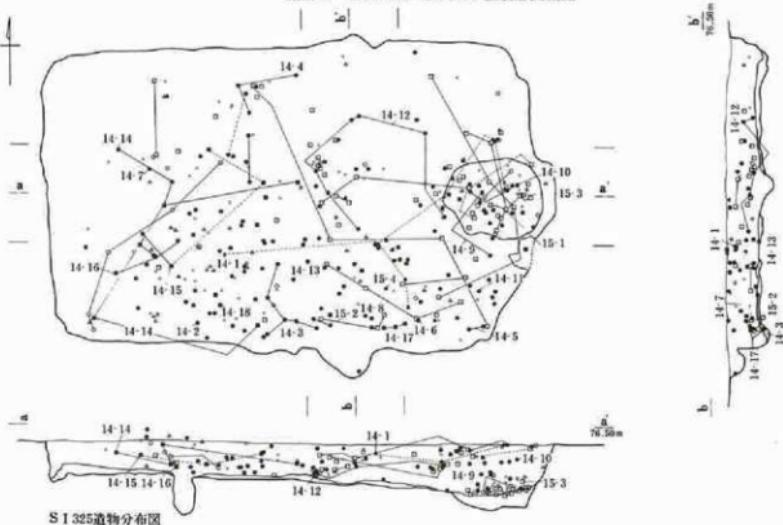
図面1 SB78・80建立柱底物質実測図



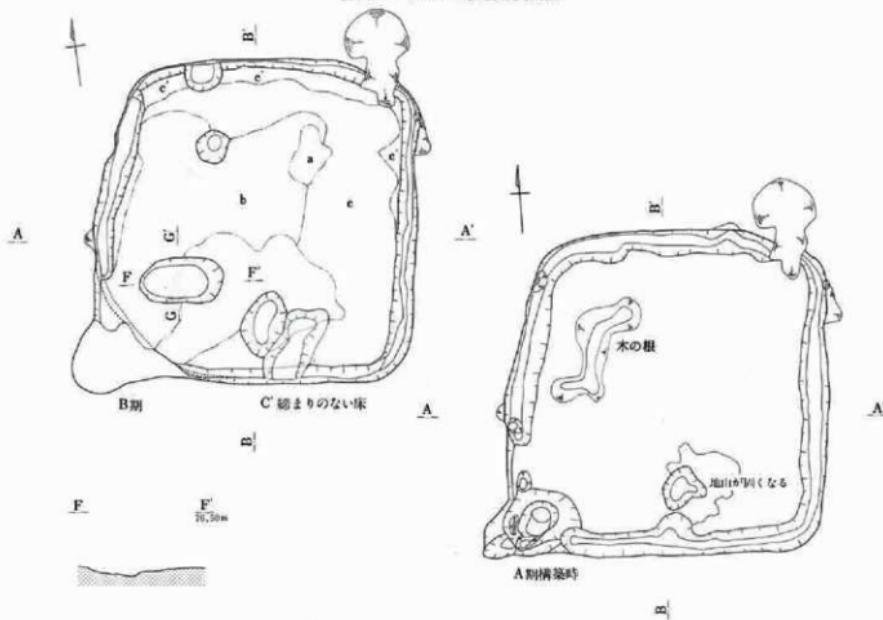
図面2 S1325住居跡実測図



図面3 SI325・SI326 住居跡実測図

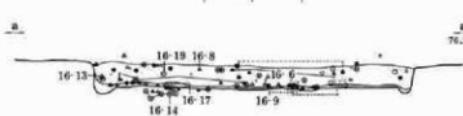
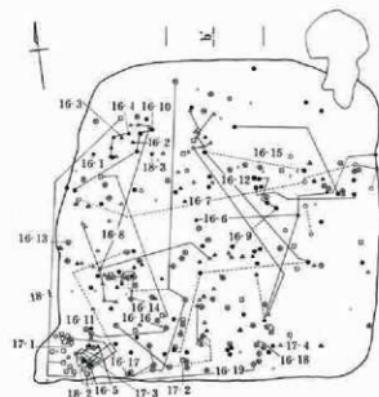


図面4 SI326住居跡実測図



G  
G'  
20.50m

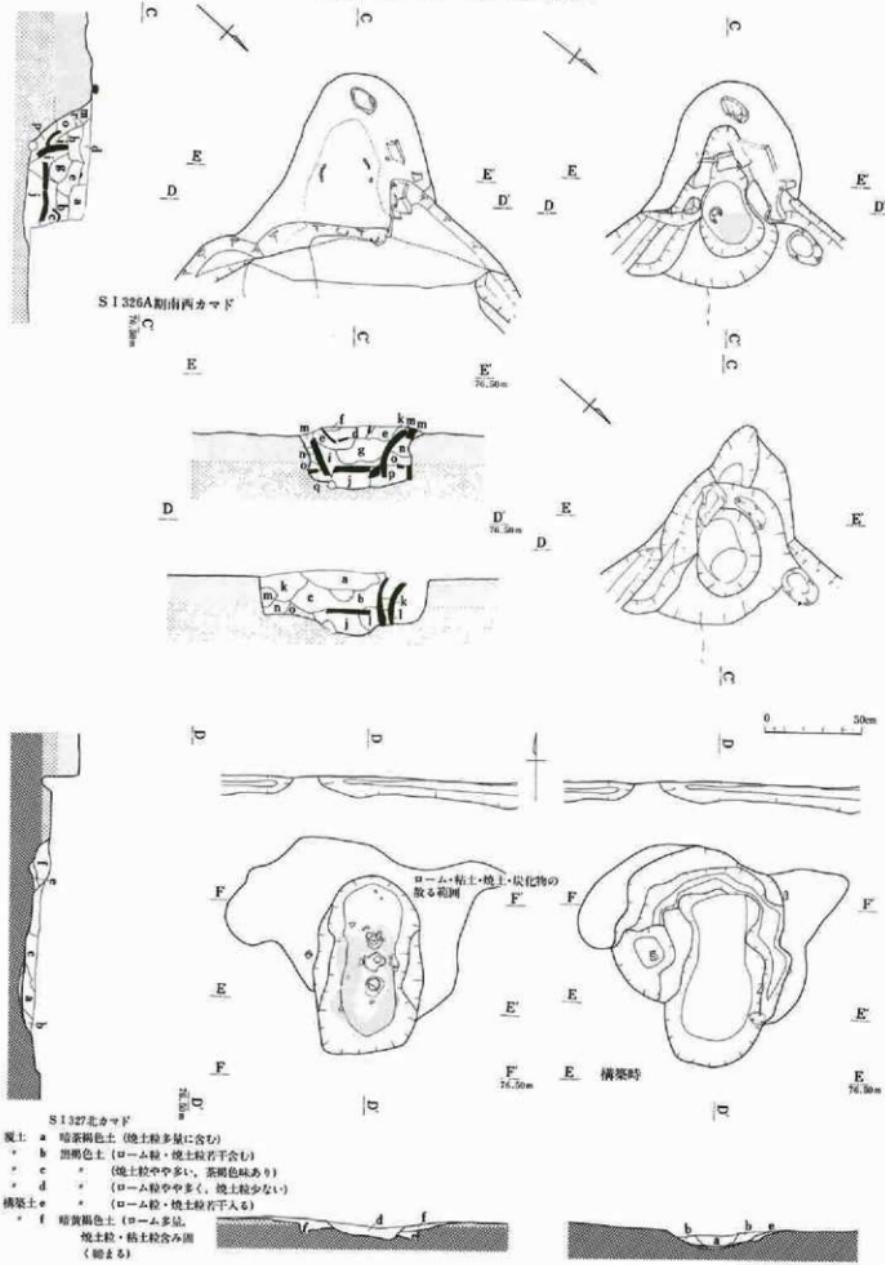
B期南西カマド断面図



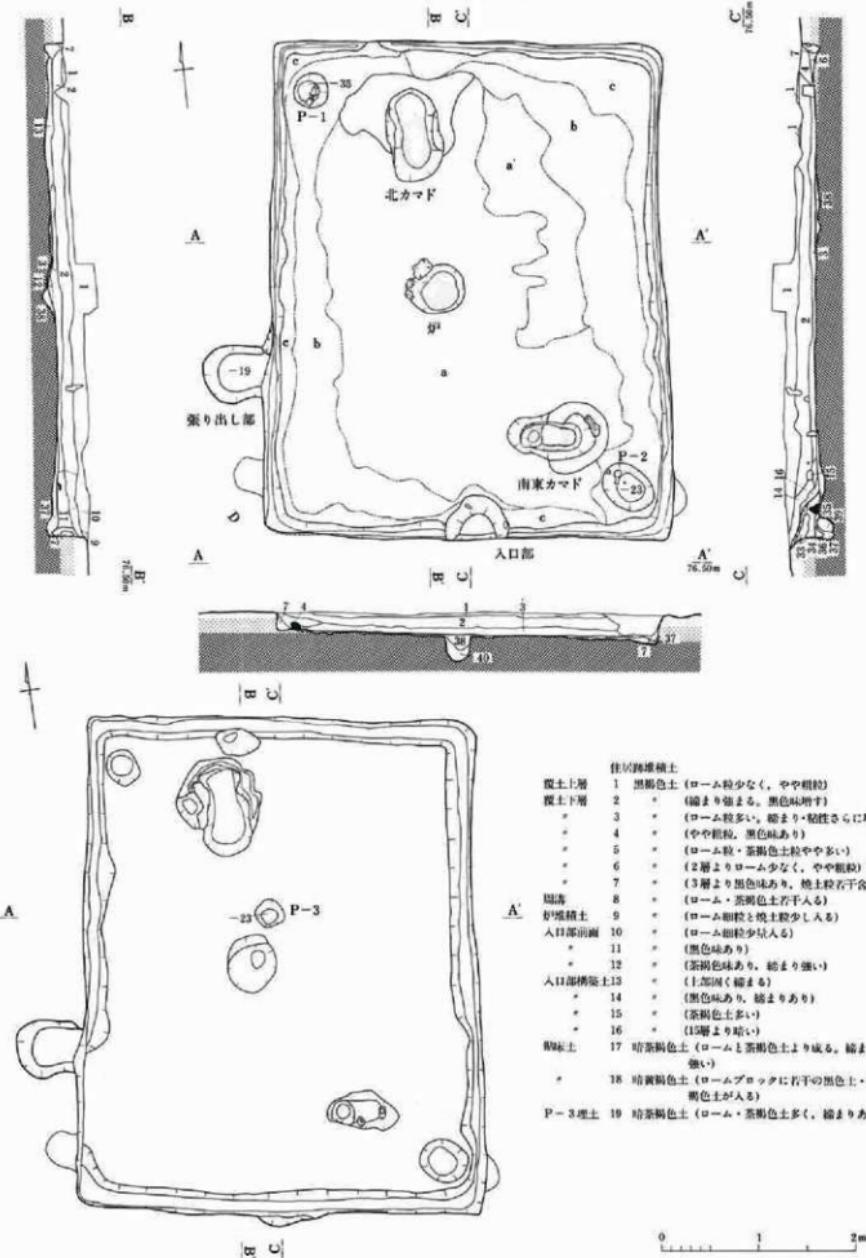
遺物分布図

0 1 2m

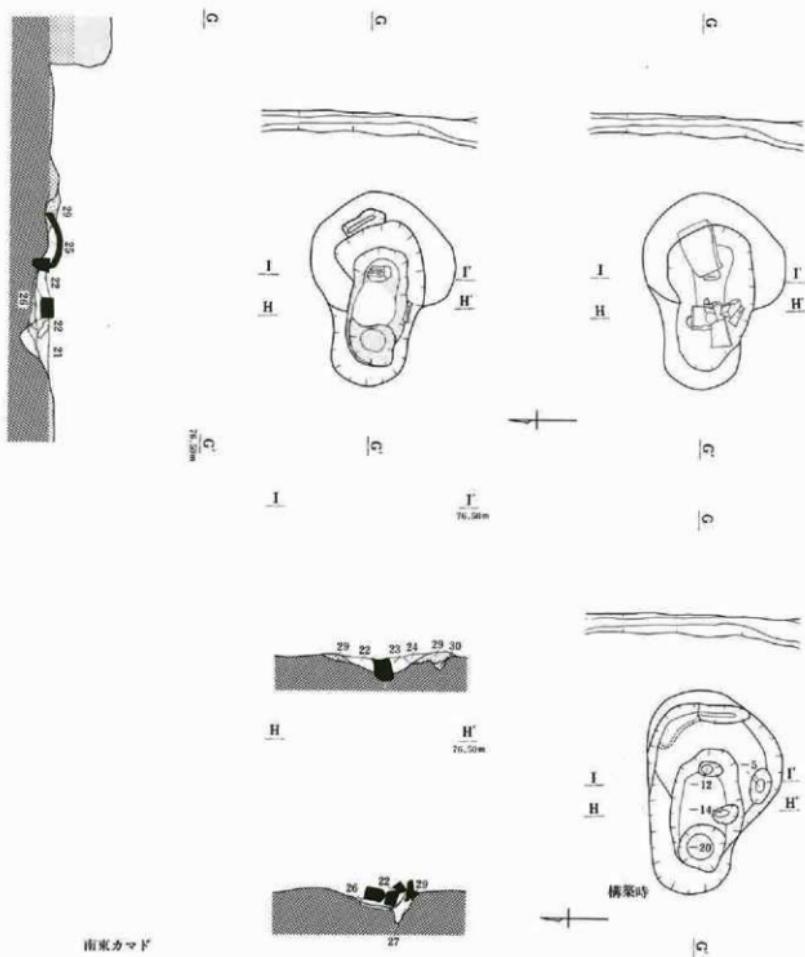
図面 5-S1326 327 住居跡実測図



図面6 S1327住居跡実測図



図面7 SI327住居跡実測図

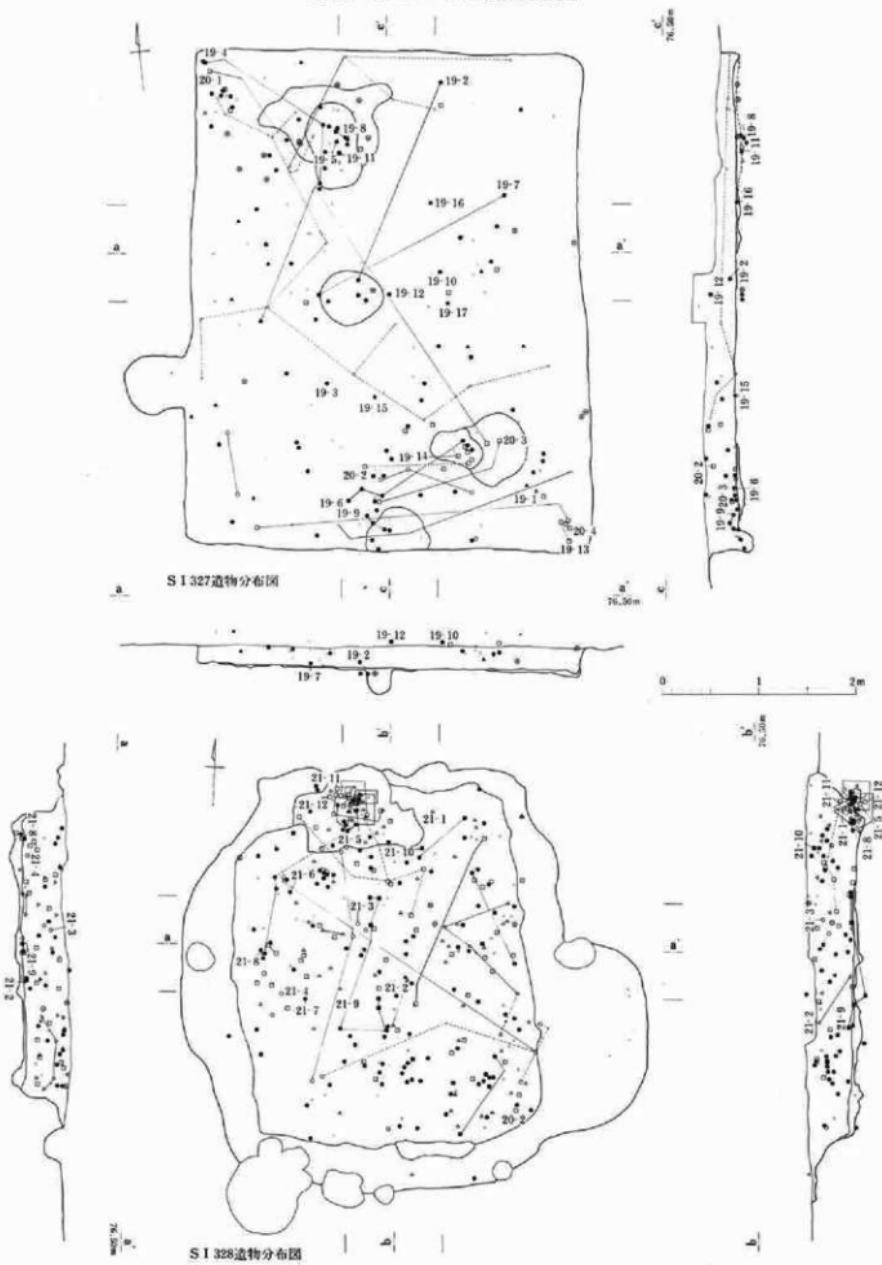


SI327南東カマド

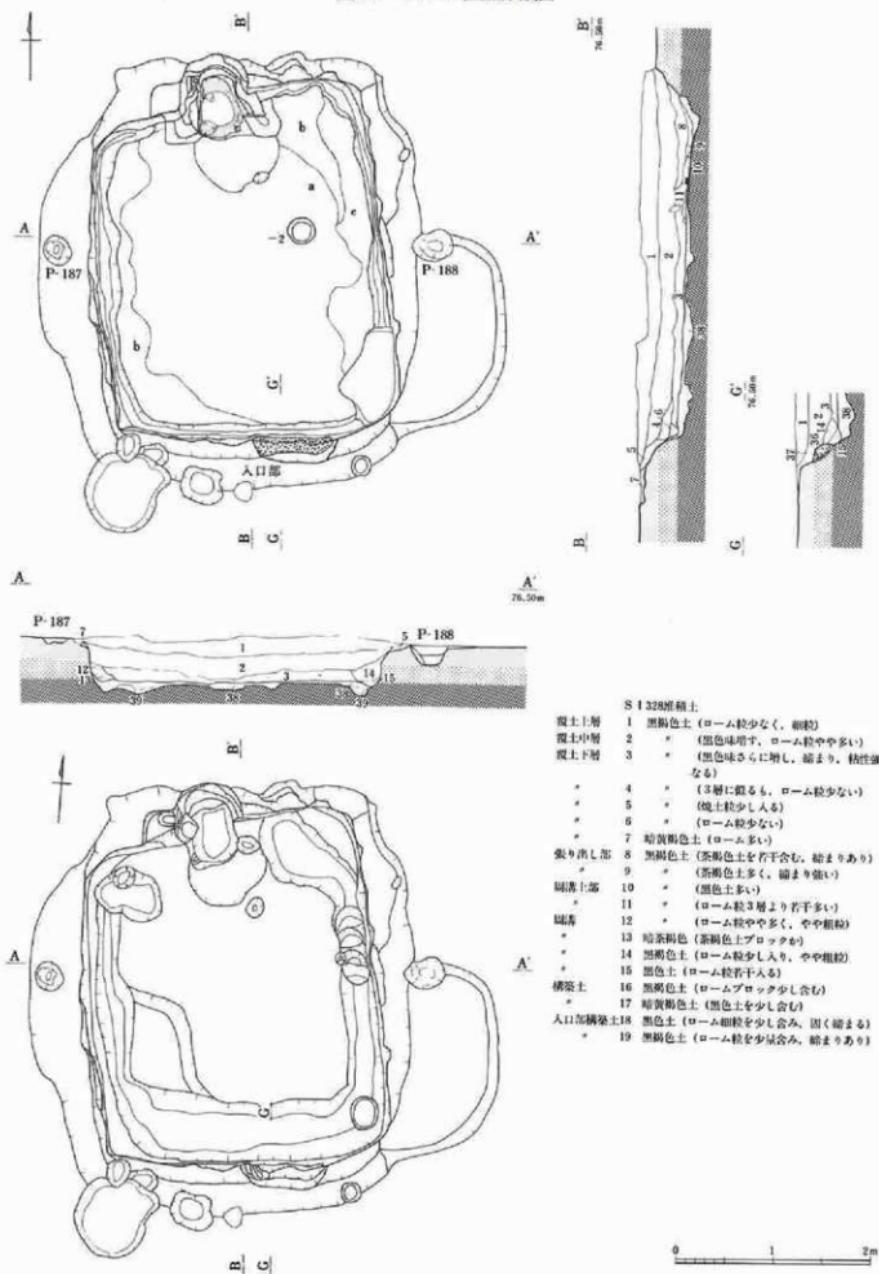
- 覆土 a 黒褐色土 (黒色味あり、粘性強い)  
 \* b \* (ローム・焼土粒若干入る)  
 \* c \* (ローム・焼土・粘土やや多く、茶褐色味あり)  
 \* d \* (\*層に似る、ローム・粘土・焼土粒若干入る)  
 \* e \* (ローム細粒、粘土粒少量含む)  
 \* f 黑褐色土 (炭化物多く含み、締まり弱い)  
 覆土 g 黑褐色土 (ローム粒若干入る)  
 \* h \* (ローム・粘土・焼土・黒色土を多く含む)  
 \* i \* (ローム・粘土少なく、黒色味あり)

0 50cm

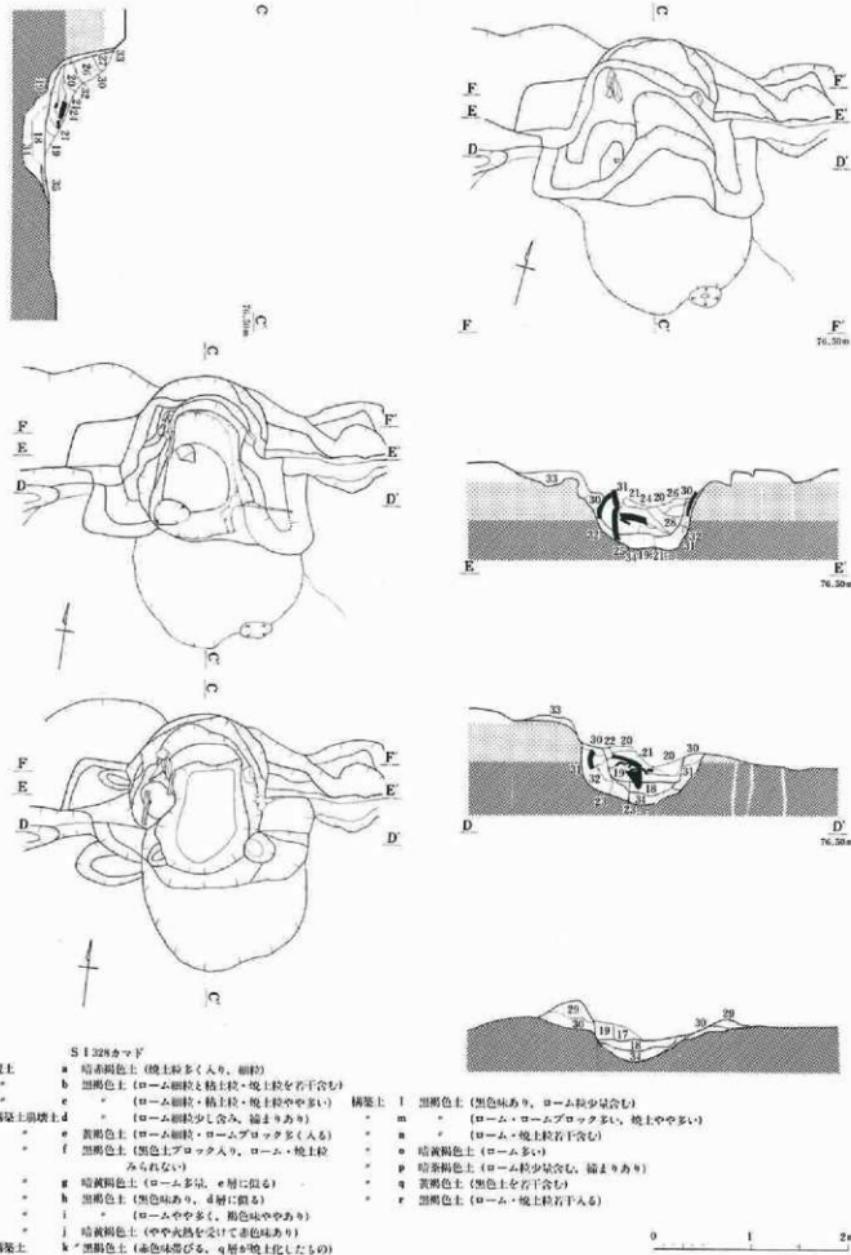
図面8 S1327・328住居跡実測図



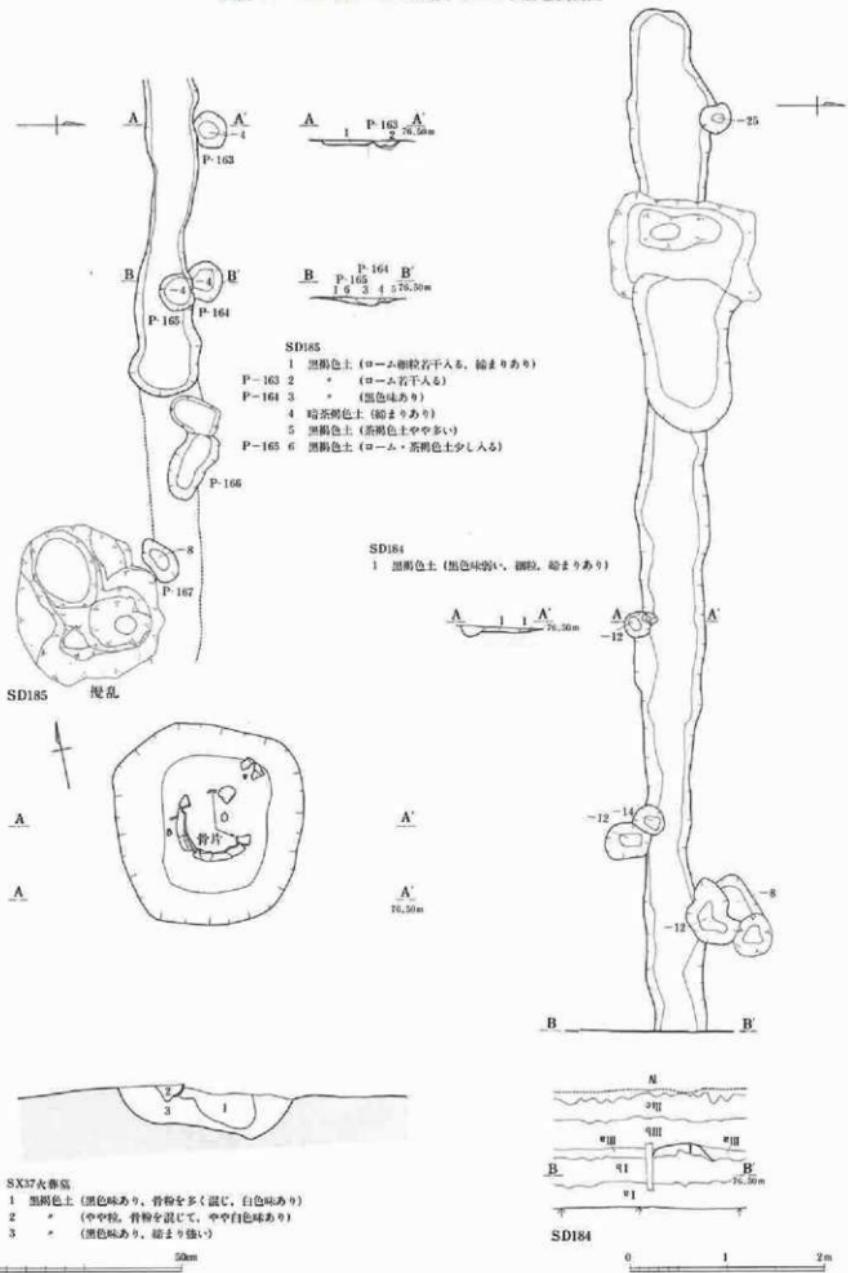
図面9 SI 328住居跡実測図



図面 10 S1328 住居跡実測図



図面11 SD184・185溝跡、SX37火葬墓実測図



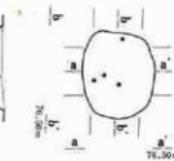
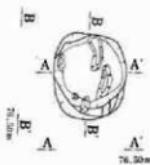
図面12 SK819・SK820・SK821・SK822・823土坑実測図



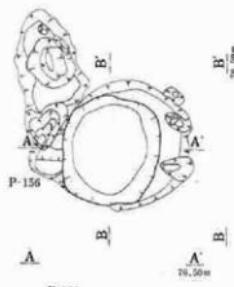
SK819  
1 黒褐色土(ローム極少)、細粒、縮まりあり  
2 " (ロームやや多い、黒色味やや強い)、細粒、縮まりあり



SK820  
1 黒褐色土(ローム極少量、細粒)  
2 " (ロームやや多い、黒色味やや強い)、細粒



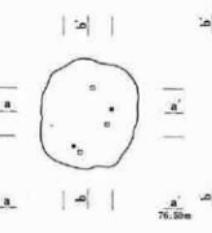
SK820遺物分布図



SK821



SK821  
1 黒褐色土(ローム若干、細粒、縮まりあり)  
2 " (ローム较多い、やや粗粒)  
3 " (黒色土多い、僅2cmの大ローム入り)  
4 " (黒色土多く、縮まり、粘性強い)  
P-156  
5 黒褐色土(ローム若干入る、やや粗粒)  
6 喀茶褐色土(やや粗粒)



SK821遺物分布図

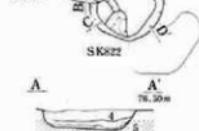


SK822  
1 黒褐色土(ローム粒、焼土粒、粘土粒を少含む)  
2 黒色土(ローム粒若干含む)  
3 黒褐色土(茶褐色土やや多い)  
SK823  
4 黒褐色土(1層に似るもやや暗い)  
5 黒色土(2層に似る)  
6 黑褐色土(3層に似る、茶褐色土粗粒やや

SK823



SK822-823遺物分布図

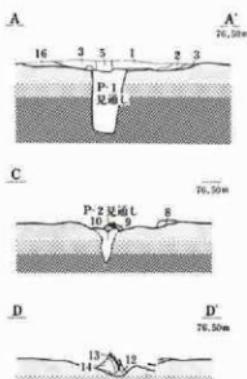
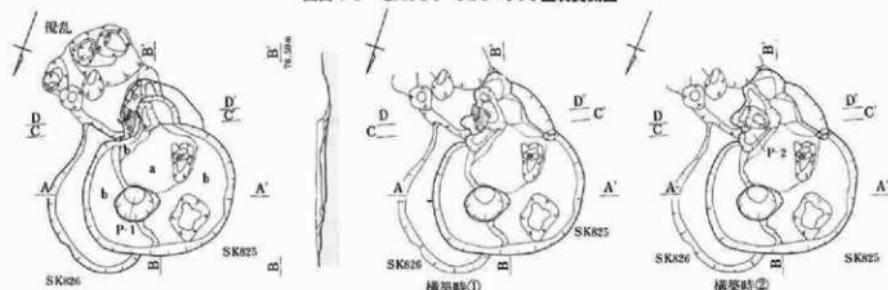


SK822-823



0 1 2 m

図面 1-3 SK825・826・863 土坑実測図



堆積土 1 黒褐色土 (ローム粒・焼土・粘土粒・炭化粒若干含む)

2 " " (やや茶褐色土多く含む)

3 助茶褐色土

4 黑褐色土 (焼土粒やや多く、結まりやや弱い)

5 " " (結まり強い、ローム粒若干入る)

6 黒色土

7 黑褐色土 (結まり弱い)

8 " " (ローム・焼土粒入る)

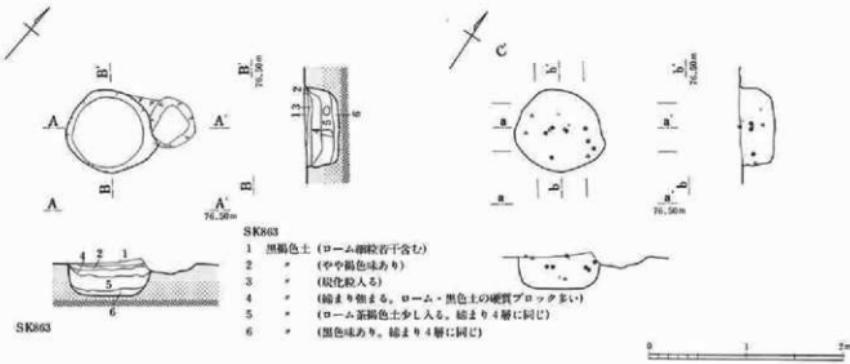
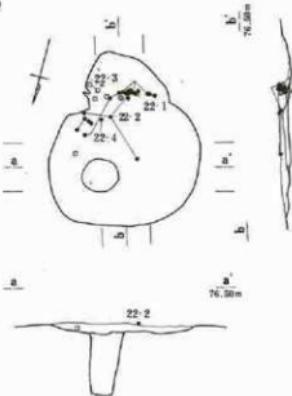
9 " " (黑色土多い)

10 助茶褐色土 (茶褐色土多い)

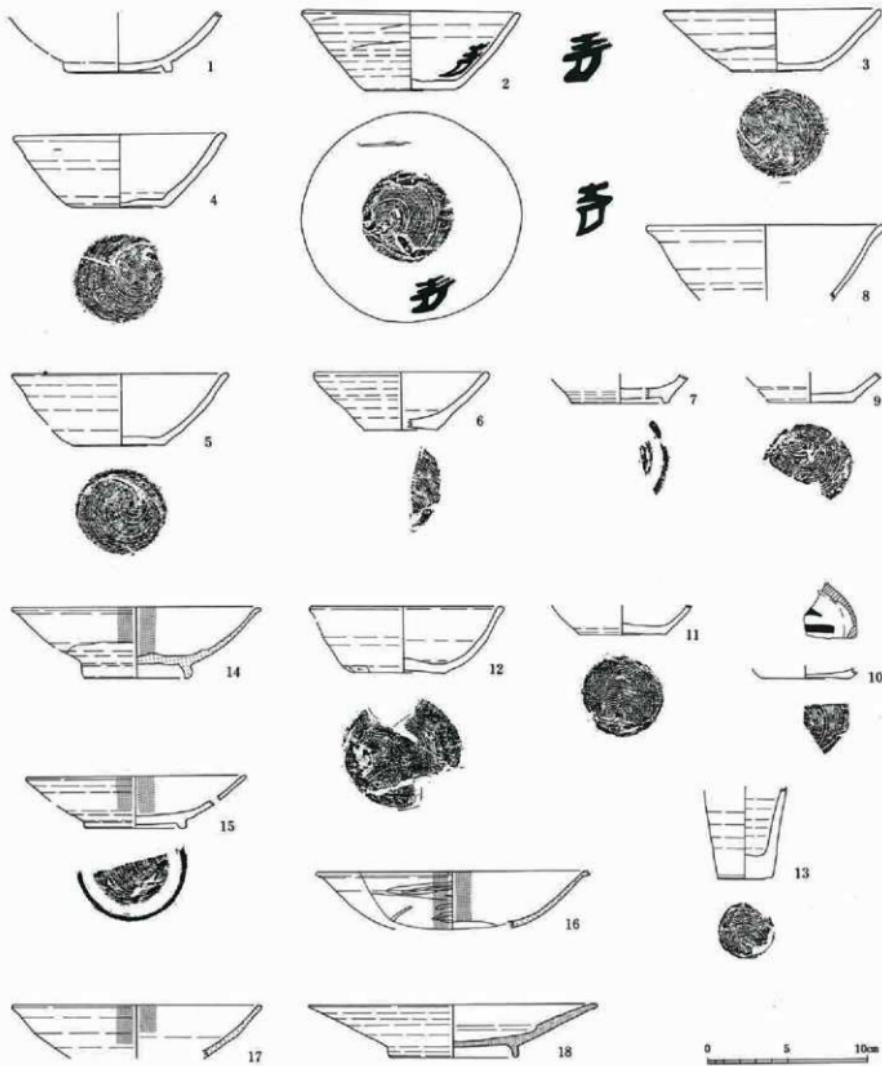
11 黑褐色土 (結まり、粘性あり)

12 黑褐色土 (ブロック)

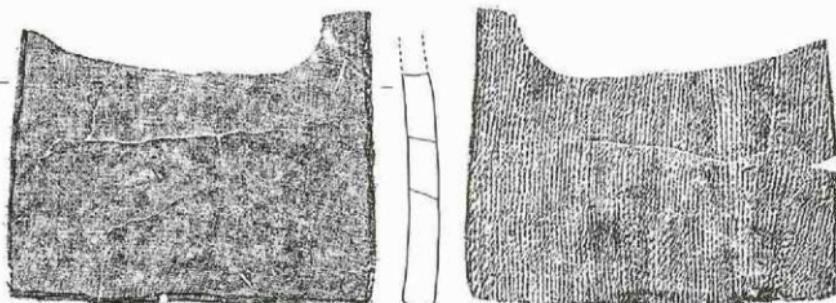
SK825



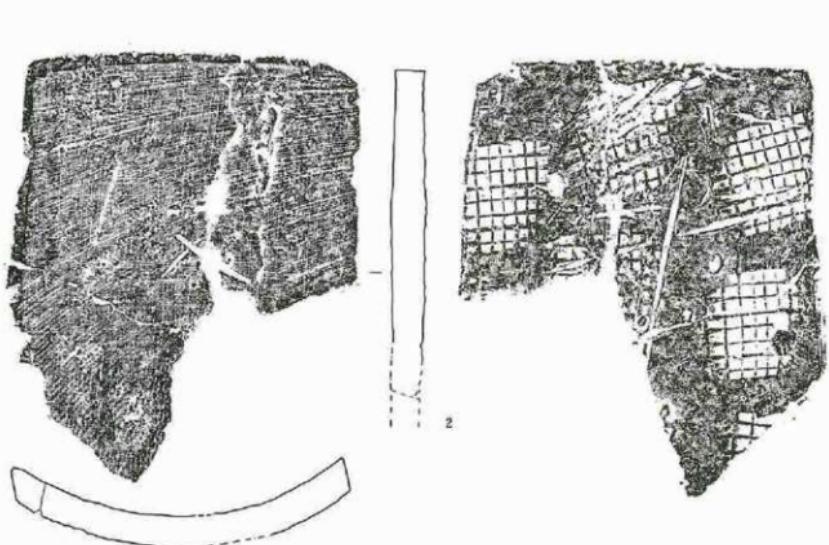
図面14 S1325住居跡出土遺物



図面15 S1325住居跡出土遺物



1



2



3



4

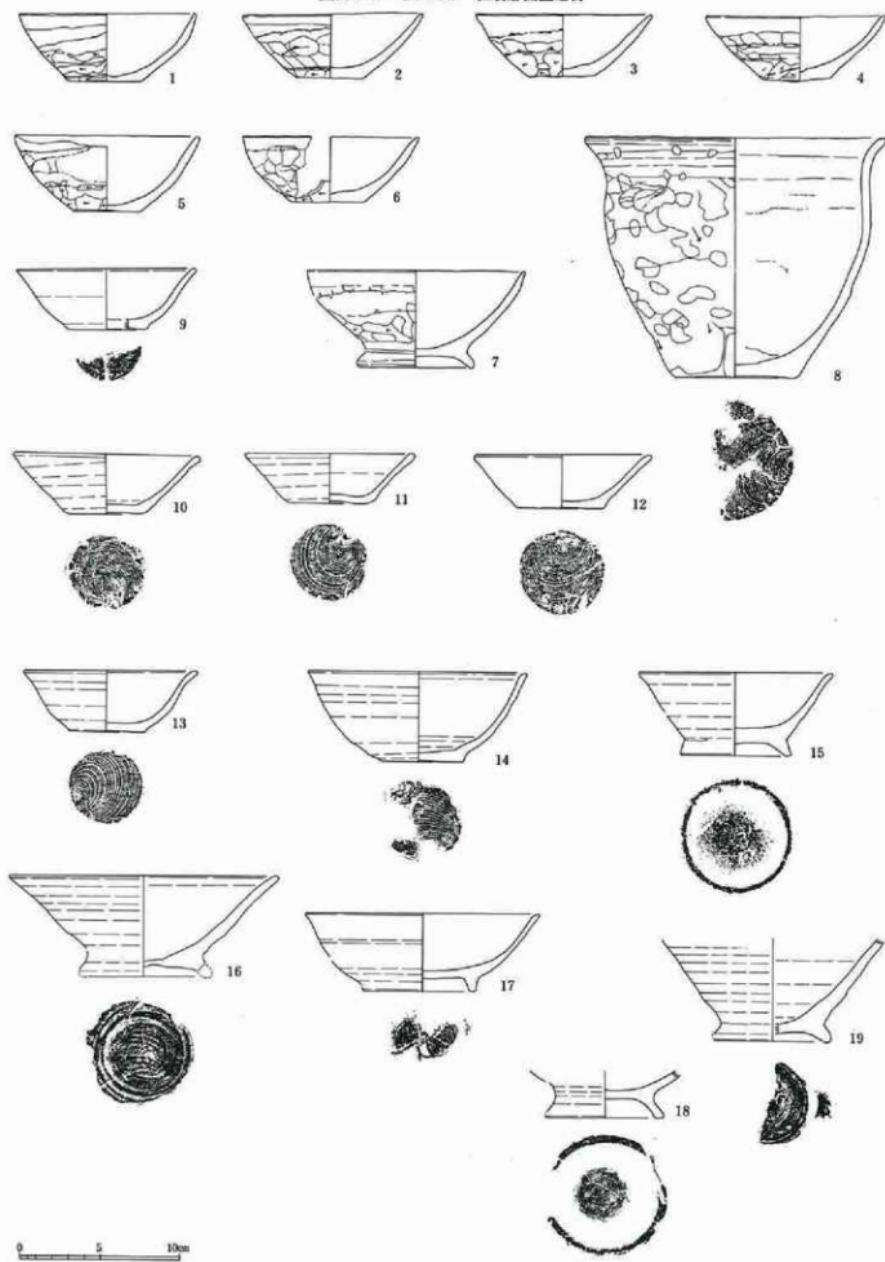


5

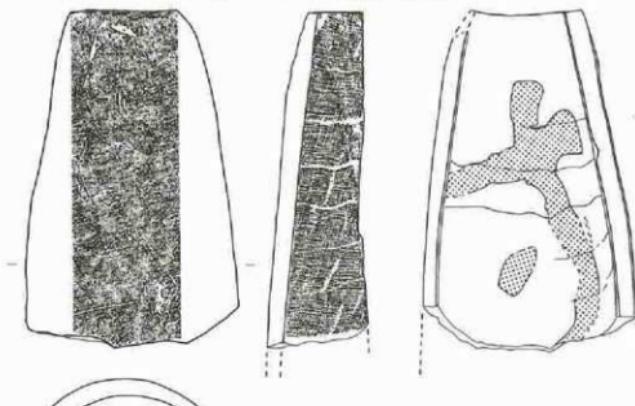
0 10 20cm

0 5cm

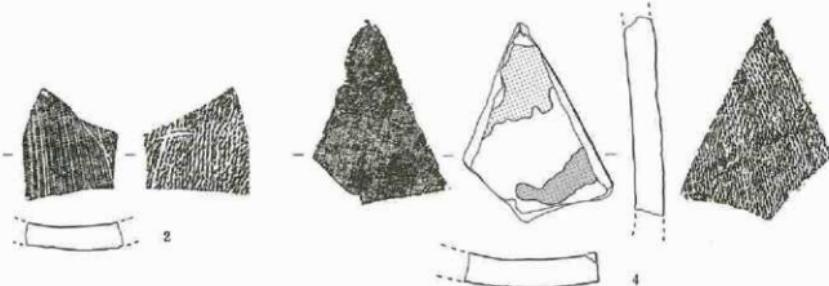
図面18 S1328 住居跡出土遺物



図面 17 SI326 住居跡出土遺物

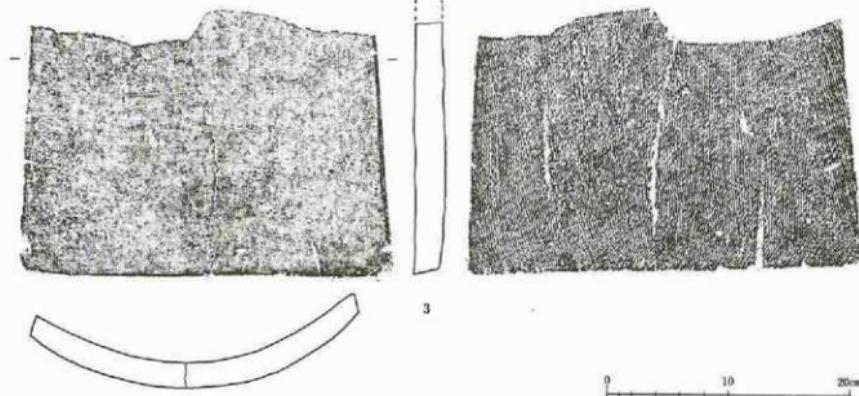


1



2

4



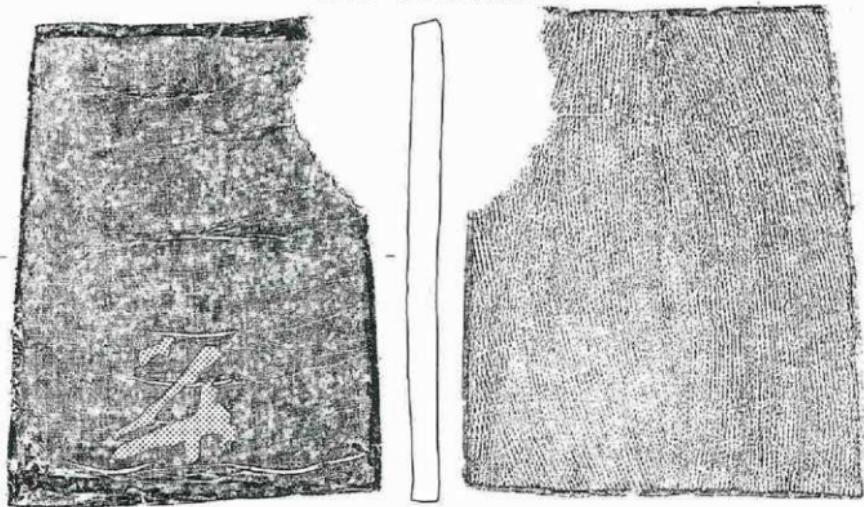
3

20cm

0

10

図面18 S1326住居跡出土遺物



1

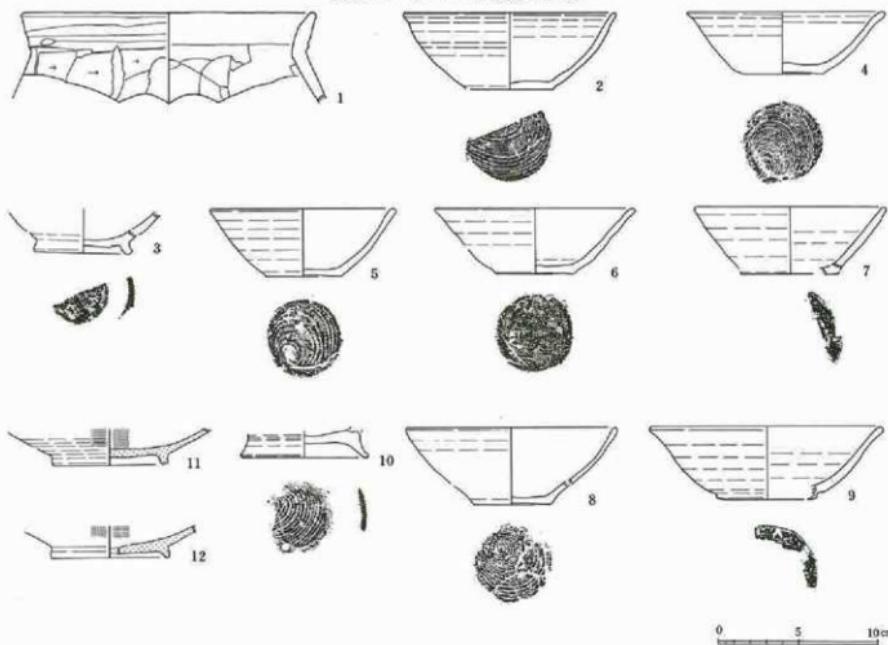
2

3

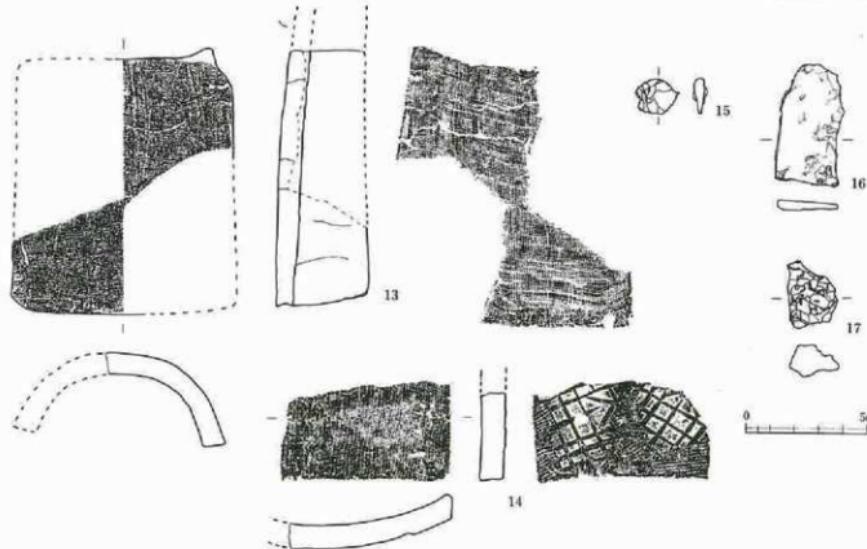
0 10 20cm

6 5cm

図面19 S1327住居跡出土遺物



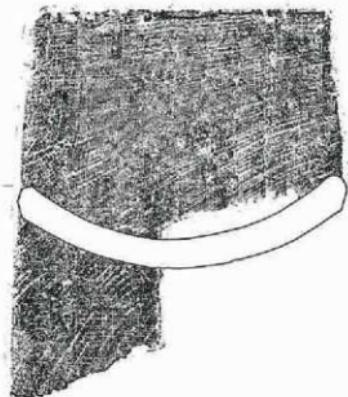
0 5 10cm



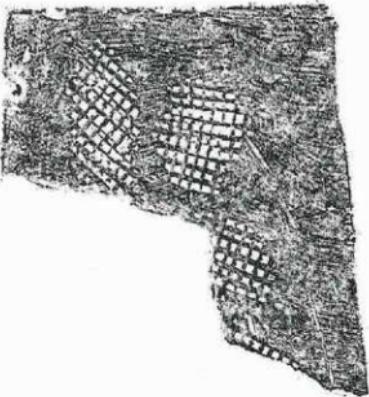
0 5cm

0 10 20cm

図面 20 S1327 住居跡出土遺物



3



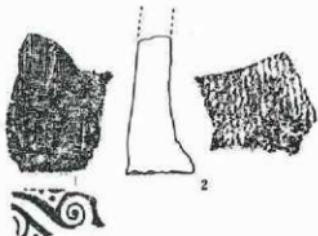
4



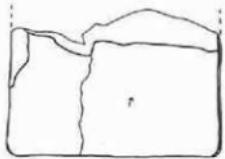
1



0 10 20cm



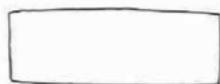
2



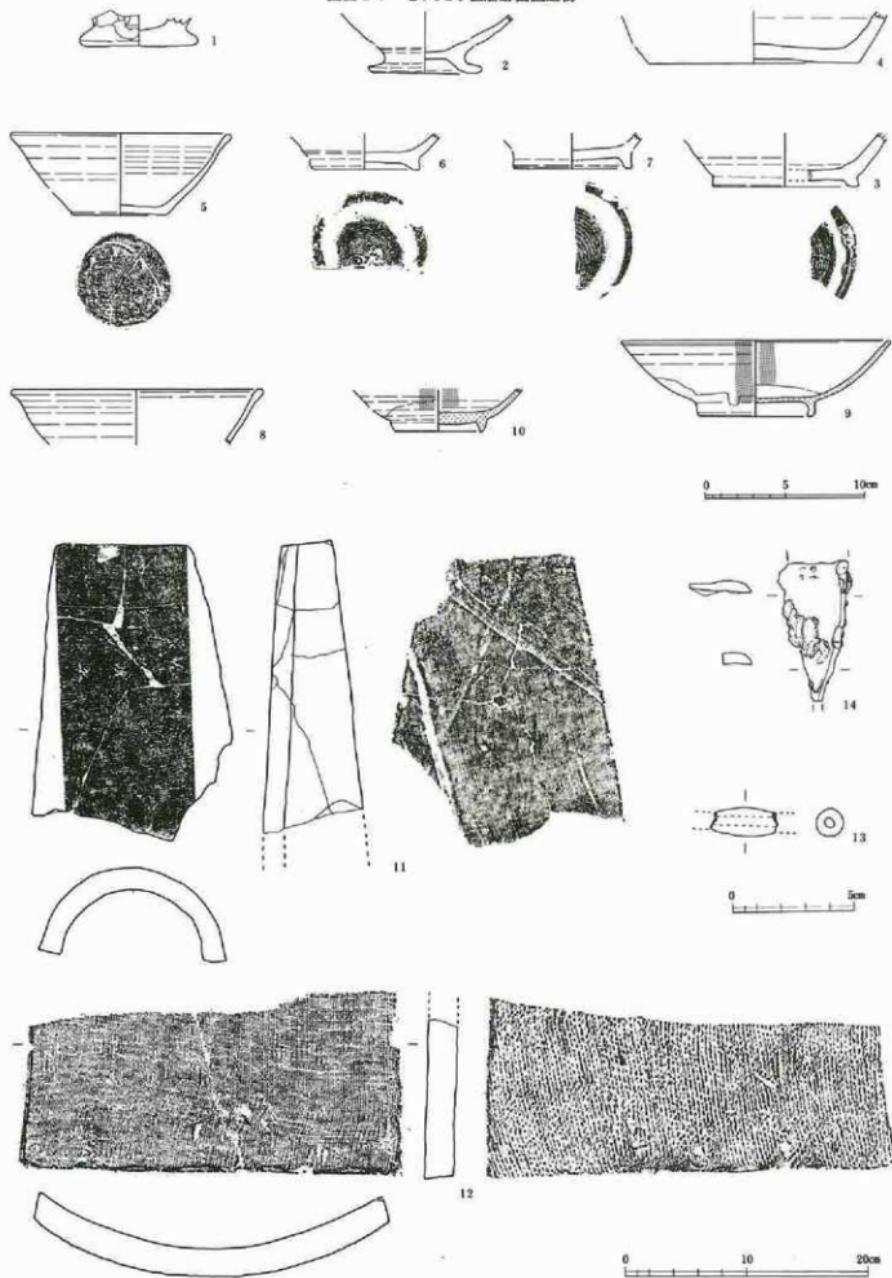
7



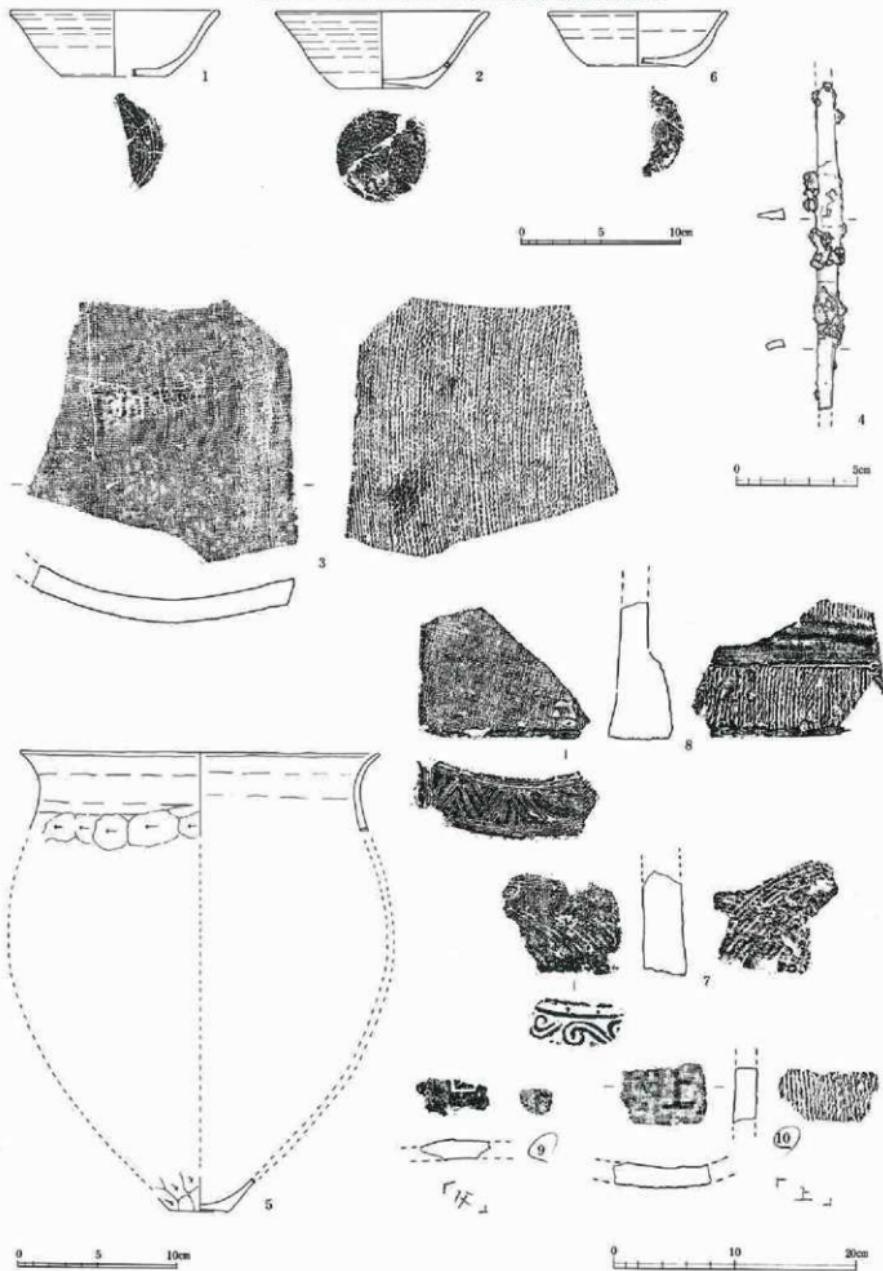
5



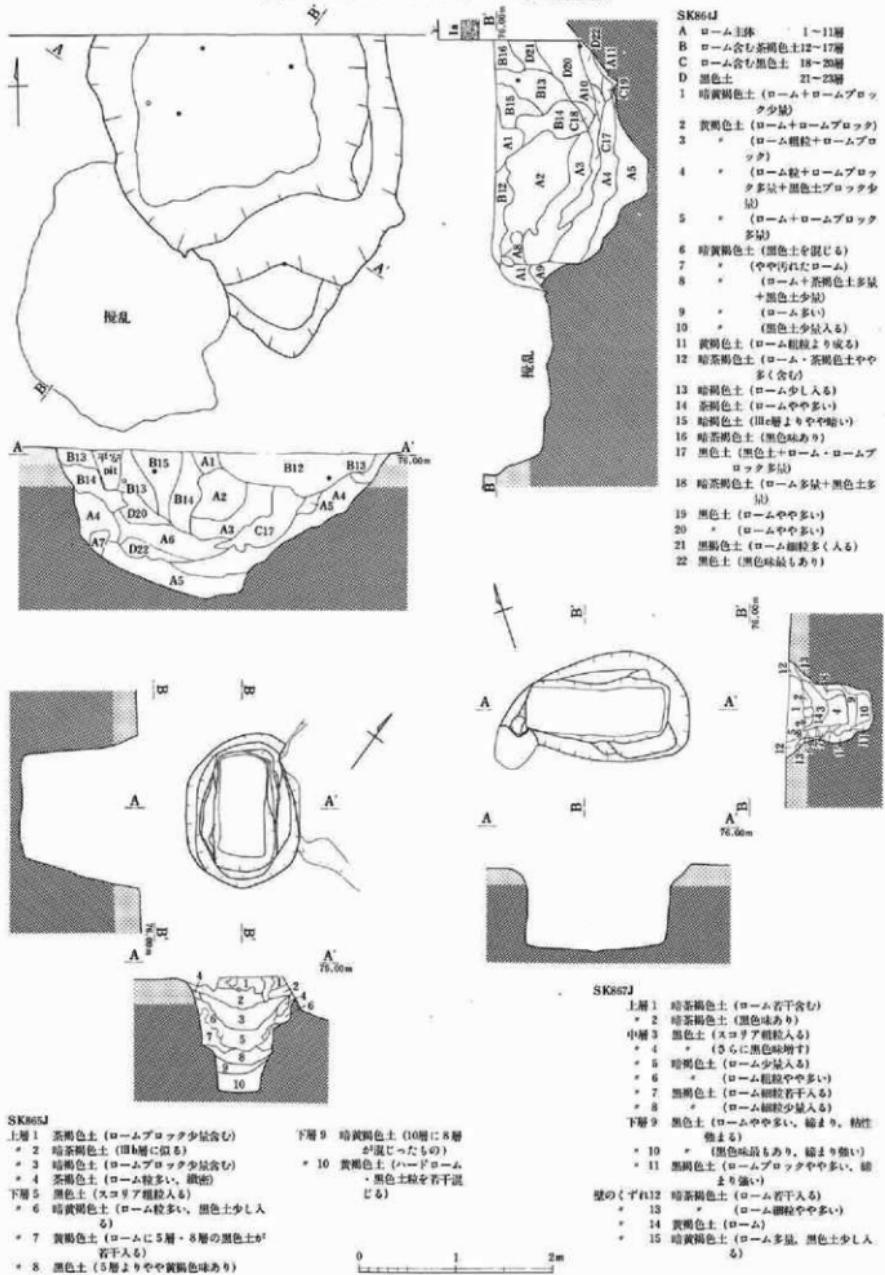
図面21 SI328住居跡出土遺物



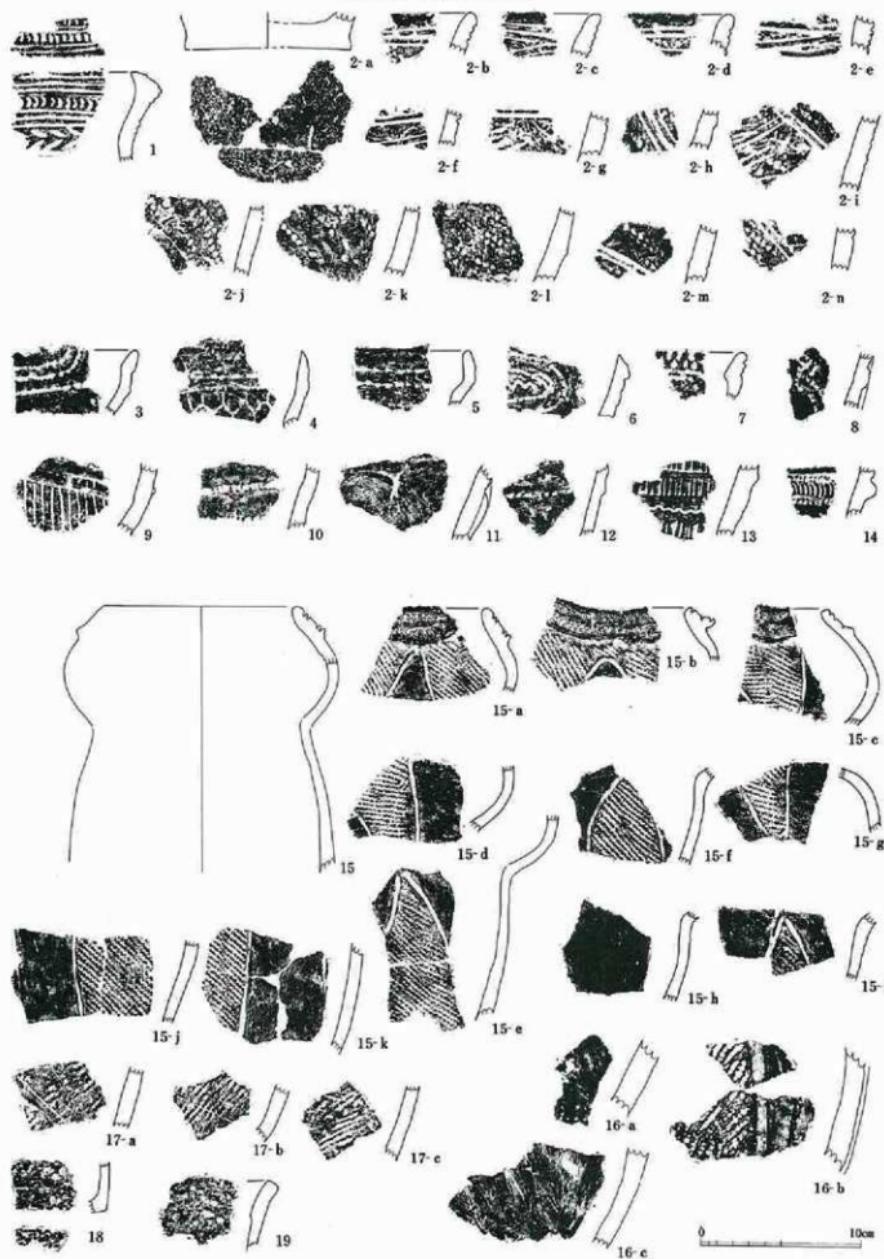
図面22 SK825土坑、SX37火葬墓、遺構外出土遺物



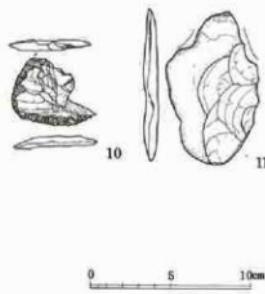
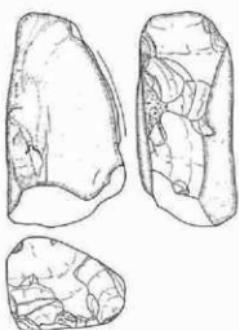
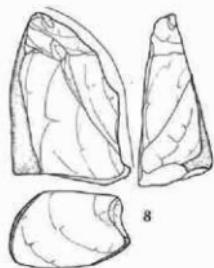
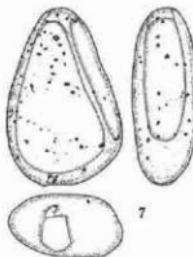
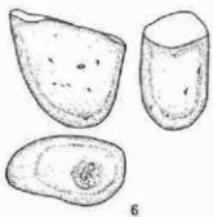
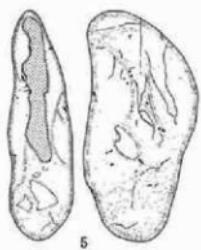
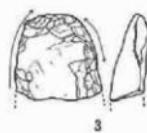
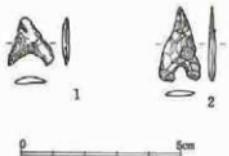
図面23 S1864J・865J・867J土坑実測図



圖面 2-4 遺構外出土土器



圖面 2.5 遺擣外出土石器





# 図 版



図版1 発掘状況



1. 発掘着手状況（東から）  
昭和59年7月5日



2. 表土掘削状況（西から）  
昭和59年7月5日



3. 仮囲い状況（北東から）  
昭和59年12月22日



4. 歴史時代遺構検出状況・全体（東から）  
昭和59年7月26日



5. 歴史時代遺構検出状況・東半（南から）  
昭和59年7月26日



6. 歴史時代遺構調査状況（東から）  
昭和59年9月12日



7. 気球による全景撮影状況・準備（南から）  
昭和59年12月23日

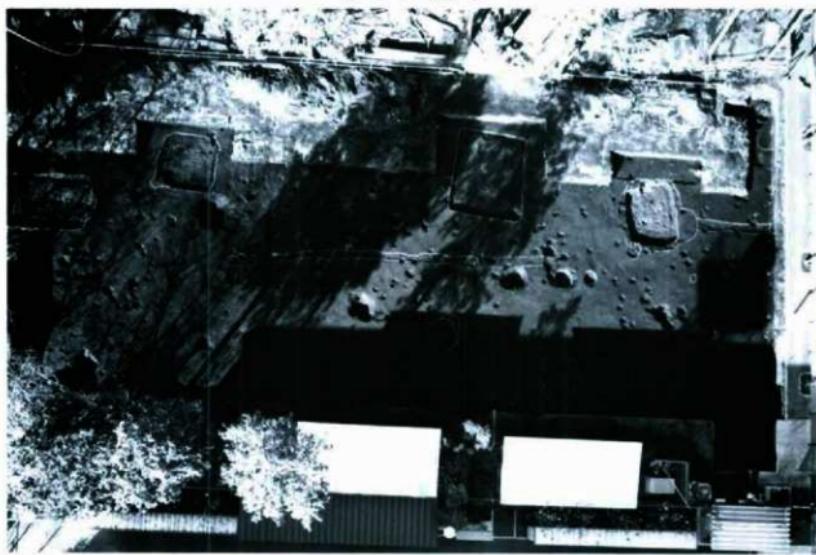


8. 神文時代遺構調査状況（SK865J）  
昭和60年2月13日

図版2 歴史時代調査区全景



1. 全 景(東から)



2. 気球による全景

図版3. SB78, 80柱立柱建物跡



1. SB78 全景 (北から)



2. 2-2柱穴  
土層断面 (東から)



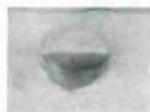
3. 2-3柱穴  
土層断面 (東から)



4. 3-3柱穴  
土層断面 (北から)



5. SB80 全景 (南から)

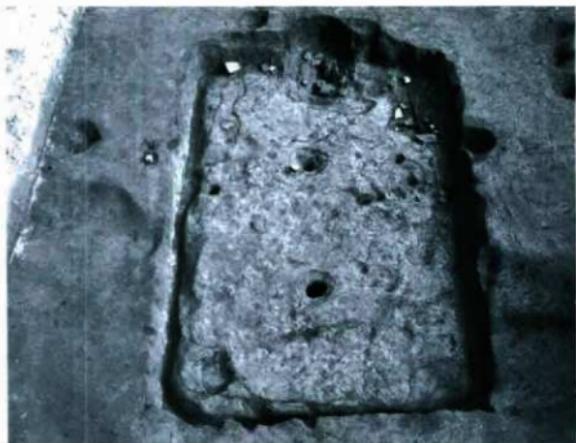


6. 1-1柱穴  
土層断面 (南から)



7. 2-1柱穴  
土層断面 (南から)

図版4 S1325 住居跡



1. 全 景 (西から)



2. 構築時全景 (北から)



3. 遺物出土状態・下層 (北から)



4. 南北土層断面 (東から)



5. カマド全景 (西から)

図版5 S1326住居跡



1. B+C期全景（北から）



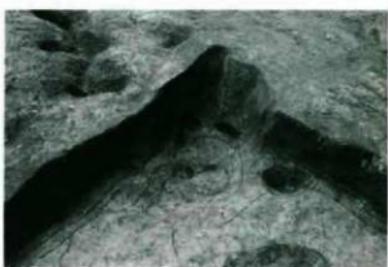
2. A期全景（東から）



3. 南北土層断面（東から）

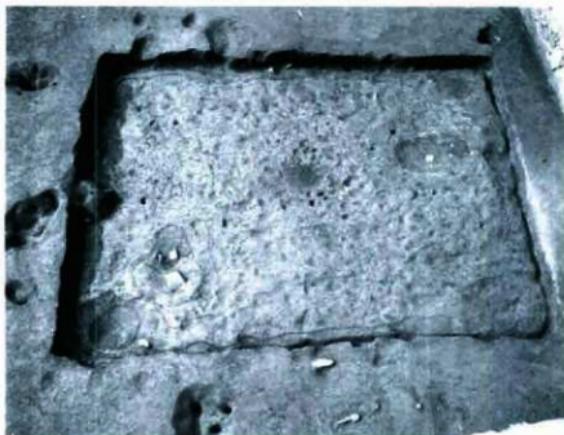


4. A期南西カマドE-E' 土層断面（東から）



5. A期南西カマド構築時（北東から）

図版6 S1327住居跡



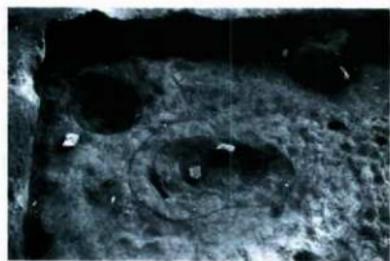
1. B期全景（東から）



2. 遺物出土状態（北から）



3. A期北カマド全景（南から）



4. B期南東カマド（北から）



5. 入口部全景（北から）

図版7 S1328住居跡



1. 全 景 (北から)



2. 遺物出土状態 (東から)



3. 南北土層断面 (西から)



4. カマド東西土層断面 (南から)

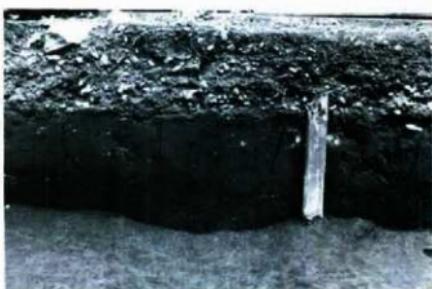


5. 入口部土層断面 (東から)

図版8 SD184・185遺跡



1. SD184全景（西から）



2. SD184 B-B' 土層断面（西から）



3. SD185全景（東から）



4. SD185 A-A' 土層断面（東から）



5. SD185 B-B' 土層断面（東から）

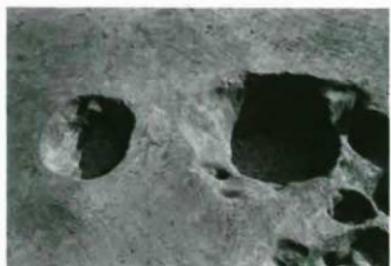
図版8 SK819～823土坑



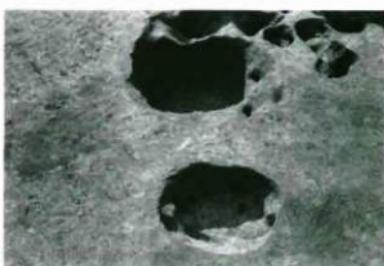
1. SK819全景



2. SK819南北土層断面（東から）



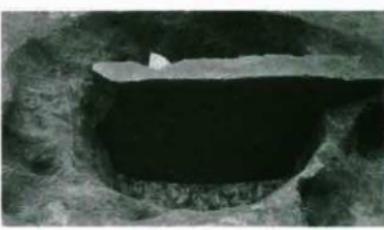
3. SK820・821全景（北から）



4. SK820・821全景（東から）



5. SK820南北土層断面（西から）



6. SK821東西土層断面（北から）



7. SK822・823全景（北から）



8. SK822東西土層断面（南から）



9. SK823南北土層断面（東から）

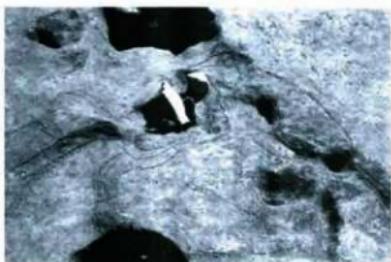
図版10 SK825・826・863土坑



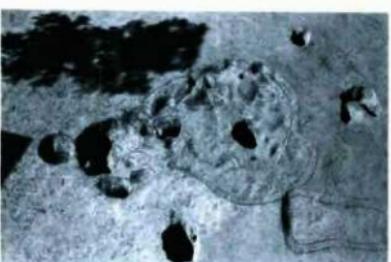
1. SK825全景(北から)



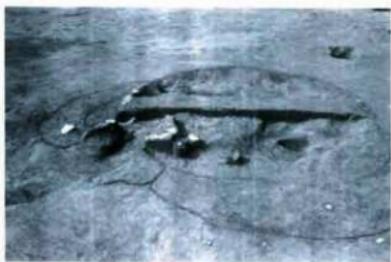
2. SK825遺物出土状態(東から)



3. SK825構築時①カマド部分(北から)



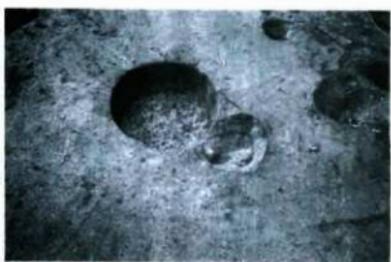
4. SK825構築時②SK826土坑全景



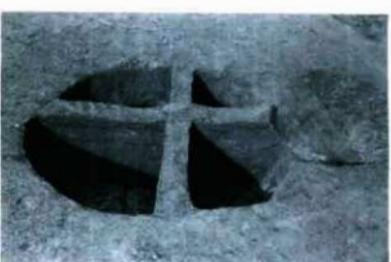
5. SK825南北土層断面(東から)



6. SK826南北土層断面(西から)



7. SK863全景(東から)



8. SK863東西土層断面(南から)

図版 11 SX37火葬墓



1. 上面検出状態（東から）



2. 東西土層断面（南から）



3. 骨蔵器検出状態（東から）



4. 骨蔵器検出状態（北から）

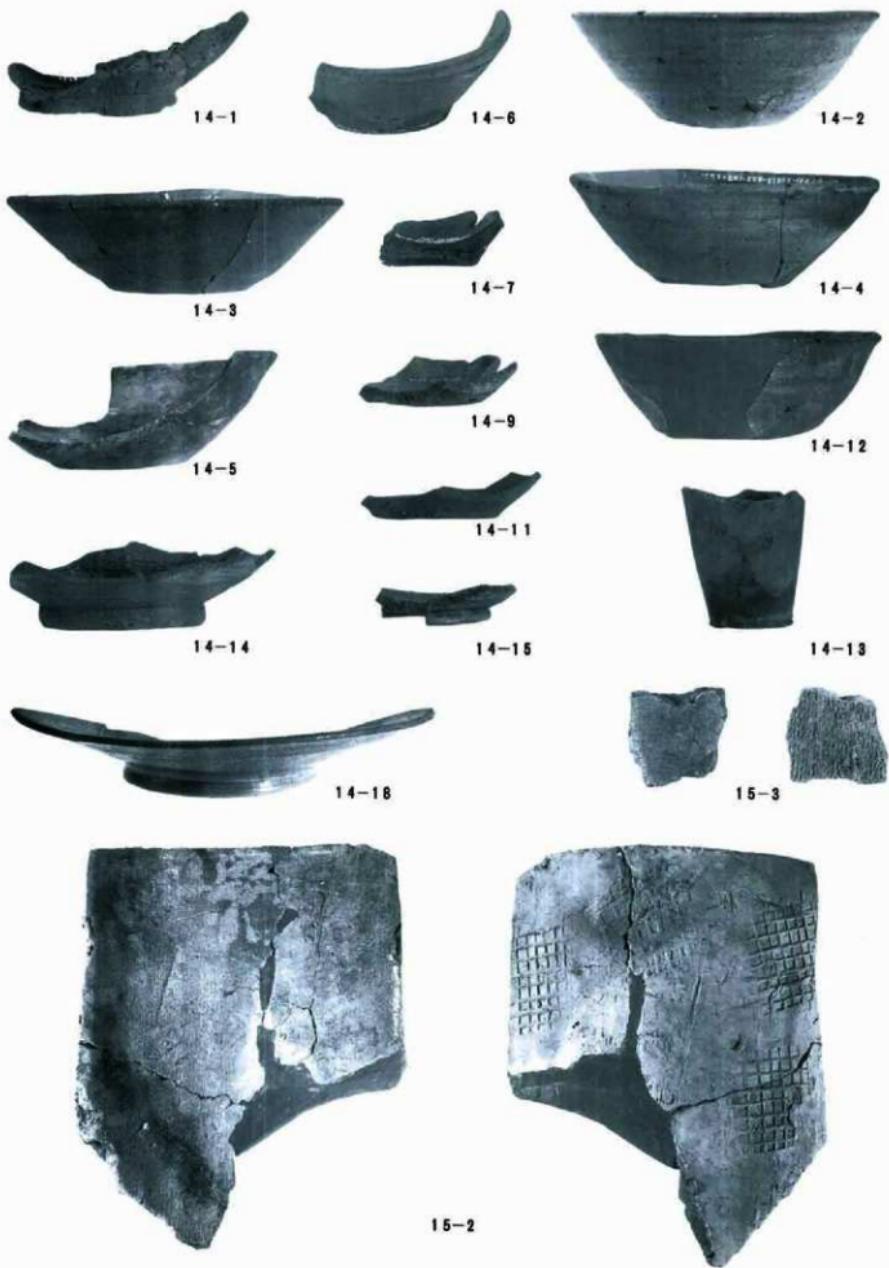


5. 掘り方全景（東から）



6. 掘り方全景（北から）

圖版 12 S1325 住居跡出土遺物



図版13 S1325・326住居跡出土遺物



15-1



15-4



15-5



①



16-8



16-1



16-2



16-5



16-3



16-4



16-7



16-6



16-9



16-12



16-10



16-11



16-13



16-14

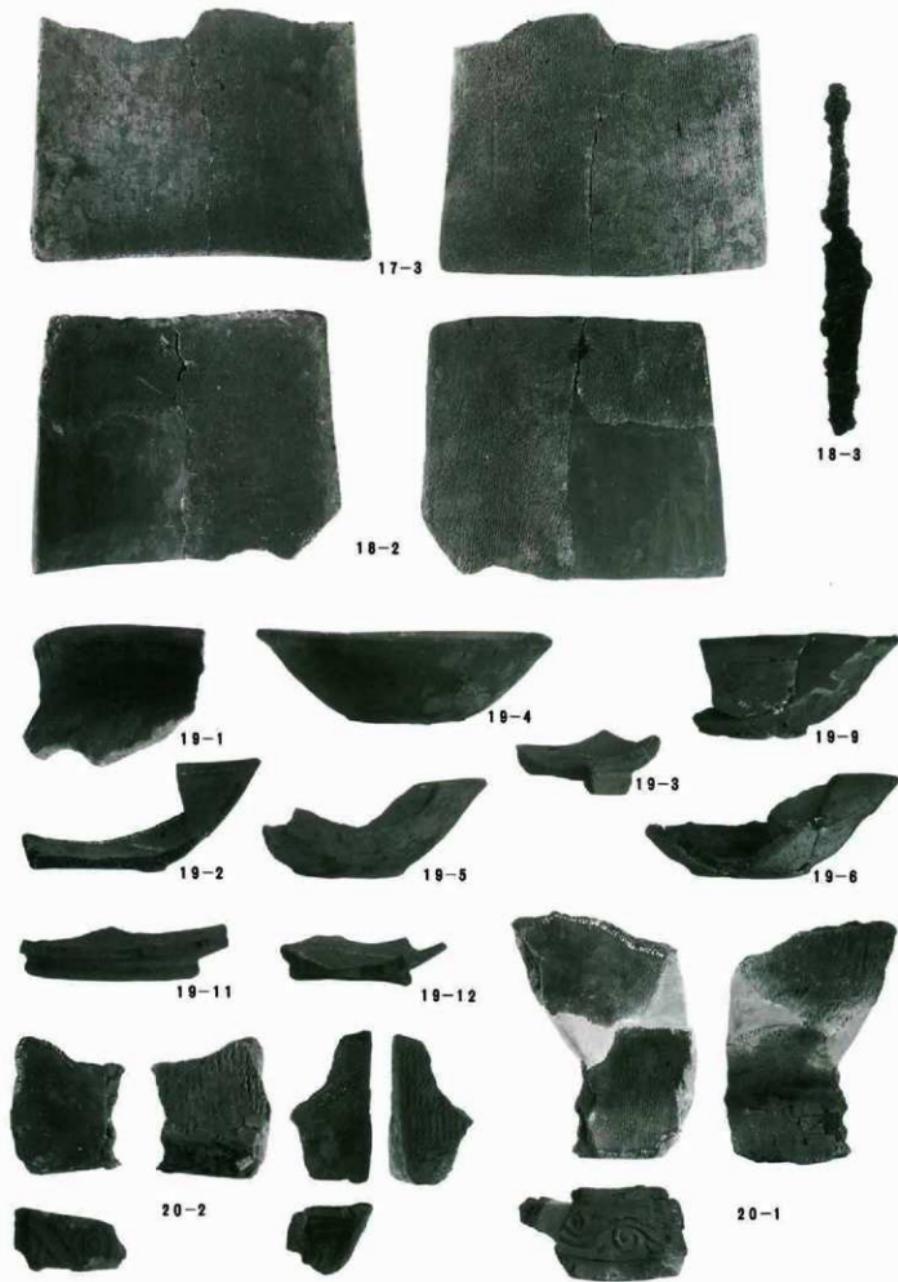


16-15

図版 14 S 1326 住居跡出土遺物



圖版 15 S 1326・327 住居跡出土遺物



圖版 16 S1327住居跡出土遺物



20-3



19-16



①



19-17



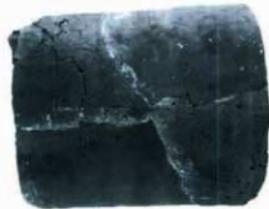
19-18



20-4



19-13



19-14



圖版 17 S 1328 住居跡出土遺物



21-1



21-2



21-3



21-4



21-7



21-5



21-9



21-8



21-10



21-11



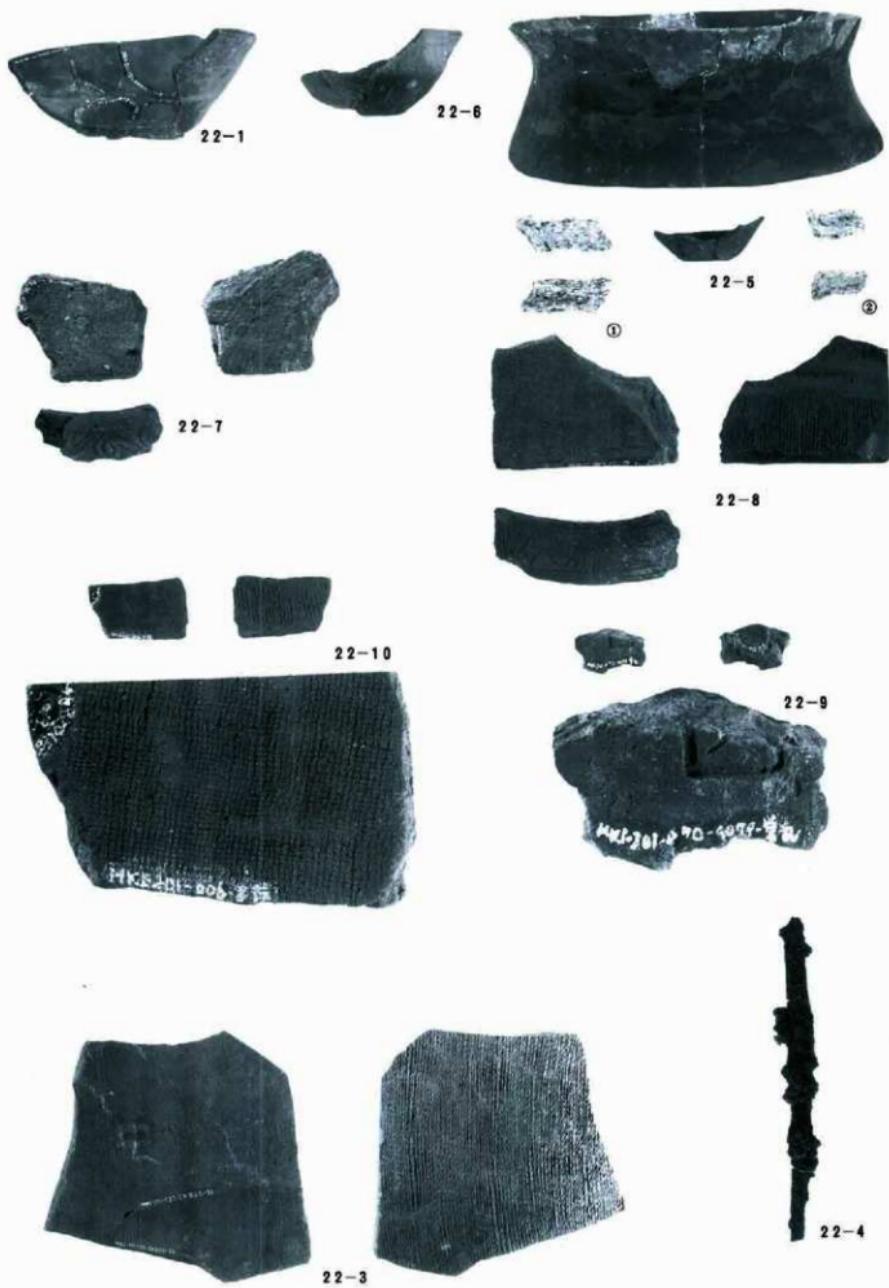
21-12



21-13

21-14

圖版 18 SK 825 土坑, SX 37 火葬墓, 遺構外出土遺物



図版 19 桜文時代全景、遺物出土状態



1. 調査区東半部全景（北から）



2. 調査区東半部全景（西から）



3. 調査区東半部遺物出土状態（北から）



4. 調査区西半部全景（東から）



5. 調査区西半部全景（北から）



6. 調査区西半部遺物出土状態（東から）

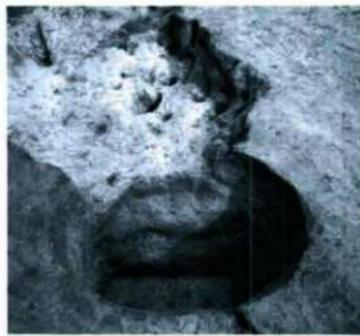
図版 20 SK864J・865J・867J土坑



1. SK864J全景（南から）



2. SK864J東西土層断面（北から）



3. SK865J全景（南から）



4. SK865J東西土層断面（南から）

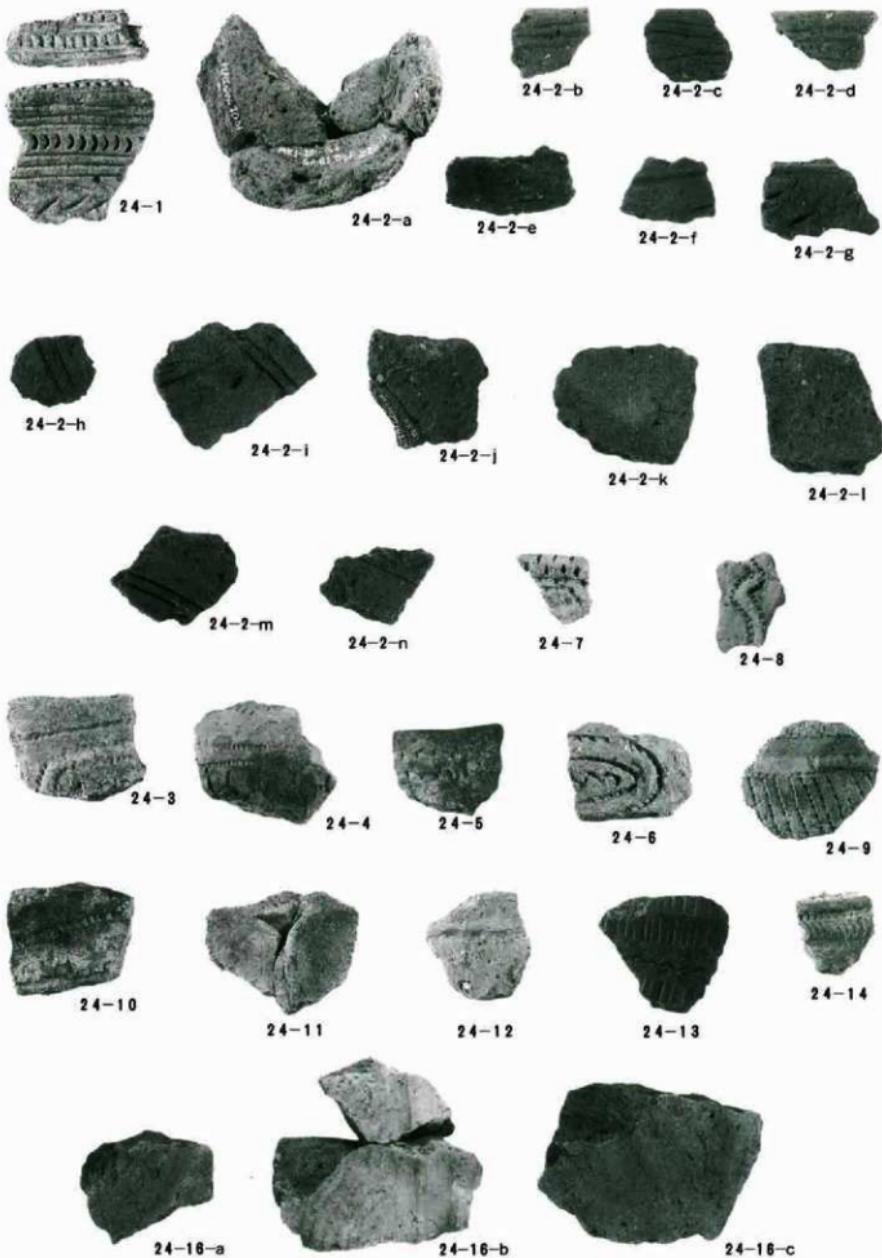


5. SK867J全景（東から）

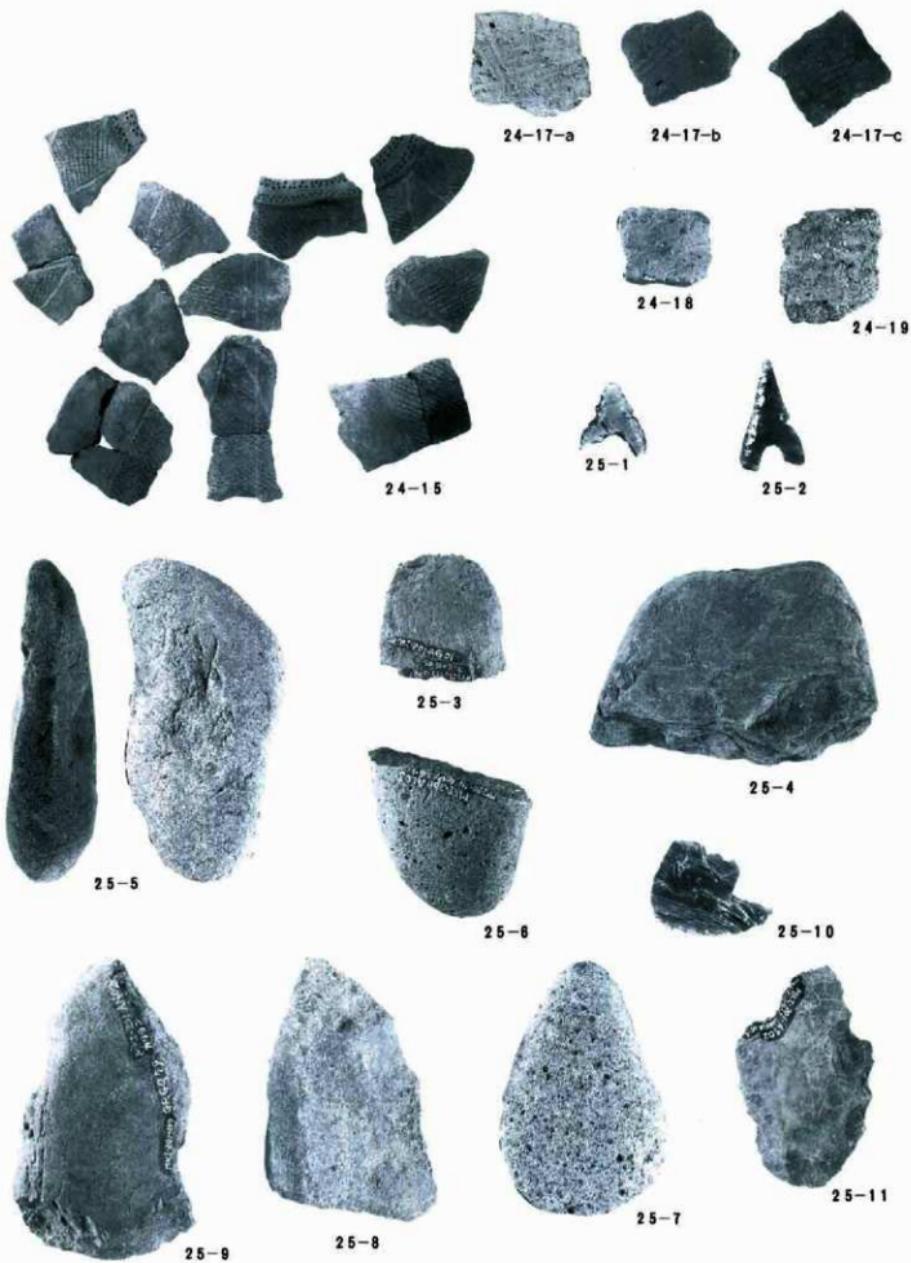


6. SK867J南北土層断面（東から）

圖版21 繩文土器



図版 22 織文土器・石 器



図版 23 先土器時代調査区



1. 全 景 (南から)



2. 南壁土層断面 (北から)



3. 発掘終了状況 (西から)  
昭和60年5月22日

## 武藏国分寺跡発掘調査概報 XI

---

- 北方地区・佐藤国分寺共同  
住宅増築工事に伴う調査 -

発行日 昭和 62 年 3 月 31 日

編著者 国分寺市遺跡調査団

© (団長 滝 口 宏)

発行所 国分寺市遺跡調査会

(国分寺市西元町1-15-15)

印刷所 第一法規出版株式会社

---

令和 4 年(2022)8 月 29 日 デジタル版作成  
個人情報削除